〔表紙〕

新納久仰雑譜

弘化五年申正月ヨリ
嘉永三年戌十月迄

弘化五年戊申正月より

一正月三日、年頭之御規式被遊　御請候ニ付、家ニ付而之持参太刀ニ而御土器頂戴仕候事、

一同廿六日、同席川上東馬殿若年寄御役被仰付、大目付嶋津主殿当御役ニ而寺社奉行勤被仰付、大目付江は名越右膳被仰付候事、

口上覚

〔朱書〕「願之通御暇被下候、　石見」

二月

私嫡子新納次郎四郎事腹之痛有之、段々尽手為致養生候得共未寸切と全快不仕、此涯湯治相応可仕旨療医より承申候、依之三廻御暇被成下度奉願候、左様御座候ハ、、以御蔭樋脇温泉江為差越、得と入湯為仕度奉存候、此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

但療医証文相添差上申候、

正月廿五日　　新納内蔵

証文

新納次郎四郎殿事、腹之痛有之、私療治仕候得共今以全快無之、此涯湯治相応可仕及見申候、仍而如是御座候、以上、

正月廿五日　　表医師
伊集院郷士
新村謙齋

右之通月番御用人新納主税江差出置候処、二月朔日同人取次を以願之通被仰付候事、

一御用之儀候間、明廿八日四時可被罷出旨、笑左衛門殿（調所広郷）

依御差図申達候、以上、

正月廿七日　　新納主税

新納内藏殿

〃

御用之儀候間、明廿八日可罷出旨笑左衞門殿依御差図被仰渡趣奉畏候、以上、

正月廿七日　　新納内藏

新納主税殿

〃

一廿八日四時罷出候処、於敷舞台主税引進ニ而笑左衞門殿より左之通被仰付候、

年頭着座　　新納内藏

右は先祖格別武之功有之候以御取訳、持参太刀被仰付置候付、別段之以

思召、年頭之儀は川上式部・山田轉一列持参太刀着座被仰付候付、家格順々罷出着座、八朔之儀は是迄之通被仰付候、且御太刀備席・御盃頂戴席等是迄之通被仰付候、

正月　　笑左衞門

右之通被仰付、左候而川上式部・山田轉ニ茂今日着座等之儀被仰付候事

右ニ付、大目付以上并取次御用人江口上書を以御礼廻いたし候、左候而、今日家内中并兼而出入之面々打寄致祝候事、

一川上式部・山田轉并濱田彦次郎・押川藤七郎難有被仰付候次第、為見合左ニ記ス、

一年頭八朔着座　　川上式部

右は先祖抜群之勲功有之候以御取訳、持参太刀着座無之御盃頂戴被仰付置候得共、格別之武功別段之以

思召右之通被仰付候、左候而年頭之儀は新納内藏・山田轉儀も別段之以

思召、一列着座被仰付候、八朔之儀は老人着座ニ而御

祝儀申上候、且御太刀備席・御盃頂戴席等是迄之通被仰付候、

一年頭持参太刀

一着座

一御盃頂戴

一八朔中紙進上

山田　轉

右は先祖格別之武功有之、年頭持参太刀・八朔中紙進上被仰付置候処、六代之祖無調法之儀有之、被成御免候ニ付而は、不容易御事候得共、格別之勲功旁難被捨置、別段之以御取訳、右之通被仰付候条、年頭ハ川上式部・新納内藏一列家格順々罷出着座、八朔之儀は内藏両人家格順々壱人宛罷出、不及着座御祝儀申上、且御太刀備席等新納内藏同様被仰付候、

正月　笑左衛門

亡濱田主右衛門名跡相続
御小姓与
宮原甚五兵衛次弟

宮原彦次郎事
濱田彦次郎

右は濱田民部左衛門事、抜群武功等為有之者候処、子孫依科、家被召禿候得共、格別抽誠忠候家筋夫形被捨置候儀別而御残多被思召上、民部左衛門血統之者罷在候ハヽ、濱田家相続可被仰付との御事ニ而被及御糺方候処、無間違血統之者無之、然処本濱田名字之亡林右衛門養父濱田主右衛門娘彦次郎江相嫁居候旨相聞得、女ニ而は全血統之筋ニは相当兼候得共、外ニ血統之者無之候ニ付、無御拠彦次郎事主右衛門聟之儀ニ茂有之候ニ付、林右衛門儀世代被相削、主右衛門名跡彦次郎江別段之以御取訳相続被仰付候、

実家
亡押川强兵衛名跡
相続
御料理役
久保藤七郎事
押川藤七郎

右は押川强兵衛公近事、抜群武功有之者候処、子孫强

兵衛事致病死、嫡子六兵衛儀不行跡有之嶋方居住被仰付置、跡職之儀は未何分不被仰渡、然処於嶋元病身罷成、往々継目相続、家格之御奉公相調者ニ無之由候、付而は家跡断絶同前之姿ニ而別而御残多被思召上候、就而ハ藤七郎儀久保八右衛門継目養子被仰付家督之者ニは候得共、公近血脈連続之者故、格別抽誠忠候功労旁別段之以御取訳、実家相続被仰付、六兵衛儀は家内兄被仰付候、

正月　　笑左衛門

一右之通当家之儀は年頭着座ニ而御祝儀申上候様被　仰付候儀、誠ニ以難有次第得と及思慮候処、此内大口江霊社御取建之事も有之、大口筋御巡見之節は御立場相成、段々難有御意をも被為在御帰殿之砌は乍御内々御肴料進上ニ而御礼申上候儀も有之、此節右之通又々難有被仰付候付而は、川上・山田之両家と違ひ重畳難有御取扱ニ付、御内証より御礼申上候而は何様可有之哉と御側役二階堂志津馬殿江内談致し度候得共、彼方御用多ニ而面会六ヶ敷候ニ付、新納八郎太を以廿九日得と相伺候処、致吟味何分可相達との事ニ而、翌朔日同人江被申聞候は、尤之考ニ候間、御内々鮮鯛一折進上ニ而御礼申上候方可宜、左候而何れ明二日進上ニ而可然、無左候得は明後三日より東目　御巡見御出立ニ付其通可致、就而は川上式部殿ニ茂席頭且御役をも同様之事ニ付、是も御礼有之方可宜ニ付、拙者より致引合候ハ、可為同意旨もしらせ有之候付、則川上氏江引合候処、至極之同意ニ而申談、御肴は御膳所江相頼致手当、中奉書竪折之目録茂御右筆江相頼認方いたし候、然処山田家茂末家之四郎兵衛承付、是茂御内証之御礼相洩候而は不宜と存、奥向江被伺候処、無役ニ而訳も替候得共、願之成行ニ而同様進上御礼被申上候方可然、左候ハ、御取合可申上旨被申候由、右ニ付二月二日四時於鳴子之間川上式部・拙者・山田轉一所ニ相揃、御側役二階堂志津馬殿江相付、此節難有被仰付候ニ付、御内々御礼申上度候旨申上候処、則可申上旨ニ而目録請取有之、乍三人一所ニ無滞

相仕廻致安心候事、

但御肴大鯛二枚代銭壱貫八百文ニ而候、都而右等之儀新納八郎太引受被致世話候事、

右ニ付調所家江大鯛三枚・生酒拾盃取合、朔日之朝用頼道嶋源五郎相付、彼之方用達江取合致進覧、左候而拙者も見廻、猶又口上を以御礼申上置候事、

右ニ付、江戸詰御家老嶋津將曹殿江左之通申遣候事、

一筆啓上仕候、愈御勇健被成御座珍重御儀奉存候、私事先祖代格別之御取訳を以持参太刀被仰付置候処、此節別段之以　思召、年頭持参太刀着座被仰付、八朔之儀は是迄之通被仰付候旨承知仕候、誠ニ以難有次第奉存候、右御礼申上度如斯御座候、恐惶謹言、

二月四日　　新納内蔵久仰判

嶋津將曹様

参人々御中

一末家彌太右衛門当分甑島在勤ニ付、左之通申越候、

一筆啓上候、愈御堅勝被成御在勤珍重奉存候、爰元拙宅無事罷在、御宿元も御静謐之体御安慮可被成候、然は先月廿八日拙家難有被仰付候段ハ次郎九郎殿より御吹聴有之様頼置候ニ付、別段何も不申越候、右ニ付則より致思慮候処、拙家之儀は他家ニ違、大口霊社一件之事共有之、其砌御内々御肴料進上ニ而御礼申上候次第も有之、此節之儀は表向ニ而右等之沙汰ニは及間敷存候得共、前文之成行相含廿九日新納八郎太を以、御側役二階堂志津馬殿江相伺候処、兎角致吟味何分可相達との由候処、翌朔日同人江被申聞候は尤之事候間、御内々鮮鯛一折進上ニ而御礼申上候儀至極可宜、左候而御巡見も明後三日より御出立之事ニ付、いつれ明二日ニ而無之候得は相叶間敷候間其通可致、就而は川上式部殿ニ茂席頭且御役を茂同様之事ニ付、是茂御礼有之候方可宜ニ付、拙者より致引合候ハヽ可為同意旨もしらせ有之、かた〳〵丁寧之事ニ而則其通申談、御肴は御膳所江相頼致手当、中奉書竪折之目録も御右筆江相頼、何事も八郎太引受致世話候、然処山田家も末家四

郎兵衛承付とて茂御内証之御礼相洩候而は不宜と存候而、方々馳廻り同断御内伺等被致候得は、無役ニ而も有之訳茂相替申候得共、願之成行ニ而同様進上物ニ而御礼可被申上、左候ハヽ少々御取合可致被申候由、尤拙者発年ニ而外々江は何茂引合不致、全一家之儀内々相伺候故、御内証御礼可被仰付哉と疑居候処、右之通致承知、誠ニ以是こそ難有被仰付候首尾ニ而末代迄美目重畳難有次第大慶いたし候、右ニ付二日早天志津馬殿江差越、先其内之御礼申述、且後刻は於鳴子之間御礼可申上候ニ付其上之都合も宜敷御取成給候様頼置候又明三日は霊社祭日ニ而大口は勿論拙宅茂致祭候折柄御巡見御打立ニ而乍恐霊社も一涯御安全奉守筈ニ御座候半咄共いたし候処、志津馬殿は気寄も無之事故、左様ニ候哉と被申候事ニ御座候、左候而四時於鳴子之間川上式部・山田轉・拙者三人一所ニ相揃、志津馬殿江相付御礼申上候処、則可申上旨ニ而目録請取有之、頓と致安心候、重言ながらも誠以後年之規模相成事と、不軽難有かり家内中老母なと落涙大慶仕事ニ御座候、御同悦可給候、乍勿論霊社勲功只今ニ成り、右等之端々迄別段験有之、此節難有被仰付候も笑左衛門殿御名前ニ而候得は、何茂此人御取扱之事と存候付、朔日朝出勤無之内、大鯛三枚・生酒拾盃取合用頼を以差遣用達江取合、大口辺より之事とも申述御礼申入、拙者も同刻見廻置候、毎々之事候得共、就中

御出立前ニ而朔日・二日共は大夫方大取込之由故、拙者共江之即答は何茂無之候得共、決而不都合ニは有之間敷、尤

御前江志津馬殿より御披露相成候趣も、御立前ニ而其日は御一門方始伺　御機嫌をも有之、至極之御混雑中故いまた何分不致承知候、然共是も御都合能相済為申筈と存居申候、右之成行御吹聴申越候、幾重ニ茂難有次第御同慶可給候、

一三日御出立ニ付、我々早朝より致登城候、五ツ打直ニ御出ニ付御番所前庭上江御役人限罷出拝伏仕候、御行列御供廻等詰構之事共は御察可被成候、拙者ハ早速罷

帰り、霊社御祭毎之通相勤、夕刻より次郎九郎殿ニ茂御出、新納次兵衛・同甚助・同源助・伊地知小十郎（季安）等被参候而緩々咄共いたし候、其後天気合も宜敷

御巡見筋諸所賑々敷御座候半、拙者地頭所も来ル十二日比

御通行之賦ニ付、明六日より取次之源五郎ニも内々ニ而差遣候、手当いたし置候何方茂表向御手当之違至極御取持之由ニ付、右之成行御座候、貴所ニも当月中旬比ニは一旦御帰家之様承候得共、先々此段為御聞申上度乍荒増如斯御座候、心事不遠期面上可申上候、恐々謹言

二月五日　　新納内蔵

新納矢太右衛門殿

一二月三日、東目　御巡見として御発駕被遊、同十二日地頭所大姶良江　御着、同十三日御立、大根占之様御光越、又々十六日大根占より海辺御通行、華岡之様御機嫌能御光越被遊候段所役々届申出候、左候而、同十八日磯御茶屋江御帰館

御逗留有之、

同廿五日於磯、大砲御覗有之候事、

一貴札致拝見候、弥御堅勝珍重奉存候、今般別段之以思召、年頭持参太刀着座被仰付候段目出度奉存候、就右被示聞趣被入御念儀御座候、乍御報御祝詞申上候、恐惶謹言、

二月廿九日　　嶋津將曹久徳判

新納内蔵様

一一筆啓上候、時候無御差障弥以御平安可被成御座珍重奉存候、於当地拙家無異儀罷在候、乍慮外御安意可給候、然は御親父助次郎様御事去八月比より御不例ニ而、乍然一旦は御全快ニ向候得共、又々十月中旬比より喘息等之御煩取合御難儀被成候付、段々医術等も手を尽御養生被成候得共、無其詮終ニ御死去被成候旨細々御知せ之御書面致承知、何共絶言語申候、嘸々御家内様御一同御愁傷之程致遠察候、爰元よりも残念御仕合ニ存候事共難尽紙上御座候、右為御悔愚札如是御座候、

御家内何れも様江も宜被仰伝可被下候、猶時季御自愛
御起居可被成奉存候、恐々謹言、

新納内藏久仰判

三月廿九日

畠山助右衞門様

右之通飛脚便より差越候事、

一三月廿八日、月番御用人伊勢雅樂取次を以左之通被仰付候、

新納内藏

右寺社方御内用掛被仰付候条可申渡候、

三月　笑左衞門

右は寺社奉行御内用掛川上東馬殿事、先達而若年寄御役被仰付候間、右之通本掛被仰付候事、

一四月十二日、(島津久光)周防殿御事御家老座江御詰被成候様被仰出候事、

一五月廿九日、寺社方御内用掛取次土橋藤右衞門を以、地頭所取次道島源五郎江左之通被仰渡候事、

龍翔寺殿(島津氏久)齡岳玄久大禪定門　尊霊

裏ニ

嘉慶元年丁卯閏五月四日逝

右は大姶良龍翔寺江御安置之齡岳様御位牌御造替、御法名右之通被相替候、左候而是迄

(島津氏久室)敬外様

(島津氏久女子)溪月様御同牌ニ候得共、此節

齡岳様并御夫人

敬外様御同牌ニ被召替

溪月様御位牌は別段可被遊

御安置候、尤今度

御位牌并龍翔寺寺家共

御手許計ニ而御造替被仰付候条、以来御牌位前々不荒様可申渡旨笑左衞門殿より被　仰渡候条被承置大姶良寺社方掛役々江可被申渡旨地頭所江可申渡候、

但御成就之上以来御修補等寺社方計被仰付候、

五月　　寺社奉行

一給地高御改正之儀、弘化四未年被仰渡候付而は、先年大口之高知覧屋敷江売渡有之候を此節取返し度、就而はいつれ金之手当無之候而は不相叶事ニ付、大口家来共江持合之金を借り入可致候間、一往差出し候様用頼道嶋源五郎并家来竹村吉之助未十二月木之氏村江差遣し相談為致候処、弐百両位致調達候、然共百五拾石以上持高之者は先つ高取遣り致間敷旨内々致承知候付、不及是非差扣候、右ニ付金子も百両先月差返し、其余ハ先つ此方江預り置、若哉買入高不差支儀も有之候ハ、、とふぞ可致含ニ罷在候事、

覚

一金弐百弐両弐歩
　右は大口家来共より新借入高、
一同四両
　右出水大河内家来共より同断、
一金弐歩
　右木地山家来共より同断、
一同弐拾両
　右は大口家来弓削満右衛門江同断、
　右四行新借入高ニ而候事、
一同拾九両三歩弐朱
　右は先年木之氏家来共江貸付置候処此節返金也、
一金五両
　右は新納彌太右衛門江取替遣し置候返金、
　惣合弐百五拾壱両三歩弐朱
　右之内
　百両
　六月末白坂十右衛門・立元藤七致出府候節差返し遣し候事、
　百拾両
　松雪方江預ヶ置候事、
　拾両
　長野源助江借金有之候付、返金として入付候事、
　三拾壱両三歩弐朱

右壱行役所方江諸払ニ取替差出置候事、
〆本行
右之通取扱置候間、以後為見合記し置候事、
申七月十九日　記之、

八朔御次第書之内左之通抜書候、
太守様。
少将様江　川上式部
右敷舞台江奏者番出席、家々付進上之御太刀納之、
中紙弐束ッ、、
義岡藏人
新納内藏
伊集院亘
諸　地頭
新納衛守
町田式部
山田　轉
右同断進上之中紙目録納之、

但桂内記儀、諸地頭引次家ニ付、進上物有之候事候得共、当分地頭職被下置候ニ付、其場ニ而進上有之右之外入用無之場略ス、
一八月朔日、御式御受不被遊候事、
一同月廿一日、御機嫌能被遊御発駕、御城下江罷出奉拝候事、
口上覚
〔朱書〕「願之通御暇被下候」
九月　壹岐」
私嫡子新納次郎四郎事、長々腹之痛有之、段々尽手養生仕候得共、今以寸切と全快不仕、此涯湯治相応可仕旨療医より承申候間、何卒三廻御暇被成下度奉願候、左様御座候ハ、、以御蔭(牧園)踊之内榮之尾温泉江差越得と入湯為仕度奉存候、尤療医証文相添差上申候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、
申八月廿六日　新納内藏
証文

新納次郎四郎事、長々腹之痛有之私療治仕候得共、今以寸切と全快無之、此涯湯治相応可仕及見申候間、如是御座候、

申八月　　朝稲三益

右願書月番御用人嶋津主水江差出置候処、九月朔日同人取次を以願之通被仰渡候間、九月三日より差越候御届申出置、同月廿八日今暁罷帰候との趣申出置、内実ハ八月十五日より新納瑞策誘引ニ而差越、踊之内殿之湯江罷在九月晦日致帰宅候事、

一九月十一日、於吉野調練有之候事、

一御用之儀候間、明日四時御軍役方御家老座江可被罷出候、病気等候ハヽ名代可被差出候、以上、

九月廿九日　　得能彦左衛門

新納内蔵殿

〆

右ニ付御受書差出候、左候而晦日罷出候処、於台子之間同人取次を以末川近江殿より左之通被仰付候、

大始良物主
新納内蔵

外多人数略ス、

右は佐多其外東目海岸江異国船及渡来為防禦御人数被差向節は、兼而右諸所地頭職被仰付置候故、御軍場之儀も御備組之内右通被仰付、早速出役被仰付候条、兼而其旨相心得罷在候様可致内達事、

但西目海岸物主なとも同断被仰付候へ共、是以名前略ス、

一御用之儀候間、今明日中御軍役方御家老座江可被罷出候、以上、

十月八日　　得能彦左衛門

新納内蔵殿

〆

右ニ付則日罷出候処、近江殿より同人取次を以、左之通被仰渡候事、

大姶良　　半手

右は佐多其外東目海岸江防禦御人数被差向候節、一番駈付被仰付候事、

右之通致承知候間其段地頭所江茂申渡致用意居候事、

一十月廿五日、用頼御用ニ而御勘定奉行より御役料高之内地頭職繰替名寄帳被相渡候事、

寺社奉行御役料高之内地頭職分地知行高名寄帳
〔朱書〕「ふた紙」　新納内蔵

大姶良大姶良村之内

福山門

高四拾九石九斗九升九合五夕八才

内書略ス、

同所同村新屋敷之内

浮免

畠高四夕弐才

弐口

合高五拾石

右知行高新納内蔵先地頭所加久藤職分高五拾石御役料高之内繰替被下置候処、地頭所大姶良江繰替被仰付候、然処地頭職被仰付候節ハ、以来直ニ御役料高之内より繰替被仰付候旨、天保十二年丑七月十七日川上龍衛御取次以証文被仰渡置候付、直ニ当地頭職分高御役料高為百八拾石之内、繰替令支配候間可有取納、尤後年地頭所御繰替之節は可相替者也、

岩下新太夫印
北郷男吏印
嶋津靱負

嘉永元年戊申
八月

右名寄帳壱冊道嶋源五郎麻袴着用ニ而罷出致拝受被差出候間、致格護置候事、

嘉永元年申十月廿五日也

参議正四位上行左近衛権中将源朝臣齊興

上棟　隅州肝属郡大姶良郷龍翔寺造替

嘉永二年己酉正月起工、四月畢功

家老兼側詰　島津將曹藤原久德
寺社奉行　新納内藏藤原久仰
側用人兼側役趣法掛　友野市助源　長裕
船奉行格作事奉行勤　大野四郎右衞門藤原義陳
細工奉行寺社方内用掛勤　愛甲源五郎藤原廉貞
作事方下目付　境田猪之助越智通知
作事方下目付助　河野友次郎越智通壽
作事方書役助　奥山五兵衞藤原政高
大工頭　廻　孫右衞門源　實言

参議正四位上行左近衞権中将源朝臣齊興

上棟　隅州肝属郡大姶良新八幡宮造替

嘉永二年己酉三月起工、四月畢功

家老兼側詰　島津將曹藤原久德
寺社奉行　新納内藏藤原久仰
側用人兼側役趣法掛　友野市助源　長裕
船奉行格作事奉行勤　大野四郎右衞門藤原義陳
細工奉行寺社方内用掛勤　愛甲源五郎藤原廉貞
作事方下目付　境田猪之助越智通知
作事方下目付勤　河野友次郎越智通壽
作事方書役助　奥山五兵衞藤原政高
大工頭　廻　孫右衞門源　實言

一嘉永二年己酉三月廿四日
御機嫌能御着城有之候事、
〔朱書〕「願之通被仰付候、」
三月　將曹

右之通四月朔日御用人同人取次を以被仰渡候事、」

一諏訪大明神江御初穂銀三匁、

一稲荷大明神江右同断、

一神明宮江一七日御燈明料銀七分

右は

少将様四拾壱御厄年ニ付、諸向困究之段被聞召通候間御願文不及差上、併自分心入を以差上度存候向は、勝手次第被仰付旨承知仕候得共、御厄年に付而は格別成儀ニ付、此跡故中将様御厄年之節は、先役共より差上

候ニ付、此節之儀も右通差上度心願御座候ニ付、願之通被仰付被下度、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

〔朱書〕「嘉永二年」

酉三月廿九日　　嶋津藏人

新納内藏

右之通料紙杉原半切ニ相認、御用人嶋津隼人江差出置候事、

〔朱書〕「願之通御暇被下候、」

四月　　近江

本文四月廿一日月番御用人入來院平馬取次を以被仰渡候事」

口上覚

私嫡子新納次郎四郎事、長々腹之痛有之、段々尽手養生仕候得共今以寸切と全快不仕、此涯湯治相応可仕旨療医より承申候間、何卒三廻御暇被成下度奉願候、左様御座候ハヽ、以御蔭踊之内榮之尾温泉江差越、得と入湯為仕度奉存候、尤療医証文相添差上申候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

四月十三日　　新納内藏

証文

新納次郎四郎事、長々腹之痛有之、私療治仕候得共、今以寸切と全快無之、此涯入湯相応可仕及見申候、此旨如斯御座候、以上、

四月　　朝稲三益

右之通相認月番御用人入來院平馬江差出置候、左候而内実ハ四月十三日より打立、新納瑞策致誘引、家来中村藤次郎・中村源次郎・下人金太召列下町津畑より出船、踊之内殿之湯江差越候事、日数三十三日外ニ往来込四拾日計相掛り候、右ニ付米銭入費左之通、

但白米壱石四斗五升四合

銭三拾四貫四百三拾九文位

右は賤敷事ニ候得共為見合記し置也、

一四月廿八日於天保山大砲打方御覧有之候事、

一於琉球御死去刑部忠秀君御法号悟心全了庵主、当嘉永二年酉弐百回忌被為当候ニ付、御法事致執行度折柄、

当分琉球在番奉行倉山作太夫殿用達新納次兵衛相勤被居、殊ニ家来牧山金右衛門琉球江商売として致渡海、旁便宜を得候間左之通頼遣し候事、

態致啓上候、先以無御障可被成御在勤珍重奉存候、爰元ニ而拙家無異罷在候、乍慮外御放意可給候、御出帆後は御無音背本意候次第、何共無申訳平ニ御用捨可給候、扨は御多用中御面働罷成事候得共、拙家先祖刑部忠秀と申者其地江相勤候節、慶安三年庚寅辰五月八日致病死、家来弐人も殉死ニ而其地清泰寺ニ葬候由家伝御座候、然処当年弐百年忌ニ相当申候ニ付、何卒軽く法事御調被下之儀は相叶申間敷哉、尤天保三年辰町田平在番勤之節彼是相頼申趣御座候而祠堂銭茂弐拾貫文致寄付、東禅寺白翁長老受合書等も相届居申候ニ付、為御見合書写差渡申候間、御見届得と御考給り、手軽年回之弔一通り御調被下度、就而は布施物之儀茂折能此節家来壱人致渡海候付、彼是申含置候ニ付、何事も御申付被召付給度、勿論遠回之儀ニ候間、六ヶ敷御吟味ニは及不申候ニ付、其段ハ訳而申上候条、無御遠慮御取計可給儀奉頼度致啓達候、書外重而吉兆可得御意候、恐々謹言、

三月廿一日　　新納内藏

新納次兵衛様

尚々乍筆末時季御厭、折角御精勤被成度、貴地静謐ニ候哉、漂流人今以滞在候欤と存候、爰元彼是之儀追々御聞も可有候ハ、、不能細筆候、且乍寸志百田紙弐束不取敢致進覧之候、御笑納給度候、御序之節は倉山君江も御元気之由目出度存候旨可然御伝言奉頼候、以上、

一右家来牧山金右衛門江金弐百疋為御法事料相渡差越候

一右弐百年御法事、五月八日於爰元も深固院江金百疋差遣し御弔いたし、且大口於泉徳寺も毎之通御法事相勤候様前以申遣置、拾三ヶ所御法事執行いたし候事、

一御用之儀候間、明九日四時可被罷出旨近江殿依御差図申達候、以上、

〔朱書〕
「嘉永二年己酉」

五月八日　　伊勢雅樂

新納内藏殿

〆

御用之儀候間、明九日四時可罷出旨近江殿依御差図被仰渡趣承知仕奉畏候、以上、

五月八日　　新納内藏

伊勢雅樂様

〆

右之通被仰渡承知仕候得共、折柄少々病気ニ付、九日罷出候儀不相調候ニ付、其段御届申出置致養生候処、追日致快気候ニ付、五月十一日罷出月番御用人伊勢雅樂江届申出置候処、無程於敷舞台御用人右同人引進ニ而末川近江殿より左之通、

一大番頭

一御勘定奉行勤

新納内藏

右之通御役替ニ被仰付、御役料高是迄之通被下置候、

五月　　近江

右之通致承知候ニ付、御請御礼申上退席、

一右ニ付大番頭座江罷出御書付相弘暫時罷在候、当分大番頭嶋津求馬殿・嶋津右門殿・町田監物殿ニ而候、左候而当御役ニ付、御礼願且明細書等之儀共、大番頭座書役江相頼置、御殿中御座へ例之通吹聴ニ相廻り候事、

一御役替被仰付候ニ付、監物殿同伴ニ而御用部屋江罷通、御内証之御礼御側役勤吉利仲江相付申上置候事、

一御殿中諸事相仕廻、寺社方江差越、御用筋寺社奉行嶋津藏人殿江諸事次渡置、御内用掛御役々并取次書役共江致挨拶罷立候、夫より御勘定所江差越候処、御勘定奉行北郷男吏殿詰合ニ而候、

当分御勘定奉行島津靱負殿・北郷男吏殿両人ニ而候、岩下新太夫事御勘定奉行ニ而候処、此内より病気ニ而去ル三日暁養生不相叶死去ニ付、右跡役拙者江被仰付候筋と心得罷在候、

一御勘定所ニ而早速小頭并書役共一統面会祝儀共承候ニ

付、夫々致挨拶候事、
一八ツ退出、夫より御役方江御礼廻いたし夕方帰宅、類中并兼而出入面々相招祝ひ賑々敷取はやし候事、

口上覚

私事今日大番頭御勘定奉行勤江御役替被仰付、難有仕合奉存候、依之御序之節御太刀進上仕御礼申上度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

五月十一日　　新納内蔵

右月番御用人伊勢雅樂江差出ス、

口上覚

私事今日大番頭御勘定奉行勤江御役替被仰付候ニ付、御軍役御手当帳拝見被仰付被下度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

五月十一日　　新納内蔵

右月番御用人江右同断差出ス、

口上覚

私事、今日大番頭御勘定奉行勤江御役替被仰付難有仕合奉存候、依之御序之節誓詞被仰付被下度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

酉五月十一日　　新納内蔵

右翌十二日御小納戸川上郷兵衛江於御近習番所廊下直ニ差出置候事、尤昨日名代ニ而差出候得共、右之願書は直出ニ無之候而は不相成旨承り右之通也、

覚

一大番頭
一御勘定奉行勤
一持高弐百八拾八石四斗四升壱合壱夕四才
一年四拾三歳
一居所千石馬場

右は私事今日大番頭御勘定奉行勤江御役替被仰付候ニ付、明細書為御見合此段申出候、以上、

酉五月十一日　　新納内蔵

右弐通同案ニ認、月番御用人伊勢雅樂江壱通、御側御用人髙田十郎右衛門江壱通差出候事、

〔朱書〕
「本文料紙杉原折紙上包美濃」

一筆啓上仕候、

少将様益御機嫌能被遊御座奉恐悦候、然は私儀先月十一日大番頭江御役替、御勘定奉行勤被仰付、難有仕合奉存候、御礼為可申上各様迄如斯御座候、何分茂御執成奉頼候、恐惶謹言、

六月朔日　　新納内蔵
久仰判

山口直記様

名越彦太夫様

〔朱書〕
「本文料紙杉原半切上包美濃紙」

一筆啓上仕候、弥御堅勝被成御勤務珍重奉存候、然は私事今般大番頭江御役替御勘定奉行勤被仰付難有次第奉存候、右御礼為可申上如斯御座候、恐惶謹言、

新納内蔵
久仰判

六月朔日

島津豊後様

〔朱書〕
「右弐通飛脚被差延六月朔日出立ニ付右之通差出候事、」

一酉五月十五日御小姓与番頭川上矢五太夫殿事寺社奉行江、御側御用人嶋津兎毛事、御小姓与番頭御用人兼務ニ御役替被仰付候事、

一筆致啓上候、当春梅雨格外之長雨難凌候、貴地同様可有御座致遠察候、乍然無御障可被成御在勤珍重存候、拙家一統至而平安罷在候、然共拙者少々雨痛ニ而五日引入ニ候得共、最早平快罷成候、何茂御安意可被成下候、此内は下甑より之御状茂相届、忝致披見候、御無事之段致承知喜悦奉存候、御答乍毎御無音失敬之至御免可被下候、其後爰元之模様不相通、如何之静謐ニ候哉と御書中相見得候、実ニさそと奉察候、ちん〳〵申度儀も御座候得共先差置候、扨此節存外之転役被仰付候段、誠ニ以難有恐入奉存候、兼而御存通極々無調法者ニ候へ共、相勤り申御役場ニ候哉と、只々安心不致、乍去心之及相勤こそ本意かと奉存居候、是も段々難有趣共心ニ浮、恐入罷在候、其外追々身分不相応之事も可出来哉と存候事共も有之候、ヶ様之心事いつれ貴面ならてハ難尽、御帰府之折と申残候、只々御同慶

可給儀肝要御座候、右ニ付而は兼々御懇篤不浅忝奉存居候、猶更此末追々御教諭申受度千万奉頼候、折角御自愛長寿御保可被成儀専一奉存候、拙者式乍不似合一涯相励、成り丈相勤度心中罷在候、猶別慶可申上候得共、先早々此等之段御吹聴旁迄如是御座候、恐々謹言

五月十三日　　新納内蔵

新納彌太右衛門様

猶々本文御用茂拙者引入中、去ル八日近江殿より伊勢雅樂取次を以致承知候得共、十一日押而罷出奉承知、其後弥平快致連勤候、御安慮可給候、当日は御内室御出ニ而御肴料迄入御念候儀ニて御礼申上候、且亦御娘子も目出度御模様、近々御吉左右可有之候、何も御楽御在勤被成度奉存候、

又申添候、拙者事御用人座ニ而も段々臨時之御用掛共被仰付、寺社方ニ而も始より御内用掛り被仰付、終ニ本掛被仰付、此節訳有転役、誠ニ身分ニは余り申候儀、只恐入奉存居候、就而は御閑暇中何卒御教諭之一筋御出来被下候得は、別而忝儀と奉存候間、訳而奉願置候、御用触并御本文写添差上候、外ニ御書付等は何茂無御座候、然共翌日八ツ後近江殿宅江一刻被召呼候儀は御座候、

五月二十七日　時升白、霖雨経旬、

尊家安全、幸甚、前日家書至告、執事進階大衛騎将、行会計之事、先是、聞世人之語、其知与不知、皆言今時、涖御史之官、彈糾国事者、唯新君某在、今春朝干府下、適訪一心友、其人頗知国機、陰言曰、方今星暦（ジセツ）一変、否往泰将来、当是時、御史之官、其誰当之、特（ヒトリ）子之宗家其人欤、人望所帰、恐朝議出乎此、升曰、苟以其人、吾意亦如子之言、雖然、宗家天質不能升降時世頡頏人事、今夫星暦雖変、旧俗未改、以宗家之質、執割涖庖、万一忤事機、他日逢清明之期、不能披其濛、不苦匿光俟時耳矣、友人曰、否、見龍在田利見大人、公今其時乎、升不荅而去、然意未安乎此、及獲家書、与友人之言違、升且喜且疑、蓋今時進階移職其機二、奇其才、試其器者上也、忌其才無可去之罪、陽升階陰（アラワニヒソ）

遠之、時或有之、夫執事勤慎篤行、亡論其上者、然其転職、与友人之言、相反則蜂蠆伏陰暗之中亦不可知也反覆想懐之間、忽接執事手筆之華牘、審尊諭之趣、釈然了会時機畢、即幡然曰、至矣哉　朝廷知人也、蓋聞会計重任也、得其人、最難矣、所謂御史、雖重職、索之公正廉直之中、其人猶可獲也、会計則否、性雖公正、質雖廉直、匪博于古精于今者、不能矣、然則執事当此撰果在御史之上欤時升素昏官事其所以為重任者、何足以知之、唯昔日聞之旧会計長束氏、其言曰、凡吾藩経国之大典悉帰会計署、所謂田野之経界、租税之出納民戸之計数、俸禄之多寡、宅地之広狭、悉具官署之法典、職司執法度、理其事、朝議雖決会計不可、不能行焉、而国家財用之度支、計其入、命其出、有版図具之其法縄墨道之如系譜然、縄之所究、券契以証之、彼此合符節、与其始相照而総計之事終矣、故百事雖蝟毛、紊緒不混、計算得法、實百世不易之良法也、近及新進大夫登庸、以国家之窮乏見委任、以英特之資明敏之才出更始之令賑給財用興富国之術、於是公用得弁給、廩庾蓄財許多、可謂其功偉矣、雖然其業専於救、時、急於成功、故廃旧典而不用、出新令弁事曰、不如此不足救時也、於是度支之出納、不管会計、旧典悉帰無用、旧典帰無用〔貼紙〕「用下則字落」制度無所取範、制度無所取範、則一国之政事、猶瞽之無相、如之、何馭永世、唯恐致社稷之傾覆大息於邑不止、升亦顰蹙久之、曰、嘻夫吾藩之法、即周礼之法也、周礼小宰職以官府之八成経邦治、其六曰聽取予以書契、鄭注云、書契符書也、割印ノ手形其八曰、聽出入以要会、鄭云、月計、曰要、歳計曰会、亦司会職曰、月勘定年勘定逆群吏之治而聽其会計、以参互攷日成、以月要、攷月成、以歳会、攷歳成、是皆此方云勘定也、昔者我　先君、世賢明、大臣亦多明哲、故国典之所設悉合于聖典得乎学者欤、将天才之暗合欤、升又有聞、吾藩之制度他方之不及者二、廷尉不執刑罰之権一也、会計得其道二也、二者合聖人之道治国之要在乎此、而以一旦機利之才壊先世之法典、縦令致秦楚之富豈足補其罪之万一乎、共働哭而別、今長氏没、而十数年、典常之頽廃何必什佰、今也星暦一変否往泰来、典刑将復于古、当是

時官署之混淆撓其乱、反其正者其得人實難矣、而執事
値其選可不勉乎々々々、吁夫執事博于古精于今、世之
所称不待吾言、唯獲其手書踊躍不堪、適憶昔日長氏之
言、不覚泫然涙下、於是録其語献之左右敢代非儀云、
孔子曰、文武之政、布在方策書曰、典常作之師、詩曰
不愆不忘率由旧章、夫聖人尚崇循旧章而況後生乎、執
事能熟官署之法典、涖于職其櫽括今之道、自瞭然、不
借り用ニ
俟多言唯執事亮察旃、

嘉永己酉〔朱書〕「二年也」　宗末　時升　誠惶誠恐頓首

大族望新納君

執事

一去る六日御懇書并華牘十日比相届忝致拝読候、長雨打
替数日之炎天宜敷事なから、最早頓としめり気無之、
実ニ難凌御座候、乍去貴嶋御無事御在勤之由何寄喜悦
之至奉存候、拙者家内も老母初いつれも無事御座候、
御安慮可被成下候、御宿許去十五日上方江廻勤之序御
見廻申候処、弥御無事御孫女方迄も至極之元気ニ見得
申候、勿論御繁昌今明日と見得居申候、何分御懸念被
成間敷候、

一当地別而無事御座候、士躍（踊）・関狩等之儀被仰出、一統
則より勇ミ立罷在候段は、追々御聞及御推察も可有之
候、勿論御軍役方面々も疾々渡海有之、定而当分は賑
々敷調練方ニ而間ニは爰元之模様も御聞可被成、其後
近隣東郷左太夫・御側御用人寺尾庄兵衛其跡勤伊集院
權右衛門御納戸奉行格勤方是迄之通、新納仁兵衛郡奉
行産物方掛勤方是迄之通、尤不絶致精勤候との御文言
相見得大慶存候、東郷も　御沙汰之趣有之候由、いつ
れ茂結構之儀ニ御座候、且又御買入并御取揚高等三千
石被差向置、究士弐百人位も六ヶ月代りニ而下目付并
書役等江被召入、御救助筋被仰出、扨々、
御仁政之程難有儀ニ御座候、是ニ而無高極貧者等江延
立可申、市成も多年正道精勤之趣ニ付、別段之御取訳を
以給地高千石申受被仰付、千眼寺和尚茂寿国寺永兼住
被仰付、諸事段々難有御取扱御座候、市成之高代は弐
万貫ニ及可申、未代銀上納は無之候、勿論給地高申受

可被仰付段は被仰出、拙者迄も此内伊地知便ニ而荒増申上置候通ニ而取調掛被仰付、最早両度程杉之間縁頰江出会吟味之趣申出置候得共、未何分御差図には不相成候、追而相究可申と存候、

一此度被遣候華牘御教諭之御礼も則可申上事候得共、何れ得と致熟読候上と差延居候処、余り延引罷成候、其段は御用捨可被下候、扨御文意再三及拝吟候処、一字一言不残肺肝ニ銘し申次第御座候、勿論周礼も証拠長束翁之実話深々致感心候、丁度御文面之通転役則より朱一字之大総書、其外御領国中之惣御規模此所ニ至らざるはなしと、誠ニ我々式愚昧ニは不似合大任恐多奉存事ニ御座候、乍然被仰付候上は心之及可相勤儀本意ニ而、次ニは無此上学問往々勤務之助ケ誠ニ難有事ニ奉存候、勿論此内は段々不出来之心覚も有之、何分世間不馴之者ニ而晴ケ間敷相勤候事は有之間敷と致落着居候処、先便より申上越候通人ケ間敷御役替被仰付、存外成仕合ニ而格外之胸中罷成候、然共御教諭之如く移職其機二ニ御座候、左候得共古ニ復し正ニ反する之意あり、爰ニ至て可疑乎、只一念なく精勤之心得ニ罷在候、尤　御内命をも蒙り曹太夫の御口達茂致承知候、此趣実ニ正ニ反する現然ニ御座候、就而は華牘之面一々心肝ニ銘し深々致拝吟事ニ御座候、猶御教諭之所万々奉願候、然しなから先度の御手簡ニ見得候通未事ニ被行候時節ニ不至との意弥深く致拝吟候、此一条は貴面ならてハ不相叶候、其節之御書付左之通、

新納内蔵
本田六左衛門
友野市助
森川利右衛門

右は御買入等相成候給地高申受取調掛被仰付候ニ付而は、別而多端之事ニ而不容易儀ニ付万事引受精徴ニ尽吟味、何篇行届無親疎致取扱候様可申渡置旨

御内沙汰

御直承知仕候事、

右之通致承知候、左候而段々将曹殿より御口達之内笑左衛門死後ニ相成候得は、取扱之事致比判候儀も有之

由、左様共有之候而は不相済儀ニ付、此節之事は精微ニ致吟味候様可申渡旨

御沙汰被為在候段も致承知、別而奉恐入儀ニ御座候、然共、此節之事ニ候得は我々式時世不馴之者別而及心配候段、ちらはら申進候度儀共は山々御座候得共難尽筆紙、御推察可被成候、何れ此節之勤場拙者運之究所ニ御座候、乍去正心脩身之意を不取失候ハヽ、霊社も御見捨は有之間敷致安心日々相勤罷在候、右ニ付御教諭は返々茂奉願儀ニ御座候、先日より前文之通早々御答礼申上度事なから態と差延、此等之段御答且御礼万々奉謝候、尚炎暑折角御自愛ニ而可被成御勤務儀専一奉存候、重而万緒可申承候、先々如斯御座候、恐々謹言、

朱書「酉」

六月廿日　　新納内蔵

新納彌太右衛門様

尚々朱注一入御礼申上候、是にて御清書ニは及申間敷重宝可致置と猶御礼申上候、

一拙者御役替被仰付候ニ付、印判彫改候ニ付御届向左之通申出候、

口上

私儀、別紙之通印判相改申候間古印判差上申候、以上、

酉五月十九日　　新納内蔵

別紙

改印◯　　新納内蔵

右之通口上書并改印鑑相添御勝手方御用人勤川上龍衛江差出置候事、

一五月廿六日、御趣法方掛御用人友野市助取次を以左之通被仰付、尤拙者江直申渡之筋ニ而小頭佐々木伊右衛門江相渡被遣候、

御勘定奉行勤
新納内蔵

右は給地高御改正ニ付御買入又は御取揚等相成候高申請可被仰付候ニ付、取調掛被仰付候条可申渡候、

五月　　將曹

右之通被仰付、左候而小頭西郷吉兵衛・坂元九郎右衛

門江同断取調掛被仰付候事、

一右申請高取しらべ掛、高奉行有川藤右衞門・林安右衞門、郡奉行黑葛原源左衞門・伊集院周八、御代官大迫市介・種子田源助被仰付候由、尤御趣法方掛友野市助・森川利右衞門江茂同断被仰付候由、

一五月廿八日、御側御用人勤本田六左衞門殿事、今日御勘定奉行江御役替被仰付候、左候而高申請取調掛拙者同様被仰付候事、

一高申受取しらべニ付而は杉之間縁頰江出会所被仰付候間、掛御役々式日ことく相定置可被遂吟味旨致承知候ニ付、六月四日御役々致出会、申請之取扱振書付相調、御勘定奉行より取束御趣法方掛御用人江相付申出置候事、

一六月五日、月番御用人小笠原轍より切封を以、拙者并本田六左衞門間壱人明六日四時早目罷出候様致承知候ニ付、翌六日本田六左衞門被罷出候処左之通、

新納内藏
本田六左衞門
友野市助
森川利右衞門

右は御買入等相成候給地高申受取調掛被仰付候ニ付而は、別而多端之事ニ而不容易儀ニ付、万事引受精微ニ尽吟味、何篇行届無親疎致取扱候様可申渡置旨

御内沙汰

御直承知仕候事、

右之通御家老座於上之間、森川利右衞門一所ニ被召呼將曹殿より書付被相渡、左候而猶亦將曹殿口達ニ而先日御前江被為召、段々御用被仰付候節、給地高取扱之儀は何様手を付候哉と御尋被遊候ニ付、早速取調申渡置候、然共差上高・御取揚高・拘地高等段々多端ニ付、急速居付候儀は難仕趣共申上候処、成程左も可有之と

御意被遊候、右ニ付御改正中御高取扱一件笑左衞門死後ニ相成候得共、色々比(批)判等も有之哉ニ聞得候ニ付、

此節は精微ニ取志らべ已後右様之儀共無之様至極入念取扱可致旨
御沙汰被遊候ニ付、此段茂内々相達置候旨致承知候事、
但給地高御改正ニ付申請等被仰付、御用筋致取扱候趣荒方左之通書記し置也、

一七月朔日、申受高之儀ニ付現銭上納ニ而申受御免被仰付置候株高頭三千弐百弐拾壱石余、且又御役料高所務を以差引上納申受被仰付置候株高頭弐千六百三石余、惣合五千八百弐拾四石余ニ而候、
右之株は当秋より直取納相成候様、御高支配は出来間敷哉之旨先日より賦役共江細々相達、猶又六左衛門殿申談達置候事、

一同三日、前条御高支配方之儀ニ付、賦役共吟味之成行申出候ニ付、猶亦拙者共申談之上今日友野市助・森川利右衛門迄内意申出置候趣有之候事、

一同六日、前条一件ニ付是迄小頭并賦役・書役等迄致長詰等骨折候成行承得候趣、書付を以友野・森川迄申出置候事、

一同十三日、当座支配方書役去年正月以来致長詰、御改正方御用取扱別而骨折候ニ付、為御褒美御内々左之通被成下候、

一金子千疋ツ、　〔朱書〕「合五両賦役」　調所次郎左衛門
千田壮之丞

一同七百疋ツ、　〔朱書〕「合五両壱歩書役」　三原孫左衛門
田上藤八
松元次右衛門

一同五百疋ツ、　〔朱書〕「合五両」　久永直助
毛利善太夫
長瀬善助

一同三百疋ッ、〔朱書〕「合拾八両」

市來萬次
三原仙之丞
萩原喜之助
木藤傳左衛門
横山權兵衛
小久保孫七
井上鐵之助
千田喜三次
河野瀬兵衛
有馬仲右衛門
和田彦二
調所清左衛門
税所十五郎
前田源次郎
土持善之丞
澁谷三之丞
肥田正右衛門
鳥井九左衛門
石原五之助
有川休右衛門
肝付伊兵衛
東條半助
山下仁左衛門
安藤善左衛門
山下藤兵衛

一同百疋ッ、〔朱書〕「合壱両」

山口四郎太
鎌田曾右衛門
林十郎右衛門
肝付新助

〔朱書〕「右惣合金三拾四両壱歩」

右之通友野市助取次を以被成下候ニ付、不屹と立様於奉行座六左衛門・拙者列席夫々江相渡候、左候而一統之御礼拙者致登城森川江相付申出置候事、

一五拾石以下持高有之面々より無高之面々江高申受可被仰付候間、申受度存候者は銘々差出を以申出候様被仰渡、七月十日限差出を以申出候ニ付、十一日開封之上都而之高頭算立候処、壱万弐千石余ニ及、存外之申受願人ニ而御改正高ニ不相応之事候ニ付、段々吟味ニ及人体三百人ニ相撰らひ、高頭五千弐百石余ニ取志らへ七月廿五日一帳相調遂披露置候処、翌廿六日申出之通当月中代銀上納ニ而申受可被仰付旨御証文を以被仰渡候事、

一同月晦日、八ツ時迄高頭三千九百六拾石余ニ応シ候金高壱万弐千四百両計上納相成候由承候、尤代金不相調者は壱人茂無之候由、

見合一紙

一高三百五拾八石余

右御納戸拝借銀ニ而差上高

一同四百九拾九石余

右寺社方新拝借ニ而同断

一同六拾四石九斗余

右寺社方新拝借銀引当高

依願差上高

一同千百七拾三石余

右寺社方古拝借ニ而差上高

一同五百九拾七石余

右御厩拝借銀ニ而右同断

一同弐千五拾壱石余

右宗門方拝借銀ニ付右同断

一同千九百五拾五石余

右御物方拝借銀ニ付右同断

合六千六百九拾七石九斗余

右向々拝借銀ニ付依願差上切被仰付候上地高

御買入高

一高四百八拾四石八斗壱升三夕弐才

御船方御買入高

一同弐百七拾弐石四斗五升五合弐夕

一往御買入高

一同三拾九石九斗四升壱合壱夕四才
御内証御買入高
一同弐拾石
合高八百拾七石弐斗六合六夕六才
右御納戸支配高御改正ニ付、給地帖佐与御蔵入高ニ
被仰渡候、
一高百拾七石六斗七升八合八夕八才
但四口取合之高
右伊勢雅樂持高、宮之原郷八方江借銀引当として差
遣置、御改正月限中不相片付候付、御取揚被仰付候
旨嘉永元年申六月被仰渡候、
一高三百壱石壱夕九才
右鎌田源次郎分地高ニ而不宜聞得之趣有之、分地高
之内、右之通御取揚被仰付候旨申六月被仰渡、
一同四拾八石六斗弐升九合七夕七才
右は和田助太夫末家和田助市持高ニ而候処、此節御
取揚被仰付候旨申七月被仰渡、
一同八拾石九斗八升四合六夕九才

一同八石三斗弐升九合弐夕　蓑田源左衛門
一同六石七斗　森甚左衛門
一同弐拾三石六夕九才　築地筑右衛門
右四人不宜聞得之趣ニ而御取揚被仰付候旨酉二月廿三
日被仰渡候、　牧源兵衛
一高三百石　嶋津内匠殿
一同三百石　嶋津壹岐殿
一同千石　嶋津石見殿
一同三百石　嶋津將曹殿
一同弐百五拾石　末川近江殿
一同弐百石　名越右膳
一同三百石　二階堂主計
一同五拾石　島津求馬
一同四拾石　倉山作太夫

一同百拾壱石　嶋津内藏
一同三拾石　嶋津矢柄
一同三百石　吉利仲
一同九拾石　堀四郎左衛門
合三千弐百七拾壱石
右銘々壱石ニ付弐拾貫文ッヽニ而代銀上納申受被仰付候株、
一高九拾五石　嶋津求馬
一同百五拾石　新納主税
一同百四拾五石〔朱書〕「九拾八石」差上　北郷男吏
一同九拾五石〔同〕「六拾五石」差上　嶋津隼見
一同百五拾石　伊集院亘
一同百三拾石〔朱書〕「八拾八石」差上　川上矢五太夫
一高百四拾七石　川上式部
一同弐百三拾三石　川上龍衛
一同百四拾八石　桂内記
一同百四拾石　頴娃織部
一同百五拾石　嶋津九十九

一同六拾石〔朱書〕「四拾石」差上　大野多宮
一同五拾七石「三拾八石」差上　島津清太夫
一同百四拾九石〔朱書〕「七拾石」差上　郷原轉
一同九拾六石〔朱書〕「四拾石」差上　平田靱負
一同五拾石　町田式部
一同百拾弐石　畠山藤次郎
一同百四拾八石　桂太郎兵衛
一同百拾三石〔朱書〕「七拾六石」差上　二階堂源太夫
一同九拾弐石〔同〕「六拾壱石」差上　仁禮小吉
一同九拾三石　小笠原轍
〔朱書〕「右朱高外は都而御役料高百石ッヽ差上差引」
合弐千五百五拾三石
右銘々御役料高之内差上所務差引を以申受被仰付候
二口合
高五千八百弐拾四石
給地高御改正ニ付、上地高御買入高其外有故御取揚
高

高頭太体弐万石程

但拝借銀差上切之高株未諸人名寄帳出揃不申故、高員数究而之儀不被申出候、

内

御買入并有故御取揚高

高頭壱万三千七百七拾四石余

右之内

高三千弐百七拾壱石

右現金上納ニ而申受高

差引残り

高壱万五百三石九斗八升壱合九夕六才

拝借銀差上切

高頭六千弐百弐拾五石余

右之内

高弐千四百五拾三石

右御役料務高所を以差引申受高

差引残り

高三千六百七拾弐石（七百カ本ノママ）

外ニ

鹿兒島給地身分違致支配候拘地高

高頭弐百壱石余

惣合高頭弐万弐百壱石余

右之内

高五千八百弐拾四石

右現金又は御役料高所務差引を以申受高

高三千石

右窮士御救ひ御差分高

差引残り

高壱万千三百七拾七石三斗六升八合余

拘地高差引

現高壱万千百七拾六石

右之通相見得申候、

酉七月十七日

一高五千四百四拾五石　近方

一同五千百七拾五石　中途

一同三千百五拾四石　遠方

合壱万三千七百七拾四石
右御買入高之株
一高千三拾四石　近方
一同千六百三拾六石　中途
一同千四百六拾八石　遠方
合四千百三拾八石
右拝借銀之方差上切之株
二口合
壱万七千九百拾弐石位
内
三拾石已上門数五拾九
弐拾壱石より弐拾九石迄　右同百九拾弐
合門数弐百五拾壱
内
四拾六門申受高之内ニ賦
一高五千五拾弐石九斗三升壱合八夕
人体三百壱人

右七月中代銀上納申受之株
一高千九百四拾四石八斗九升八合壱夕四才
人体八拾五人
右九月十五日限右同断
一高三千五百八拾四石壱斗七合九夕四才
人体百六拾六人
右九月中右同断
右之内
千三百九拾九石三斗三升
人体七拾四人
但百石限申受
弐千百八拾四石七斗七升七合九夕四才
人体九拾弐人
但寄合以下申受
合壱万五百八拾壱石九斗三升七合八夕八才
惣人体五百五拾弐人

一嘉永三年戌二月四日、御用人宮之原主計取次を以左之

通、

給地高申受ニ付而は万事引受精微尽吟味、何篇行届候様可被致取扱との趣は、先達而申渡置通ニ候、右ニ付而は別而多端之事ニ而不容易儀候間、場所賦方等之儀ニ付万一不斉之儀共有之候而は急度不相成事候条、手厚尽吟味無親疎取しらへ可被致旨御勘定奉行江可申渡候、

二月　　将曹

一戌八月晦日迄申受高御支配精々相働キ候処、惣人数四百七拾四人、高頭八千三百四拾壱石壱斗九升余に相及ひ御支配相済候、且又申受は被仰付置候得共支配不相済人数百六拾四人、高頭五千弐百石余ニ而候、右通ニ而御支配相済候人数は当秋より直取納相成、御支配不相済面々ハ所務渡りニ而来亥秋より直取納相成候付而は人気ニも相拘候ニ付、今十日位も日数被差延置候ハ、精々相働キ御支配相済候様為致度旨、御勝手方掛末川近江殿江申出候得共、郡方ニおひて取扱運ひ兼候趣申出、無拠晦日迄ニ而取止いたし、御支配不相済面々兎角来秋より直取納相成候様追々御支配ヒ取付候様可致旨致承知候事、

一戌九月十一日、御趣法方迄届申出置候書付左之通、

一高八千三百四拾壱石壱斗九升弐合壱夕

内

九拾五石三斗八升五合九夕九才損高

人体四百七拾四人

右嘉永三年戌八月中御高支配相済当秋より直取納相成候株、

一高三千八百四拾八石壱斗八升壱合

人体百六拾壱人

外ニ

千石　　嶋津石見殿

三百石　　本田加賀守

百石　　井上駿河守

右戌八月中御支配不相済、当秋迄は所務渡りニ而来亥

秋より取納相成候株

右之通御座候、以上、

一戌十月廿五日、今日迄ニ而申受被仰付置候高組合支配方都而相済候、尤八月七日より早出長詰ニ而書役も弐拾人程昼飯共迄も被下置候得共、今日迄ニ而首尾相済候ニ付引取ニ而其段届等申出置、拙者共ニも致安心候事、

覚

一高四千八百七拾弐石弐斗壱升四合壱才

内

四拾八石弐斗壱升四合壱才　損高

右は去秋代銀上納并御役料高所務を以差引申受被仰付去酉九月十九日迄組合等相済居候株

一高七千四百四拾壱石弐斗九升弐合壱才

内

九拾四石四斗八升六合壱夕九才　損高

右当秋より直取納相成候様八月晦日迄組合出来候株

一高五千三百七拾七石五斗六升七合七夕

内

百三拾九石三斗七升三合弐夕三才　損高

右来秋より取納相成候様去ル廿五日迄組合出来候株

惣合

高壱万七千六百九拾壱石七升三合八夕壱才

内

弐百八拾弐石七升三合四夕三才　損高

差引

現高壱万七千四百九石三夕八才

右諸人江申受可被仰付候株

右之通御支配相済候旨、書付を以御趣法方江届申出置候事、

一戌十月廿八日、小頭坂元九郎右衛門・西郷吉兵衛、賦役千田壮之丞・三原孫左衛門、同寄田上藤八、書役久永直助、同助役河野瀬兵衛・長瀬善助・毛利善太夫・小久保孫七・萩原喜三太・木藤傳左衛門・肝付伊兵衛・

澁谷三之丞・阿多甚助・有馬仲右衞門・安藤善左衞門・鹽田直八・山下藤兵衞・三原仙之丞・内田市郎太八ツ後より緩々召呼高支配相済候為祝、酒共振廻候、御改正ニ而高取調掛被仰付別而不容易取扱事ニ候得共、何れも致精勤骨折候付無滞御用相済、拙者共ニ茂致安心候事ニ付、右之通也、

一戌十二月十五日、支配方小頭坂本九郎右衞門・西郷吉兵衞并賦役千田壯之丞初書役迄弐拾人申受高方ニ被掛置候処、骨折致精勤候ニ付御内々左之通被成下候、

一芭蕉布弐反ツ、

一金子百疋ツ、　坂元九郎右衞門

　　西郷吉兵衞

一金子三百疋ツ、　千田壯之丞

　　三原孫左衞門

寄り　田上藤八

一金子弐百疋ツ、　書役并

　　定助五人

　　名前略ス

一金子百疋ツ、　書役助

　　拾人

　　名前略ス

右之通被成下候ニ付、拙者共より茂御礼申出置候事、

嘉永二年酉

一六月十三日、御用人島津兎毛取次ニ而左之通被仰付候事、　御勘定奉行　新納内藏

右御軍役方掛被仰付候条可申渡候、

六月　近江

右は先掛り岩下新太夫ニ而候由、左候而賦役千田壯之

丞、書役田上藤八江新太夫より掛申付有之候由承候付
矢張其通申付置候事、

一六月十五日、御書院江
御出座月次之御礼、引次諸御礼被　遊御請、私ニも大
番頭江御役替之御礼被仰付候、御太刀馬代毎之通昨日
向々御納戸江上納、今日奏者嶋津郷十郎久度ニ而首尾
能相仕廻候事、

一御自分事、明後十五日於御書院御太刀進上ニ而御役之
御礼被仰付筈候間、着服長袴ニ而当朝六ツ半時早目可
罷出候、以上、

六月十三日　　当番奏者番
大野多宮
樺山權十郎

新納内藏殿

〆

私事、明後十五日於御書院御太刀進上ニ而御役之御礼
被仰付筈候間、着服長袴ニ而当朝六ツ半時早目可罷出
旨被仰渡趣承知仕奉畏候、以上、

六月十三日　　新納内藏
大野多宮様
樺山權十郎様

〆

但料紙杉原半切切封

嘉永二年酉七月廿五日
萩原天神　月次之連歌

山　何　　久仰
恵ミ世に蘭馥しき宮居哉

結ふも清き露の玉垣　　法阿

急雨の空は貞かに月晴て　　其阿

快気にも船は出けり　　嚴覺

廓珍

吹風もぬるく成ぬる折節に　愍遵

春やかに野は萌る草村　惠祐

あせるは片へに雉子求食らん　太充

明離れたる岡越のみち　〔朱書〕「長崎十郎」通道

煙立里の見渡し遠かれや　〔同〕「長崎六郎」通昭

霜の深田や日の移るらん　〔同〕「本田矢右衞門」親德

柴漬之水のミわたの溝河に　昌意

冬木の柳かせの間に〳〵　〔朱書〕「村田平内左衞門」謙麿

賢か栖か夫なん問まほし　〔同〕「谷村平左衞門」村貞

碁に生死は昔にそ聞　〔同〕「滿尾喜右衞門」貞休

唐土の使容易帰り来て　〔同〕「小林一學」政國

今にひろこる法のすゑ〳〵　〔同〕「馬場傳兵衞」篤烈

夜な〳〵はこころの月の明らかに　〔朱書〕「畠山藤次郎」義胤

露も消せぬ常の灯　〔同〕「相良甚太夫」長是

身にしむは埋めし玉の跡思て　〔朱書〕「佐多彦太郎」直方

のほれは下る此稻荷山　〔朱書〕「北鄕男吏」久央

祈猶かけぬる花の木綿襷　執筆

契りし袖にめくり逢春

嘉永二年酉八朔御次第書之内

一御対面所江

御出座

何……略ス、

川上式部

右御太刀持参御中段御敷居内四畳目下ニ置之三畳目ニ而御礼、御右之方江着座、御家老御取合御意、又御取合有而退座、

右相済月番御家老・大目付御中段御縁頬之方ニ相詰、

新納内蔵

伊集院亘

山田轉

諸地頭

右内蔵・亘・轉御中段御敷居内上三畳目ニ而御礼、其外両人ッ、二畳目ニ而御礼退座、

但進上之中紙目録於敷舞台奏者番請取之、且桂内記儀諸地頭引続家ニ付、進上物有之事候得共、当分地頭職被下置候付、其場ニ而進上有之、

新納衛守

町田式部

右敷舞台舞羅戸より三畳目ニ而御礼退座、

但進上之中紙目録於敷舞台奏者番請取之、

右之外ヶ条略ス、

一少将様江

川上式部

右於敷舞台奏者番出席、進上之御太刀納之

中紙

義岡蔵人

新納内蔵

伊集院亘

山田轉

諸地頭

新納衛守

町田式部

右同断進上之中紙目録納之、

但桂内記儀諸地頭引続家ニ付、進上物有之事候へ共、

当分地頭職被下置候ニ付、其場ニ而進上有之、

右外之ヶ条略ス、

右は川上式部事は年頭・八朔着座ニ而、拙家ノ山田家は年頭着座迄被仰付候得共、其後初而御式被為請候付後年為見合記し置候、尤此節罷出御次第之通御礼申上候事、

但式部も轉も同断被罷出候也、

天保中有妙円寺再造之事、余以御用人職与其事、肇于七年丙申七月、竣于翌年正月其事、八月二十九日官命諸有司、与其事者各褒賜焉、余亦賜紗綾二巻、恩思吾祖者翁君(新納忠元)、奉事松齡公(島津義弘)也、忠勲恩寵両是世所旁知焉、今夫久仰以乏与公之神廟再造之事、豈其夙縁欤不亦奇遇乎、於是染之搗塵色製直衣、以伝子孫爾、

嘉永二年己酉九月穀旦、新納久仰誌、

恩賜細綾光沢滋、戦袍裁得奉持時、

徴躯奮励恩酬国、不以治安忘乱危、

一奉追啓候、然は

慶長五年九月十五日

松齡様關ヶ原御合戦之節御供之面々抽戦功被遂忠死候方々既当年弐百五十年御相当ニ付、当九月十五日右戦亡霊尊地於福昌寺御祭可被成下段被仰出、右戦死之御方并子孫江茂拝礼等被仰付候旨被仰渡、就而は畠山家御先祖長壽院(河内盛淳)様ニ茂右戦死之内ニ而誠ニ以難有次第、夫ニ付於畠山茂於大興寺御法事執行可被遊段畠山家より御吹聴被仰下奉承知、於当方茂右被仰出之趣外聞旁無此上難有次第奉存候、依之私茂兼而御国許江罷下度存心之折柄、右御法事之儀被仰下候ニ付而は、実ニ幸之事故、九月迄ニ是非罷下参詣仕度、且は是迄愚父事度々罷下り種々厚御世話預御懇命候儀ニ付、万事御厚礼旁下向可仕心組ニ而今より色々家事向万端取片付、折角都合仕居候間、左様御承知置可被成下候、尤及御聞之通何分私儀愚成者、殊ニ始而之下向何様茂不相弁候間、何卒御地江罷下候節は不相替愚父同様御懇命御引廻之程今より呉々茂宜敷御願奉申上候、猶又是迄遠

路之事故、不思任御疎遠打過候、御断旁且は兼而厚御
懇命ニ被仰下候御礼段々相崇候得共、中々難尽紙上候
間何分罷下拝
御尊顔万端御厚礼可奉申上候、先は暑中御伺旁奉申上
度、以愚札如斯御座候、猶期後喜之時候、恐惶謹言、

嘉永二年酉也
六月五日　　畠山助右衛門
新納内蔵様
御同氏次郎四郎様

一未得御意候得共
一筆啓上仕候、寒冷之節御座候処、先以其御表
御領主様奉始各様益御安泰被遊御座恐悦至極奉存候、
次ニ当方無異罷在候条、乍憚御休意可被成下候、然は
此度愚兄事始而尊地江罷越候ニ付而は、種々御叮嚀之
御取扱殊ニ滞留中折々見事之御品々御恵贈被仰付候趣
同人より文通ニ而申越、誠ニ毎度御懇命之程不浅千万
恐入難有仕合、御厚礼之程難尽筆紙大慶仕候、乍憚此
段各様より宜敷御厚礼被仰上被下度奉頼上候、随而甚
麁軽之至奉存候得共、漬松茸一桶進上之仕度奉存候間、
是又宜敷御披露被成下度奉希候、先は右御厚礼申上度
以愚札如斯御座候、恐惶謹言、

酉十一月　　助右衛門弟
畠山助三郎
新納内蔵様
御取次
御役人中様

一筆奉啓上候、甚寒之節御座候処、高館御揃益御勇健
被遊御座大悦至極奉存候、次ニ当方無異罷在候条、乍
恐御放念被遊可被下候、扨私儀初而御国許江参上、就
而は、種々御叮嚀之御取扱、殊ニ格別之思召を以節々
御馳走并毎以結構成御品尚又御餞別として誠ニ以重宝
之御品々御取揃御恵贈被仰付、毎度不相替格別之御懇
命中々難尽筆紙千万難有仕合、此段厚御礼奉申上候、
随而私儀御国元出立後、道中并長州下之關より乗船、
海陸共聊無別条当月十六日無事帰宅仕候、乍恐是又御
休意被遊可被下候、猶筆末ニ相成恐多奉存候得共、御

奥様始御家君様方江宜敷御厚礼深奉希上候、将又、此節委敷御礼をも可奉申上筈ニ奉存候得共、帰宅後日数も無之、彼是取紛失敬仕候、何れ後便を以御厚礼可奉申上候、先不取敢御礼旁無事着、乍失敬御吹聴奉申上度迄、取急キ以乱筆如斯御座候、尚暫は寒気烈敷御座候得は、折角御自愛乍恐専要奉祈念候、恐惶謹言、

十二月十八日　　畠山助右衛門

新納内蔵様

御同苗次郎四郎様

一御自分事大番頭江御役替御勘定奉行勤被仰付御礼相済候得共、家ニ付進上物被致来候間、御役ニ付而之進上物不及沙汰、来年頭より家ニ付御太刀進上被仰付候、尤年々仰渡は無之候、此旨伊織殿被仰候、以上、

酉十二月十四日　　宮之原主計

川上右近

新納内蔵殿

〆

私事大番頭江御役替御勘定奉行勤被仰付御礼相済候得共、家ニ付進上物被仰付来候間、御役ニ付而之進上物不及沙汰、来年頭より家ニ付御太刀進上被仰付候、尤年々仰渡は無之旨伊織殿依仰被仰渡趣承知仕奉畏候、以上、

酉十二月十四日　　新納内蔵

宮之原主計様

川上右近様

〆

折紙杉原半切ニ而切封し、

一嘉永三年戌正月三日、五ッ過出殿、毎之通御対面所江四ッ時

御出座被遊、一所持之面々持参太刀相済、引続当年より川上式部・拙者・山田轉三人持参太刀着座被仰付難有、御次第通罷出　御土器迄も同様致頂戴候、首尾能相仕廻候事、

一同日御謡初ニ付、八ッ時分又々御対面所江　御出座、御囃子初り御嶋台之御土器御一門方以下順々頂戴、拙

者大番頭之御役場ニ而罷出　御土器頂戴いたし候、左候而七ツ時分相済御役々退散候事、

嘉永三年戌年頭御規式之御次第抜書

三日

御対面所　御上段江

御出座（御熨斗目御長袴）御先立御家老、

此間数ヶ条略ス、

島津又六郎

島津出雲

右御太刀持参、御中段御敷居内上四畳目上江相備、同下ニ而御礼退座、

但表御年男御太刀拾之、

一数之御土器

一長柄之御銚子

一御加

但御酌表御年男

島津又六郎

島津出雲

右御上段下一畳目ニ而御盃頂戴、御土器持下数之御土器等引之、

川上式部

新納内蔵

山田轉

右壱人ツヽ御太刀持参、御中段御敷居内四畳目下ニ置之、同三畳目上ニ而御礼、御右之方江一列着座、御家老御取合御意又御取合有之、

但表御年男御太刀拾之、

一数之御土器（御給仕表御年男）

一着座之面々江御三献本膳汁被下、足打、

但給仕表御小姓

一長柄之御銚子

一御加

但御酌表御年男

御盃被　召上候節、着座之面々御縁頬江相下、敷舞台之内江扣居、御中段上より一畳目上ニ而御盃頂戴之、

復座、一列之面々相済御銚子入・数之御土器等引之着座之面々江被下候、本膳引之、一同御礼、御家老御取合有而頂戴之御土器持下、

外之ヶ条略ス、

川上式部
新納内蔵
山田轉
志岐小左衛門
田尻務
中西十郎左衛門

右

太守様江御太刀進上之同日、敷舞台江奏者番出席、少将様江家ニ付進上之御太刀納之、

外之ヶ条略ス、

一改年之御吉慶不可有際限御座目出度申納候、益御機嫌能被為遊、御超歳御座、恐悦至極奉存上候、乍恐右年始之御祝詞奉申上度以愚札如斯御座候、猶奉期永陽之時候、恐惶謹言、

正月二日　　畠山助右衛門
　　義貫判

新納内蔵様

一改年之御吉慶猶更不可有休期御座候、弥以貴家御揃御安康被成御超歳珍重存候、於当方拙者儀無異致加年候、乍慮外御安意可被下、先以年始之御祝詞為可申入如是御座候、猶期後喜候、恐々謹言、

正月廿八日　　新納内蔵
　　久仰（花押）

畠山助右衛門様

御状忝致披見候、当地御出立之後中途無御障御帰家ニ而御家内様方御悦之由細々被仰越趣致承知候、従是茂大慶之至目出度御祝詞申入候、誠ニ此節は始而之御旅行殊更御不如意ニ茂為有之筈候処、染々御愛惣（思）も不行届、御疎情之至跡（ママ）更残多存候得共、段々御挨拶之趣忝存候、且又貴様御帰着無之以前も御宿元より御細状其上松茸一桶被送下、実ニ珍物ニ而色々御叮嚀之御書面不浅忝存候、彼是之御礼申上度如是御座候、御家内様江茂宜敷様深々御伝言奉頼候、猶万喜追々可得御意致

閣筆候、恐々謹言、

正月廿八日　　新納内藏

畠山助右衞門様

尚々御家内様方弥以御安康被成御座是亦珍重存候、拙家内も皆々無異罷在候、御安意可給候、先々御答礼旁如是御座候、

一追々御状相届忝致披見候、春暖ニ茂罷成益々御安康御起居被成御家内様ニ茂弥以無御障之由珍重存候、於当方も拙者無異儀、次ニ愚妻并次郎四郎とも無異罷在候間、乍慮外御安意可給候、然は爰元御発足以後長途も無御滞御帰家ニ而万端之成行御家内様江茂御咄合之処何れ茂御同慶被成候由、細々御挨拶共被仰越候趣殊更御念之入候御取合ニ而奈良晒老反被懸御意候段、御厚志之程不浅致受納候、誠ニ御滞在中ハ遠国御不如意ニも可有之乍存、何篇御愛惣茂不行届候所、右等之御取合近比以御叮嚀之儀と返々茂御礼厚申上候間、宜敷御納得可被下候、将又御本亭御造替之儀二月十一日弥以御願望之通大坂表髙崎氏より御承知被成候由、是以細々御吹聴被仰越候趣忝致承知候、最早御成就も同然ニ而頓と御安堵被成候半、爰元よりも藤次郎殿始一統御同様致大慶候、則より北郷氏御談合ニ而御心配被成候由嘸々其通御座候半、然共誠々久々振御建替ニ而結構ニ御座候茂出来候半と無此上御慶事ニ存申候、折角万事被懸御心頭御作事行届候処、御肝煎被成度専一存申候、猶爰元ニ而も藤次郎殿其外肥後・徳田なと申談、向々江御礼等も申述相成候間御安心可被成候、委細は御本家より書通相成可申間態と省略仕候、乍重言も折角御肝煎被成、此上は御造替速ニ御成就相成候様御心配被成度呉々存申候、先は度々御細状被遣殊ニ反物迄も御取合被懸御意候御礼、且は御訴訟御達被成候御祝等申上度愚札如是御座候、猶万喜重而可給御意候、恐々謹言、

三月廿八日　　新納内藏久仰（花押）

畠山助右衞門様

尚々時分柄ニも相成候間、時候無御障様御自愛被成御

精勤度、左候而御家内様江茂宜敷様御礼、且御祝共御伝声奉頼候、猶爰元愚妻并次郎四郎よりも万々御祝旁申上度候間、何茂宜敷御聞取可被下候、以上、

一武村三穂崎借地仮屋之儀は祖父久儔君別而御遊楽之場所ニ而引続久命君も御遊楽所ニ而段々栖居も御作添等有之、此節ニは相応之畳数相成数十年拘居候場所候得共、屋敷石所務上納方は勿論、番人召置候ニ付而も扶持米等不渡置候而は不相叶、尤四壁何程念入候而も近隣困窮者多居住ニ候へは、毎々忍入竹木作物迄も取荒し、別而締も難行届、何分損失多キ場所ニ而当時拙家不如意ニ而は始抹不行届候ニ付、得と及吟味候処、右之通御両代御楽被遊候場所柄ニ而、此涯脇方等江譲渡之儀は不本意ニも候得共、兎角今通りニ而は永続難致事候間、外方江売渡候儀可然相決し、嘉永二年酉九月東郷一介肝煎ニ而前田圓節を以吉利仲殿方江譲渡之相談相達し、家作居付ニ而代金三拾五両ニ致約束、則手付金として酉九月初五両程入付有之、残り三拾両は戌二月入付有之候ニ付、同四月初右代金を以土師彦兵衛持高伊集院土橋村宇都門之高拾弐石余致取納貸置候、尤壱石ニ付弐拾三貫文ツ、、外ニ正月より三月迄三ヶ月分返り利銭八貫三百五拾弐文、都合弐百八拾六貫七百六拾九文、金ニして三拾八両弐朱と八百三拾三文ニ而候間、不足分ハ外金より差足し右之通取計置候、左候而吉利家用頼西郷助右衛門江此方用頼より右地面は武村之内百姓相体借地之場所候間、屹度譲渡等之証文引結ニは及間敷、郡方迄名面仕付之儀申出置候ハ、、可然申談為致置候処、彼方より郡方等江申出有之、同四月九日帳面仕付申出之通相済候段西郷氏より引合有之候事、

但本行仮屋代金三拾五両丈は永々取納貸ニ取扱、別段差分到度存候事、

嘉永三年戌五月廿五日　萩原天神月次之連歌発句

賦何路連歌　　久仰

梅桜茂り添けり神の庭

四手の田長や植る祝部　法阿

五月雨の空の八重雲漸晴て　〔朱書〕「隱居谷村平六」休山

道の往来の袖余多なり　〔同〕「長崎六郎」通昭

出より月や隈なく照すらん　其阿

峯や麓も渡る秋風　〔同〕「長崎十郎」通道

聞ゆるは翃後先鴈の声　「小林一學」政國

明離たる浦の遠近　廓珍

釣船は浪かた〳〵に漂ひて　「馬場傳兵衛」篤烈

海士は笘屋を差て帰れり　惠祐

半天に雪気の雲や覆らん　「滿尾喜左衛門」貞休

薪を運ふ八瀬や大原　太充

恋すてふ名をも橈に立初て　「本田矢右衛門」親德

数のうらミも増る此比　「佐多彦太郎」直方

錦木も千束に積る徒に　宥山

拙き宿縁いかにもかせん　徹道

最早も仏の道に入まほし　「東條三二」時敏

遙〳〵仰く高野山寺　「北郷男吏」久央

夜な〳〵ハ心涼しき月澄て

正歸

白露結ふ今年生の竹

村貞

花の紐あめの恵に解ぬらし

執筆

囀り替す声の鶯

一筆啓上致候、秋冷之節相成益御安康被成御座候半、御家内様茂御同様御座候半珍重存候、拙家何れ茂無異罷在候、乍慮外御安意可被下候、扨は暑中為御尋御細書被遣忝致披見候、自此方は乍毎御無音背本意候、遅成候得共御安否御尋申上度、且亦御礼旁如是御座候、恐惶謹言、

八月十九日　　新納内藏

畠山助右衞門様

猶々乍毎次郎四郎并家内共江も御伝筆御丁嚀之儀不浅忝存候、御礼取束如是御座候、乍筆末御家内様方江茂万々可然様御伝声奉頼候、

副啓

御添簡を以細々被仰越候趣逐一致承知候、御本亭御作事之儀大坂御留主居方より折々見分も有之、御急キニ而大工始諸職人多人数御取掛被成大キ御出精被成候而嘸々大粧之御心配可有之候得共、最早御座之間始、御門迄茂相建候由ニ付、追々御成就相成結構御座候筈と遠察いたし候、既ニ　御発駕相成、此節は新御本亭江御止宿ニ而御供方迄も新敷御座配有之、何れも難有太慶御座候半、久々振御本亭も御建替ニ而誠ニ結構之御儀ニ候得は御家内様初御一類方一統御同慶ニ被成御座幾久敷目出度奉存候、此節は琉人も罷登り候付、船中筋其表も賑々敷致通行候半、乍御心配恐悦之御儀ニ御座候間、折角御止宿等無滞御用御勤被成度専一奉存候猶万吉重而可得御意如是御座候、以上、

八月十九日　　新納内藏

畠山助右衞門様

御肴料　金弐百疋

右は誠軽微之至り御座候得共、今般御本亭御造替ニ而初而御旅宿相成、恐悦之御儀奉存候間、御祝義之験迄致進覧之候、御祝納被成置可被下候、

新納内蔵
何れ茂より

畠山助右衛門様
何れ茂様江

当家宝伝之道服并陣扇子等之訳、職原家伊木七郎右衛門常誠より承候趣、左之通、

道服

地小柳

色濃茶

裏平絹、色表ニ準ス

右小柳は和之絹にて三位・四品之御方冬之裾被相調候絹ニ而、三位以上は地に藤之丸或大菱等の紋あり、四品以下は無紋之由也、此道服は肩に獅子の織出し有之故、地の紋無之候半、尤道服は三位以上燕居之服ニ而地合、紋柄等委敷沙汰ニ不及常に被用候得共、四品以下は屹と服用不相成候ニ付、右等之場ニはヒフなとの類被用事之由也、

但小柳と云当今婦人の帯地等有之候得共、是は別段之品也、色茂只今はコヶ茶と唱候得共、コヶ茶と云言葉古キ物ニ先不及見故ニ本文のことく申なり裏の色表に準する事古例の第一にて、当今のやう裏の色替りたるを用るは近世の俗也と被申候、

陣扇

右茂至極之賞美にて、就中腕貫の房之仕様扇の要より通し、腕貫にいたし、夫より一ッニ取り合せ組たる余りを一と結ひ六ヶ敷結ひ、其余りは、夫形の房にて候、此所当今は都而何品も緒の余りに別段同し糸を添、太く成し申さハ、こみはらひなとの作り様に似寄たる栫ハ見分のミに拘ハりたる事にて甚俗事也、古例は此陣扇のことく全体の緒之余りを夫形り結ひ置、房にいたし候事本式ニ而、常誠も是迄僅二品程ヶ様ニ拵たるは見及たるとて深く感賞いたされ候事、

但陣扇入付の箱茂蒔絵等之仕様至而古体相見得候得は、決而是茂其節より相添候物欤と賞美ニ而候、

右は昨十日伊木常誠相招家伝之品々入一覧、訳承り候成行為後年書記し置者也、

嘉永三戌　　九月十一日　　内蔵

一筆奉啓上候、甚寒之節御座候処先以其御表　尊家様益御安泰被遊御座大悦御儀奉存候、次ニ当方無異罷在候間、乍恐御安意可被下候、誠乍恐寒中御伺奉申上度、以愚札如斯御座候、猶奉期後喜之時候、恐惶謹言、

十二月五日　　畠山助右衛門義貫判

新納内蔵様

御同苗次郎四郎様

別紙

八月十九日御認　尊札難有拝見仕候、弥御安泰被遊御座幾重も恐悦奉存候、扨は　御本亭造作之儀奉申上候得は逸々御承知被下、殊ニ初而御旅宿相成候為御祝、御肴料金弐百疋遠路之所御厚意被成下、誠ニ御懇命之程不浅難有奉存候、御礼之段幾重ニも厚奉申上度、家内共一統より奉申上候、尤　上様当地九月廿四日御機嫌能　御光着被遊、新御本亭江被遊御止宿、御機嫌能御沙汰被成下候段奉承知、難有奉存上候、翌廿五日猶御機嫌能御発駕被遊別而難有奉存候、此節ヶ様難有被仰付候儀共ハ昨冬　御國様江出府仕段々尊公様方御懇命被成下、旁御厚配被成下候御訳を以、右通成就仕

御本亭等造替仕、御旅宿相勤候様罷成候儀共、何共御礼之奉申上様も無之、家内并類中茂打揃大慶奉存候、乍恐御礼之段幾重も奉申上候、誠ニ筆末恐多奉存候得共、御奥様江茂宜敷御鶴声被仰上被下候様万々御願奉申上候、猶奉期後喜之時候、恐惶謹言、

十二月五日　　畠山助右衛門

新納内蔵様

御同苗次郎四郎様

一嘉永三戌年大姶良郷新八幡宮并龍翔寺寺家御建替ニ而（島津氏久）齢岳公様・（島津氏久室）敬外様御位牌御造替有之、同年十二月十八

日御点眼御供養ニ付、御家老御代参末川近江殿、大目付寺社奉行初嶋津主殿被相勤候、勿論新八幡宮は御代参無之、寺社奉行は成就見分、御家老は自分参詣ニ而候由、

一白銀弐両　　右新八幡宮江末川近江殿より献納、

一同壱両　　右同社江嶋津主殿殿より同断、

一同弐両　　右同社江地頭新納内蔵より同断、

一龍翔寺江御進納等左之通、

進上　大官香　一包　　以上、　　松平大隅守齊興

右　齢岳様江　進上　大官香　一包　　以上、　　松平大隅守齊興

右　敬外様江　一大官香壱包　但御目録無之、

右　溪月様江　献納　金子　百疋　以上、　　末川近江久平

献納　御香奠　金百疋　以上、　　島津主殿久陽

進上

金子　百疋

以上、

新納内藏
久仰

一右之通寺家御造替ニ付、当分地頭之事候間御牌前江唐金御香炉壱ツ、十文字御紋彫附致寄進候、銘彫左之通、

嘉永三年庚戌十二月十八日

地頭
新納内藏久仰

右は御物御取替調ニ而致進納、已後返銀上納願出候事、

引付

銭弐貫七百文

新納内藏殿
役人江

右は大姶良龍翔寺

齡岳様御仏前御用之唐金御香炉壱ツ、御物御取替を以調方被仰付寄進被仰付候旨、返銀として上納候間可被受取候也、

亥三月二日

御細工奉行
東郷半助印

御細工所藏

役人江

一金子弐百疋

一扇子壱箱

右弐行御家老衆より龍翔寺住持江被下候、

一湯葉壱箱

一扇子壱箱

右弐行寺社奉行衆より同断、

一金子弐百疋

右御家老衆より所役江被成下候、

一同百疋

右寺社奉行衆より右同断、

一寺社奉行衆は十二月十四日大姶良江御着、同十九日朝六時分御出立有之、

一御家老衆は十二月十六日大姶良江御着、同十九日暁七ツ時分御出立有之、

一御家老衆并付役衆且供廻迄旅籠払被仰付候事、
右之通十二月十八日
御点眼御供養首尾能相済候事、
一右御点眼御供養相済候ニ付、近江殿并嶋津主殿殿江為
御礼同月廿三日見廻置候事、
一大口飛諏訪社之儀は忠元君市山城に被成御座候節、鎌
一双飛来り其後大口城御平治之後も又一双飛来り、旁
奇瑞ニ而忠元君御代御勧請有之、飛諏訪と唱大口麓宗
廟永峯諏訪社之脇ニ引並、昔年より勧請有之候、其後
寛永十六年卯正月忠清君より高壱石五斗御寄附被成置
于今当家より参来候処、嘉永三年戌十二月十四日夜陰
永峯諏訪社焼失ニ付、飛諏訪社も引続之事にて同時に
致焼失候、成行左之通、
飛諏訪社一宇
四敷弐間半
礎茅葺
右は十二月十四日夜半過永峯諏訪社御供所辺より出火
ニ付、早々多人数駈付候得共、何分ニも人家離れ殊ニ
水場遠く防キ方不及手、即刻焼上り永峯社焼失ニ付、
飛諏訪社も引続キ差并ひ居候得は、則火移り、尤永峯
社・飛諏訪社共茅葺之故ニ即刻火勢強く相成、神体も
遷座不相調、都而焼失いたし所中一同残心之至候へと
も不及是非次第ニ候旨、所役々并木之氏村役々共より
申出候事、
但永峯諏訪方社
一宝殿　五敷四間
一舞殿　五敷四間
一拝殿　四敷五間
一御供所　四敷三間
都而茅葺礎
一飛諏訪方社焼失ニ付、焼正体之鎌二ッ、仮り殿三尺四方
位之小社、大口郷士宮牟禮關右衛門志を以則取付、茅
葺相調寄進造立いたし候旨、亥正月元日を以申越候事、
一飛諏訪方社之儀、前文之通永峯諏方社之側ニ昔年より勧
請有之候得共、篤と及吟味候処、木之氏村之儀近代一
円之領地ニ被下置候而は、彼之方へ此節奉遷宮候ハ、、

往々祭式旁行届、可然相考候付、御鬮申請候処其通御鬮茂下り候ニ付、木之氏諏方社之引続ニ南西之方江引並奉遷宮候ハヽ可然、村木は木之氏村立木ニ而相調、同五年子正月より宮作り取付四月ニ至成就ニ而、同廿八日正遷宮無滞相整候事、

但遷宮日取等之儀は子四月之場ニ委細記し置也、

一嘉永三年戌十二月、岩下家御姉様此内より御病気之処、弥増御不塩梅被成御座候ニ付、廿四日より頼合ニ而引入、昼夜御看病方として差越居候処、追日御煩増シ相成、廿七日夜四ツ過終ニ御養生不被為叶御死去也、依而翌廿八日御葬送有之候ニ付、御葬場等始終差越、何も差引いたし候事、

「久仰雑譜四終、嘉永三年戌十二月終」

〔表紙〕

新納久仰雑譜

嘉永四年正月ヨリ
同年十二月迄

「久仰譜巻五嘉永四年正月ヨリ同年十二月迄」

〔貼紙〕
「以下四拾枚原書欠く、如意以テ訂正セリ、」

一嘉永四年亥正月四日、左之通忌御免被仰付候事、

御自分事忌中ニ而候得共、御用差支候ニ付忌被成御免候条、明日より可被致出勤旨御差図ニ而候、以上、

正月四日　　谷川次郎兵衛

新納内藏

〆

私事忌中ニ而候得共御用差支候ニ付、忌被成御免候条、明日より出勤可仕旨依御差図被仰渡趣承知仕奉畏候、以上、

正月四日　　新納内藏

谷川次郎兵衛様

〆

折紙杉原半切ニ封之、

右は岩下家御姉様御死去ニ付而也、

右ニ付翌五日登様・谷川次郎兵衛江相付御礼申出置、夫より出勤いたし候事、

大村郷士
牧田五右衛門

右者当分は新納内藏所江役人致奉公居候、右之者来ル巳正月比砂糖蔵手伝代御座候哉ニ承知致候ニ付、何卒右手伝勤被仰付被下度、御内訴申上候、

右之通前以より諸方江御内意申込置候処、嘉永四年亥正月十六日右勤難被仰付、引替として金弐拾両御内々頂戴被仰付旨、御勝手方書役長崎勘助より道島源五郎

致承知、御金請取難在(有)次第ニ而候、尤右はお逸様御内願之儀此方役人名前を以御内意申込候処、右之通り被仰付難在(有)仕合ニ而末川家等江御礼申上候也、

覚

金弐拾両　　銭ニして百五拾貫文

内

壱両　牧田右右衛門江名寄差出候礼分として遣候事、

銭弐貫五百弐拾四文

看六折代

銭四貫八百文

受(請)酒　四拾八盃代

但八盃樽六ッ分

銭弐貫三百文　西洋布一反代

銭壱貫五百文　煙草三斤代

看　一折

酒　一樽ッ、

末川近江殿　長崎勘助

迫田堅助　相良覺太郎

右之四人江為礼遣候事、

看　一折

酒　一樽

西洋布　壱反

竹下三次江同断、

看　一折

酒　一樽

葉煙草三斤

藤井才之丞江同断、

内実合銭高

拾八貫六百弐拾四文

差引

百三拾壱貫三百七拾弐文

右之通砂糖蔵手伝引替金子弐拾両被成下候内、礼銭等差引残り丈お逸様御方質借り等品々御取返し跡舗相成候間、以後為見合記置候事、

亥正月廿二日

一筆啓上仕候、春暖罷成倍御勇健被為成御座、珍重御儀奉存候、御発足以後不奉伺御左右茂誠以御無沙汰奉背本意候段、真平御宥恕奉願候、随而私儀無異儀罷在候、乍憚御放意可被下候、然は御発足以前末川家江御内訴奉願候砂糖蔵手伝勤之儀、去ル十六日御勝手方書役を以承知仕候は、右勤方願望之者諸御役場等より段々申出有之、御繰合難出来候ニ付、右勤方は難被仰付候、然共内願之趣無拠相聞得候間、別段之御吟味を以極内々ニ而金弐拾両被成下候段承知仕、即御金茂御渡被下、誠ニ以難有次第奉存候、右ニ付而は初発より偏ニ無拠御内訴被仰込置被下候御蔭を以、右様相成候儀ニ而不容易御取扱別而難有次第難尽紙上奉存候、御礼万々厚申上度愚札如是御座候、猶万緒奉期後喜候、恐惶謹言、

嘉永四年亥

正月廿九日　　新納内蔵久仰判

川上筑後様
参人々御中

乍憚奉別啓候、

此節は誠ニ以御繁務、定而御心配多被為渡候半、然共琉人勤方茂無滞相済、最早帰路罷成候段追々承知仕大慶奉存候、最早御心静ニ被為成候半、最久々ニ御出府之御事故、珍敷御見物事等も被為在候御儀と奉存候、折角時季等も被為在候御儀と奉存候、御自愛被為成度専一奉存候、私も当勤場は同席本田六左衛門刀掛物等至而心得之方ニ御座候得は、折々吟味物なとも相見得、又は間々懸物目利之企等有之、幸ニ稽古仕候、先勤場は御懇命被成下昔咄等ニ而楽ミ候得共、当分は右次第ニ而御座候、御一笑之為此等之段失敬仕候、已上、

尚又申上候、此節難有被仰付候段私より折角厚御礼申上候様ニと姉より茂申付候間、左様被聞召置被下度偏ニ奉願候、勿論本文之通極内々御取扱御座候得共、ヶ様申上候茂如何敷御座候と奉存候へとも、御礼不申上候而は不本意奉存、此段申上候、何とそ宜敷御聞納被下度奉願候、尤御繁用可被為在候ニ付、御返礼等は御断申上置候、已上、

亥正月廿九日　　内藏

筑後様

一筆啓上仕候、春暖罷成弥御堅勝可被成御勤務珍重奉存候、其以後御無音罷過居候処、大坂辺より御細翰被下忝致拝見候、御多用中御懇命之御儀忝奉存候、即々御礼も可申上之処不能其儀重畳失本意候、

扨は此内より毎々御内訴御面働筋奉願候一条、御発足之砌向々しらへ相成居候通無相違被仰付難有次第ニ而其後追々品立伺等手数仕候処、自他国商売は被成御免候得共、求摩筋江取下候儀は不相成段被仰渡候ニ付、内々付属之儀彼是致吟味、下町人矢野十兵衛・田邊太兵衛・岩城勇助等江支配人致約束、五百両位出金茂相窮置、仕込方相伺候処、又々御吟味之訳有之、柞灰は三百俵、櫓木は四百挺年々致取下候様、無左候得は高岡御手山等江差合候儀も有之段承知仕候、私共内存は折角山方為致出精、品数多く出来候様為働度相含居候得共、右様承知之上は自由筋可申上様無之候間、仰渡通手段相立、既今明日より山床江支配之者共差登せ候手筈ニ而難有次第御座候、畢竟右通之仕合最初より段々御懇意御配慮被成下置、御蔭を以兎角哉之都合被成下置、深々難有奉存候、此内より御弘且成行も時々可申上儀ながら無程御下着之儀と差扣居候処、今暫御詰相成候由致承知甚延引罷成候、返々茂御懇意候故右次第別而難有奉存候、御礼万々厚申上置度、如是御座候、恐々謹言、

嘉永四年亥

正月廿九日　　新納内藏久仰判

友野市助様

参人々御中

一亥二月十五日、霊社様御祭相調候、尤当月三日迄は岩下家之儀ニ付差合有之、右之通也、

一二月廿一日、御一門方并諸大身分其外月次御礼罷出候面々、四ツ時御用ニ付罷出候処、於敷舞台豐後殿・石見殿・近江殿列席ニ而、太守様御隠居

少将様御家督之儀御願被仰上置候処御願之通被仰出候段、御到来候旨、各奉承知候様口達ニ而被相達、且御書付弐通被為渡候間、拙者相進ミ致領掌候、尤今日大番頭先役右門殿・監物殿出席無之、拙者頭席ニ罷出候ニ付右之通也、

一太守様御六十余歳被為成

少将様御儀御年齢被為成候ニ付、御政務御譲、可被遊御隠居旨被　仰出、其段嶋津将曹御使ニ而被仰進候処、今暫は是迄之通被遊御指揮被下候様被遊御願度思召候得共、最早御決心之御事ニ候得は御止も難被仰上御事ニ付、御請被仰上、左候而御政事向ニ付而は不容易御事ニ付、未タ御取馴も不被遊候ニ付、万端御相談御介助被成進、御厚御願之趣被為在候処、御尤ニは被思召上候得共、被遊　御隠居候上御政事向ニは御立障難被遊、御断思召之段被為及御返答候ニ付、再往無御拠御願被仰上候処無御余儀被遊

御許容候段御到来候、下略、

二月廿一日　　豊後

石見

近江

一太守様御隠居（島津斉興）

少将様御家督之願書先月廿九日御用番阿部伊勢守様江被差出置候処、去ル朔日御老中様御連名之御奉書御到来翌、二日　太守様御御名代南部遠江守様（島津斉彬）

少将様御登城、於御白書院御縁頬御老中様御列席之上御用番松平和泉守様より

太守様御隠居

少将様御家督、願之通被仰出候段御到来候、此段被成承知御両殿様江御祝儀可被申上候、

二月廿一日　　豊後

一弐月廿三日、御用人宮之原主計を以左之通奉承知候、

宰相様御付并掛外は都而是迄之通

御家督様御方江相勤候様被仰出候条、難在可奉承知候、

二月廿三日　　豊後

石見

近江

一三月朔日、御用之儀候間御一門方并諸大身分其外月次御礼罷出候面々、四ツ時可罷出旨昨日被仰渡致承知候ニ付今日其通罷出候処、於敷舞台御家老方列席、豐後より今度就　御家督何れ茂是迄之通猶又入念相勤候様被仰付候条、難在可奉承知旨被仰達候、左候而左之通被仰渡候、

御袖判

今度

宰相様依御願御隠居、我等江家督無相違被　仰出候、領国之輩、専重

公義之御政道、万端可相慎候、国家之仕置先規之通申付候条、不致忘却堅固可相守之者也、

嘉永四年二月弐日

家老中江

今度我等隠居、修理太夫家督付而は、政事向等先規之通ニ而、猶又万端相励各職分を相守精勤可申候、

右之趣国中并末々迄茂可申聞候、

今度御願之通御隠居御家督被仰出候ニ付、御袖判仰出并

宰相様仰出之趣御領国之輩、謹而奉承知、専重

今度御願之通

公義之御政道御家之作法、御先規之通被仰付事候条、可奉得其意候、御代替之時節候得は他所之見聞茂可有之事候間、各職分を相守風俗を不乱相慎、万端懸心頭可有精勤者也、

三月　　豐後

石見

近江

右之通段々致承知、是迄之通相勤候様被仰付候付而は、一役ツ、連名之口上を以相中御礼壱人御三役方江御礼見廻いたし候事、

一五月八日、晴天間々細雨、今日

御初入部御着城ニ付四ツ前出殿、四ツ過より御城下供屋江扣居候処、九ツ打、無程
御馬被為召、御着服御丸羽織・御野袴被遊候而御機嫌能御着城被為在候付、御堀涯江罷出奉拝候也、左候而登城於唐之(間脱カ)謁、御家老御着城之御祝儀申上候而退出、

一今日御着城掛於御書院御礼使小松相馬
御目見被　仰付、先規之通御殿より直ニ出立有之候、

一今朝雨降候得共追々晴上り
御着城之時分は晴天相成り至極之御都合ニ而、千石馬場筋・西田町等何方茂罷出候貴賤夥敷人数ニ而候由也

一五月十五日、初而五社江
御参詣ニ付、五半時御供揃ニ而御対面所江
御出有之、拙者ニは前以より登城いたし居候、御出之節高役番所下江罷出御行列奉拝見候、然共今日は雨降何茂覆相掛り候付残り多奉存候、尤今日諸士惣御供ニ而夥数敷事ニ而小番・新番弐百人余、御小姓与千四百八拾人余有之候由、最初諏方江御参詣、夫より祇園・稲荷・春日・若宮ニ而、諸士は諏方御参詣ニ而祇園江御向被遊候節矢張り居形りニ而罷(衍カ)罷在り
御通過之上直ニ清水馬場より坊中馬場江相直り居、祇園より稲荷江御向被遊坊中馬場御通行之上直ニ春日之方江参り大龍寺馬場江並居、若宮江御参詣之節、直ニ御城下之様引立候事之由也、

一五月十六日、御一門方以下諸役人迄も都而御用之儀有之候間、四ツ時可罷出旨昨日被仰渡罷出候処、御筆を以左之通被　仰出候、
今度
宰相様御隠居、我等江家督蒙　仰別而令心配候、依而は以来不心付儀も候ハ、無遠慮異見可申聞候、且又、各初諸役人末々に至る迄専ら御先代之規則ニ基キ我意私欲等無之、正路を心掛上下之情意致通達、国中之仕置行届候様利害得失を考、万端入念可取計候、諸士末々ニ茂弥文武忠孝之道を志、質素節倹之風俗を守り、信義を専として武道之心掛可為専一候、農工商茂代々之

法会を守り夫々之職業を励ミ父祖之考養無怠、日夜家業出精専一ニ候、
右之趣家老中を初、領国一統無心得違可令承知候、猶追々可申達候、以上、

一今度
御家督付而は専
御先代之御規則ニ基キ我意私欲等無之正路を心掛
御領国中之御仕置万端行届候様且諸士末々ニ茂文武忠孝を志、質素節倹を専(守カ)信義を専にして、農工商ニ茂夫々職業を励ミ日夜家業出精第一ニ候旨、御別紙之通御筆を以被仰出、誠ニ以難在
御趣意之御事候条、此旨謹而奉承知　仰出之趣聊無忘却誠実ニ被相守、支配下下役等江茂可被申含候、

五月　　豐後
　　將曹
　　石見
　　近江

右之通奉承知誠以難在(有)次第奉恐入候事、

一五月十七日、大雄山御宮并南泉院江　上様御参詣、尤、御束帯御袴被為召、屹度立御勘定所前通御通被遊候ニ付、同席一列と御門脇江罷出御往来共奉拝候、尤拝見人男女夥敷事ニ而候、

一五月廿四日、今日年頭三日之通御礼被為請候付、五時分より出殿、四ツ時御対面所江
御出座、毎之通一所持面々持参太刀、引次川上式部・拙者・山田轉三人一列持参太刀着座御祝儀申上候節、御家老御取合目出度タフト(マ マ)御意、又御家老御取合有之退座、引次諸地頭等何も正月三日之通御礼首尾能相済候由、九ツ時分相済退散也、
　但一昨廿弐日より年頭之振合を以御初入部之御礼被為請、来月三日迄ニ而被為済候御日割之由也、

一五月廿八日、畠山藤次郎殿牛根地頭職被仰付候、其外

ニ諏訪數馬曾木地頭、其外段々御用ニ而御役替等被仰付候事、

一六月五日、左之通表御用人末川氏より被仰渡候事、

御用之儀候間、明六日四時可被罷出旨、豐後殿依御差図申達候、以上、

六月五日　　末川久馬

新納内藏殿

〆

御用之儀候間明六日四時可罷出旨、豐後殿依御差図被仰渡趣承知仕奉畏候、以上、

六月五日　　新納内藏

末川久馬様

〆

右ニ付六日四時罷出候処、於敷舞台右末川久馬取次を以、

大嶋　　新納内藏家来　山元仲八

右依科遠嶋申付置候得共、宰相様御茶入御拝領付、此節御恩赦被仰付候、

但嶋居付願ニ存候ハ、其訳可申出候、

右可申渡候

六月六日　　豐後

右之通被仰渡候間、口上書を以大目付以上并取次御用人江致御礼廻候、

尤山元仲八親類池田九兵衛役所江召呼用頼を以右之段申渡候事、

一六月十二日、於御対面所御譲物御覧被遊候ニ付、相済候已後拙者ニも相覗候事、

一六月十七日、倅次郎四郎塩ひたし(侵)へ湯治として差越候事、

口上覚

願之通御暇被下候、

六月　　豐後

私嫡子新納次郎四郎事、長々腹之痛有之段々尽手養生仕候得共、今以寸切と全快不仕、此涯湯治相応可仕旨療医より承申候間、何卒三廻御暇被成下度奉願候、左様御座候ハ、以御蔭踊(牧園)之内榮之尾温泉江差越、得と入湯為仕度奉存候、尤療医証文相添差上申候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

亥六月十七日　　新納内藏

証文

新納次郎四郎事、腹之痛有之、私療治仕候得共今以寸切と全快無之、此涯湯治相応可仕見及申候間、如此御座候、以上、

亥六月　　朝稲三益印

右則日月番御用人末川久馬殿江差出置候処、同月廿六日同人取次を以願之通御暇被下候旨被仰渡候也、

右ニ付翌廿七日、明廿八日より差越候段御届申出候、尤往来日数四日相込都合廿五日ニ而筈合候賦ニ付、七月廿三日迄ニ付、廿四日朝今暁罷帰候段御届申出候得は可然候事、右湯治として次郎四郎事、内実ハ六月十七日朝打立新納瑞策同道いたし、家来中村藤次郎下人太郎召列踊之内塩ひたし(浸)温泉江差越候而、七月十七日朝何れも帰着候ニ付、翌十八日、今暁罷帰候、残り日数差上御礼御届申出置候事、

嘉永四年亥六月廿五日萩原

賦朝何連歌

秋近し神之光をまつの月　　久仰

涼しくなひく風の白木綿　　法阿

御祓川岩と柏に浪寄て　　巖覺

名尾頭ハにも明離れけり　　廓珍

漕列る釣の小舟は数々に　　愍道

休山

雲引捨て雨晴し跡　村貞
山端は幾重霞の立ぬらん　時敏
野辺は囀る鶯の声　正歸
薄氷も向ふ朝日に解けらし　直方
趣く旅そ心よけ成　通道
故郷を度々にしも顧て　道昭
涙なからも乗る馬の上　貞休
今更に筆の工や恨むらん　等烈
音信もなき中の難面さ　昌意

此秋は遠嶋守の身と成て　政國
月を友とし送る年々　太充
菊の水堪ぬ流や汲ぬらん　宥山
祝言嘸な百數の内　久央
けふは早国の司に撰れて　其阿
優し敷見ゆる袖の色々　義胤
野遊に花を幾枝か折捽　執筆
暮るゝも知らぬ心永き日

一七月廿五日、倅次郎四郎御用致承知候事、
一御用之儀候間明廿六日四時可被罷出旨、多門殿依御差

図申達候、以上、

七月廿五日　　嶋津要人

新納次郎四郎殿

右ニ付例之通御請書為差出候、左候而翌廿六日四時拙者同道罷出候而御届申出候処、月番御用人右之要人殿より御目付山口彦五郎席詰ニ而左之通被仰付候事、

一　内蔵嫡子
新納次郎四郎

右定火消嶋津杢江被仰付置候得共被成御免、代被仰付候、左候而火之見相立候儀は勝手次第可被致候、尤杢江被召付置候人数之儀は直ニ被召付候、此旨可申渡候、

七月　　多門

右ニ付、多門殿并要人殿江口上書を以次郎四郎御礼廻いたし候事、尤諸事手当事当日より致心配候事、

一八月朔日、御規式ニ付、毎之通罷出候而御祝儀申上候手筈ニ而、進上物等も差上置候得共、前日より風邪気到来、当朝弥増相成、無是非当病之御届大番頭座并奏者方江申出候事、

一八月廿二日、於客屋御吟味は御覧被遊候ニ付、五ツ時より出席、御勘定奉行ニ而相詰候、上様四ツ時被為　入、御吟味は五組相済八ツ過御立有之候ニ付、詰御役々追々退散也、

口上覚

私親類新納勇之助事、当年拾壱歳罷成申候間、御序を以元服被仰付被下度奉願候、勇之介家之儀は、御折六合・御樽三荷・御太刀銀・馬代進上仕来申候間、先格之通被仰付被下度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

亥八月廿七日　　新納内蔵

口上覚

願名

四郎

右は私親類新納勇之介事、此節別紙を以元服之願申上候、依之御差支無御座候ハヽ、右之通名替被仰付被下

度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

亥八月廿七日　　新納内蔵

右弐通杉原堅紙相認、勇之介殿用頼新納源四郎より大身分触役所江差出置候事、

一九月八日、七ツ後より朝稲三益案内ニ而御小納戸山田壮右衛門事、拙宅所持之御文書等拝見ニ被参候、左候而緩々咄等有之夜入五ツ半比被帰候、右通御文書見之事は此内御内々山田江御沙汰之趣被為　在候ニ付而、右之通有之候事、

嘉永四年亥九月十三日

一一筆致啓上候、弥御安康可被成候、御勤務珍重奉存候、拙家無異罷在候、乍慮外御安意可給候、然は御出立前分而御心配被成置候大本家御詔訴(訴訟カ)之一条、其後機会不取失様仁兵衛・喜右衛門なと折角申談方ニ御内意追訴等申込置候得共、一向程合不相知候、折柄七月末当冬中元服、　御目見等は八月中ニ願出候様通達致承知、弥心せき立候付、尚亦右之趣を以末川家其外へも直談御内意等申込候処、八月末ニ成候得は願書等は差出候取計不致、此御詔訴はいつれ無拠願意ニ付、近江殿御胸中茂有之候付、粗致承知、はや安心之方罷成別而難在(有)奉存候、仁兵衛・喜右衛門なとへハ即相洩し当此上分限之処肝煎呉候様頼合候次第御座候、左候而願書は八月末差出置候、其後尚亦方々致手筈候処、豊後殿江御相談相成書役も染川喜三受取候哉ニ承伝、其節相成候処御内用方取扱之様被相伺、末川家・上村十方ハ離候様相察ちと及心配候、然共前以より之風并宜(評カ)敷やり掛居候間、格別相替儀茂無之筈と猶亦追々合掌致祈願候処、去ル六日種子嶋加次右衛門より主税江御用ニ而別紙御書付之通被仰付、即御金茂御渡被下八ツ後拙宅江主税持参ニ而致御知、別而難在次第目を覚し恐入大慶仕候、可為御慶と御吹聴如是御座候、左候而御金相受取之書付差出置候様嘉次殿より被申聞候由候間、拙者并主税連名ニ而致印形差出候、猶右之成行ニ付、黒木・末川家并染川・上村兄(ママ)榊原新蔵分而致世話呉候由

仁兵衛より承候間都而両種ッ、念入差遣候、且亦黒木源右衛門を以仁兵衛より豐前家江内意も為申込由ニ付是江も肴一折為挨拶差遣し、先首尾合相済せ置申候、

一元服願書は八月廿七日大身分触役所江差出候、此節名替之儀願出候付、勇之介殿江申聞候処、四郎と改名致度、当人より承知之通願書差出候、其外之服一巻手当之儀はいまた何も手を(当脱カ)不申、然共何茂心組はいたし居候付、追々成行茂可申越候、

但元服等ニ付第一之役は喜右衛門事、先月末上弓之事　御覧ニは平田家ニ付何簾世話事之由、然処重久圓一儀も致到来、又引続平佐茂苦々敷仕合ニ而一向世話之由ニ付何も面談不相叶候、然共近日中用伺相片付可申候間、其後は大本家修補等を初、何茂引請被呉候様申談含ニ御座候、

一先月中旬比新納休右衛門より承候は今和泉家公子御趣意休右衛門相含、同人存慮を以拙者江内々致咄合候様御沙汰之由、別而難在御意御座候、子細は安藝殿茂和泉家御相続、当分御家督折角之事ニ就而彼是及御勘考候処、七人島津と申面々いつれも繁昌之事なから、独り新納家のミ当分別而之衰微何共気之毒被　思召候、右ニ付而は此家も追々守立候様御力を被添、御世話被成下候儀も御奉公之一筋ニ而候間御勘考被成候処、御元祖之訳も有之事候得共、只今無束も御手差も難被成、夫ニ付又御工夫起り候ハ、公子御末女十ヲ位之御方被為居候由、其御方を我々より御貰申、勇之介殿江縁約いたし候ハ、、其一筋を以追々何簾ニ付ケそろ〳〵御世話被成下候ハ、、追々相応之家風ニも相成可申候、然共此一条右之御末子御配付之所より起候儀は汲受候而は別而御迷惑之事ニ候、其段は休右衛門より分而委敷申述候様、全新納家衰微之毒被思召、何卒守立之趣法御立被下候所より御工夫起り候儀を呉々分而申述候様御沙汰之由、右次第ニ付直付拙者共江可及御沙汰候事ニ而も無之、休右衛門存付を以咄合候様御沙汰有之候段得と致承知候、於拙者は別而大慶開運之萌と喜悦仕候、然共休右衛門江相答候趣は別而深き思召難在奉承知至極喜入候、乍然末家も余多罷在、殊更

貴所なと第一之御方ニ候処、案内之者旅行之事ニ付早速致掛合、其外当地之面々江は追々致相談得と一決之儀可申上、定而無異儀難在かり可申儀ニ奉存候段、先日当座之御受申上置候、左候而其後拙者今和泉家之近習迄差越当座之挨拶迄申置候、右ニ付而は貴所芳慮如何御座候哉、得と御勘考被成何分御服臓之程屹と御返答致承知度、此段御掛合申越候、爰元ニ而いまた主税なとへも不申談候、急キ静成事故、時宜見合罷在候、近之中可致相談候、仁兵衛壱人ハ先日序有之、咄置申候、是は拙者同意喜悦之事ニ御座候、勿論今和泉も不続事候間、前文之通たとへ相談相決縁約相成候、迚も株立之御合力等は相調間敷候得共、左様有之候得は、御世話茂被成安キ事故右之御考起り候、此等之趣茂前広得と申述置候様細々深キ思召之致承知候事ニ御座候

一此節諸流　御覧ニ付、加藤家茂来ル十七日御覧之筈御座候、右ニ付勇之助殿位年輩之者ハ不罷出筋郷中々々ニ而取しらへ相成候由、然共市田家は何卒被出候様有之候得共、家格之衆仕合之儀加藤家江相達候付及吟味候処、諸士一統之儀ニ候得は難取窮候得共、家格之衆外ニ茂無之候間、随分市田家は被罷出可然相決候由、右ニ付而は勇殿も同断之事ニ付、被罷出候方可然と内々承候付、何卒其通取計もらひ度郷中江相頼候処其通相決申候、尤別紙之通御心付筋も有之、旁相考候処被罷出候事可然と存候間、右之通相決衣服之儀も致手筈置候、右は喜右衛門なとより追々成行申越候様頼置候間、可被成候得共如斯御座候、就中今和泉之一条は拙者致承知候儀ニ御座候故、分而御掛合申進候、旁得と御勘考何分被仰越度候、書外重而可得御意、恐々謹言、

嘉永四年亥　　新納内蔵

九月十三日認

新納四郎右衛門様

書添申進候、元服之一条末年輩も不過候故、拙者少し緩急之心持御座候処、立冬打寄之節、貴様御発意ニ而打立候処、右之仕合無滞

元服茂相済可申、殊更　御家督涯初手之御加冠一入吉兆難在奉存候、畢竟貴様御覧慮之故と分而大慶いたし

候、此上は当分之居屋敷之事分別所と存候、何分追々
御心寄御申越可給候、
（貼紙）「以上原書欠く」

一九月十六日、御代替ニ付而は犬追物御覧被遊候付、大
番頭以下御役々茂拝見被仰付候付、拙者も五ツ前より
演武館江罷出候、
上様四ツ打切比被為入候、
八ツ半比首尾能相済候、今日悴次郎四郎茂犬追物相勤
候、尤今日之次第三手之犬并輪之犬御覧有之、村森亘
・大脇源五兵衛弐人落馬有之、然共怪我は無之候事、
右ニ付十一月十五日悴次郎四郎事、此節犬追物相勤
候付太平布壱疋拝領被仰付候、尤同様相勤候面々一
統江被下候由、左候而嶋津下總殿事は
御名代役被相勤候ニ付、御時服二ツ（御のしめ）（御服沙物）拝領被仰
付候由、且亦川上十郎左衛門江は紗綾二巻拝領之由、
其外次郎四郎同様太平布之由也、
但下總殿祖父焦風殿事、若年之砌被相勤候儀有之、
其節茂右之通拝領被仰付候由此節及承候事、

嘉永四年辛亥二月

今公襲封五月如就国、九月十六日観犬追物、越十一月十
五日　国老久寳召与犬追物者於敷舞台、掌務宮之原君
通哲伝
命、褒賞太平布毎人各一匹、新納君久脩亦在其例既而
君謂此雖常例然苟躬非遭逢、斯時則不得与斯事也、既
遭逢斯時事有、
君命以拝
褒賜豈不為栄哉、因欲請余記之以示、後来全乃録所聞
賦詩一章以述其意云、
金鞍珠勒駕騏㚟
白羽雕弓奔狗仆
旧典儀成眷顧深
恩栄斉賜太平布

山田有裕拝識

一九月十七日、細雨、今日加藤權兵衛流儀於演武館
御覧有之候ニ付、拙者も六ツ過より罷出致差引等候、
一統は未明より罷出居候、
上様四ツ打切比被為
入、七ツ過都而相済首尾能候、尤今日御入御立共
御成門涯江師家、差次島津下總殿被罷出候、其次拙者
罷出奉拝候、今日加藤家一流ニ而候、初腰之廻、引次
柔術・引次居相・引次剱術・引次鎧組打ニ而相済候、
尤例之通被下物并出精之御褒詞等被仰聞候事、

一九月十八日、又々犬追物有之候、今日は松壽院殿（島津宣興女子）御願
ニ而大奥女中等迄拝見被仰付候付而也、尤次郎四郎ニ
も相勤候、何茂
御覧之節之通有之候由也、

彌太右衛門時升遺之状

一当家所持之道服・陣扇并御文書等之品々朝稻三益・渡
瀬幽察なと致一覧度兼而承居候間、何時ニ而茂不差支
旨申答置候処、当七月七日七ツ後より参り致一覧度前
以案内有之候ニ付、何茂不差支段返答いたし置候処、
当日右両人并山之城坦道其外右之悴なと両三人召列早
々都而一覧有之候、左候而同十日比病用ニ付三益相招
候処、其節被申聞候は先夜泊番之折（三益ハ奥医師且当御下国後御上被仰付候由）
御都合有之、右之品々一覧之事共御咄申上候処、夫は
珍敷物ニ可有之、就中幽齊点之和歌なと珍敷候、当分
何様之仕抹ニ而候哉と御沙汰ニ付、見聞之通申上候得
は、差支なく候ハ、御覧被遊、其内忠元伝記類漢文ニ
而茂和文ニ而茂またハ紀行ともは有之間敷哉、当分水
戸侯ニ而何々拾遺と欽申書御編撰相成、高名之人物等
御取しらへ之由ニ付其方江被遣候伝記とも有之候ハ、
猶又、武功も相顕可申との御沙汰有之候、何様之事候
哉と承候ニ付　上様御覧共有之候得は別而難有次第ニ
候処、誠御遠慮成御沙汰共恐入次第奉承知候、冥加至
極之事ニ付何品ニ而も奉備　御覧度、折能伊地知小十（季安）
郎八ツ退出より被参居（是ハ大口木之氏村拝領山一件ニ付段々難渋筋到来、森川利右衛門・種子嶋加次右衛門等江御内意、右伊地知氏を以申込候儀共有之相談之処也、）三益は七ツ後入来、幸之仕合
ニ而供々及評議候得共、御存知通右之水戸侯編撰ニ応

し候記録等は無之、乍去文禄年中上洛日記并霊社建立之記二冊（壱冊は季安撰　壱冊は貴方之撰）并道服・陣扇之記（季安撰）同跋（貴方撰）并肌着之記（貴方撰）偃月刀之記（季安撰）并霊社御取立前之勲功記且文書集なと取出し暫時及吟味候処、此節は先つ文禄中上洛日記并幽齊点詠歌并連歌且忠元代文書（京勢餉詰まり　并関ヶ原御帰陣之左右有之候かな文等）一巻并貴所御家蔵忠増朝鮮日記差上候ハ、可宜と相決置候、

〔注記〕「忠増日記ハ写ニ而此内疾々少々ハ御覧為被遊候との御咄も先夜三益致承知候由、然共厚本故差出可申上及吟味候事也、」

右次第ニ付忠増日記并勲功記御持参可被成旨早々御宅迄も致掛合候処、即晩次郎九郎殿御持参ニ付預り置候、然共同十三日三益泊番ニ付持参可致とて早朝受取ニ被参候間、尚亦御趣意ニ応し見合持参いたし給候様早々差出候処、右窮置候通幽齊点詠歌一巻・同連歌一巻・忠元代文書一巻・同人上洛日記一冊・忠増日記一冊外ニ大唐流日取之書、

〔注記〕「末ニ天正十七年曾木之瀧におひて雨乞有之候趣、忠元筆にて書記し有之候書也、」

一冊ヶ様之書茂向々依而は御写させ相成候ニ付、可宜とて右之通取揃其外は追々御沙汰茂可有之ニ付、時宜次第可致との事ニ付右六品相渡候、左候而翌十四日八ツ後同人入来、右品々昨日大鐘時分持参候処折節御膳上り候得共、直ニ御膳も御差入希（マヽ）被遊先ツ少々は右品々

御覧有之、夫より御膳御仕廻被遊、其後又　御覧ニ御取付御机をと御沙汰有之差上候得は、御机之上ニ而一品々々得と　御覧被遊候、忠増之日記も其夜都而御読被遊委敷御覧有之候、就中幽齊点三拾首之詠歌は世ニ珍敷物との御意ニ而暫御側江可被召置段御沙汰ニ而被留置、其外ハ都而即御下ヶ被遊候、右通　御覧之砌一品ツ、三益より差上候内、大唐流と申日取は何様之物ニ御座候哉と申上候得は、夫は兵家之書ニ而茂可有之とて差而　御沙汰茂無之候間、先つ不差上扣置候由被申聞候、左候而右品々御覧之由余程始抹も届居候、就中忠元文書之巻　御覧之節、此状共能茂是程集候と御咄等有之、殊ニ巻末之余紙御気を付られ、是ハ定而追

々相見得候ハヽ張添可致含ニ見得候なと御賞美之御意ニ而、何茂委敷御覧被為在候由奉承知難有次第、誠ニ以霊社之勲功は無申迄茂拙者ニおひても冥加之至奉存候、且又、外之御代々様御文書茂御覧可被遊御沙汰有之候段被申聞候ニ付、是以難有次第ニ付いつニ而も差上可申段相答候処、十七日方泊番ニ付其節持参可致被申置候事、

一同十七日、弥泊番之由ニ付、早朝磯永孫四郎江才領相頼、三益方迄差出置候品々、左之通、

一近衛家御書　壱巻
一龍伯公（島津義久）御感状　壱巻
一同公　御書　壱巻
一惟新公（島津義弘）御書　壱巻
一久保公御書　壱巻
一家久公御書　壱巻
一太閤御朱印　壱巻
一陣扇子　壱本
一諸大名文書　壱巻
外ニ忠清代文書　壱巻

右之通為持遣置候処、翌十八日八ツ後三益入道入来右之品々返納ニ而被申聞候趣は、昨十七日大鐘時分出勤ニ付、近衛家御書其外御代々様御書箱入付之儘并諸大名文書相添致持参候得共、其時分至極之大雨ニ而（此日昼より雨ニ而稀成大降なり）中途雨濡之念遣有之候、御朱印并陣扇・忠清代文書之三品は無是非宅江残し置出勤之上御都合相伺、御座末迄入付之箱并外包更沙風呂敷此方より包合差遣候形りニ而持出候処、直ニ其儘是江と御沙汰被為在、右風呂敷包なから御膝元江致持参候得は、則御手自風呂敷は勿論一巻々々御披被遊御覧有之、初一巻御覧済御前江詰居候医師江其方なと（上原玄興・戸塚清甫、勿論三益之由也）拝見（御言葉実ニ洋見と有之候由）いたさぬかと御沙汰ニ而御渡被遊候処、御前近クニ而拝見いたし巻き納め候節、巻ことに服沙相添夫々蒔蝶（牒カ）も有之事候、取違間敷そと御下知共有之、中々毛頭も御油断無之御事之由、左候而一巻々々初より終まて委敷御覧被遊重々始抹行届居候段御賞美ニ而御

機嫌能被遊御覧、
惟新公慶長四年極月之御雑談共は、至極面白ひと御沙汰共有之、至極之御都合ニ而又茂
御覧可被遊　御意共有之候ニ付、三益よりも当内藏事ヶ様之儀は兼而数寄好候者ニ御座候なと申上候処、最早年輩何程ニ候哉なと御咄共有之、段々難有形行之趣三益より致承知倩相考候処、抑　霊社之武功は致信仰居候処先般霊社御建立、其後彼所御立場相成、又年頭着座等之儀も被仰付重畳之事ニ而拙者代冥加至極誠ニ以難有奉存、家宝之品々修覆も加へ置候処、此節不計茂右之仕合ニ而積年之素意相顕、右等
御賞美之趣共承知仕、銘肺肝恐入罷在次第御座候、右ニ付而は御方之家蔵日記迄も御机上ニ而御覧有之、中ニ茂三十首之幽齊点詠歌は御側江被留置御写させ迄相成、八月十六日比三益御伺ひニ罷出候節、御机上江有之候を御手自ら三益江御渡被相下候、十八日比同人持参ニ而返納有之候、左候而此日三益より承候は、此節御供ニ而罷下候山田壯右衛門本之名記、当時御小納戸役定府なり　拙家所持之右品々一覧いたし度、実ハ　御内沙汰有之候由被申聞候間少茂不差支候、いつにても可被参旨致返答置候、御朱印并陣扇等は追々御都合次第可致持参含之由三益より承居候、
一先度より右之通段々
御覧被遊候内御文書等ハ格別、其余は三十首茂幽齊之点は有之候得共、基忠元懸詠又は文書も同人手紙弐は日帳なとにて麁相之品々ニ候得共
御覧被為在、難有仕合恐入儀ニ付、三益所迄拙者改服ニ而差越御礼申上置候、其上は同人見計宜敷取成給候様頼置候処、御都合有之候ニ付御覧被成下別而内藏難有かり奉存候段程能申上置候旨是亦後日被申聞候、
一九月八日、山田壯右衛門三益同道ニ而七ツ後より被参候ニ付、家蔵之品々重立候物は都而差出候処、何茂一覧有之、乍然誠ニ一通り之見様ニ而熟覧不相済候付、何卒又々参得と見申度旨被申候付、是亦少も不差支候間、何ヶ度ニ而も被参候様相達置候、尤初而面会之方

ニ付肴一折被送、改服ニ而入来候付、品々一覧之後吸物一通・取肴一二種位ニ而酒差出し茶漬飯共振廻候、左候而夜入四ツ前被罷立候、然処翌々日江戸土産迚錦絵百枚并御試残り之珍敷菓子共小重ニ入付手紙相添為礼被差送候事、

一壮右衛門一覧之節茂品々之内未御覧無之物追々御覧ニ入度様子ニ候、勿論三益も霊社建立之記其外道服之記類茂

御覧ニ入度含之由候得共、何分御家督涯ニ而御式向は無申迄茂御用筋御繁雑之御模様ニ付、右等之端事は御都合見合扣居候由ニ致恐察事ニ御座候、

右旁先是迄之形行御座候、勿論時々霊社江茂奉告、家内一統難有喜悦仕次第御座候、

御覧ニ付而は文化三年寅五月十七日御家老其外重役大奥御休息所江緩々被為召、父君茂御家老之時ニ而右人数之内ニ而候処、御側役野村與藤太より先祖武蔵勲功之記録有之内、

若殿様（当宰相君御事なり）被聞召上御覧可被遊候間差出候様致承知候付、成程親代（久儔事也）大略取仕立置候へ共亀株之書物ニ付、仕立置直し可差上哉、且亦、

御先祖様より武蔵江被下置候御文書写置候書物御座候是ニ而は如何可有之哉と相伺候処二通共可差出候、若又相損居候ハ、彼方ニ而書写し差上候而も可致旨承候付、同十九日勲功記（久儔撰）并御文書写（御代々様并近衛家并御朱印等当家所持品迄之写本）

野村與藤太迄差上候由書留御座候、然は当家之文書等御代々様御覧之事ニ而重畳難有、乍然其節迄ハいまた紛得不申儀多々有之、品数茂少分ニ候得共此節は貴所（伊地知季安）并季安なと之第一骨折ニ而致探索、由緒勲功も明白相成居候折柄、殊更家宝之品々現物御覧被為在、拙者之大幸紙上弁舌ニは難尽、且は喜ひ且は恐れ難有次第奉存候、於貴所も可為御同慶と存候、尚此後之形行は追々申越候様可候致、以上、

〔朱書〕「嘉永四年」

九月廿一日認　　内蔵

彌太右衛門老丈

一十一月朔日、嶋津靱負殿寺社奉行江頴娃織部殿御勘定奉行江御役替被仰付候、尤靱負殿は去年より寺社奉行方江差寄勤ニ而候、今日迄も寄役ニ而候事、

一十二月朔日、月番御用人末川久馬より御用之儀候間、今日四時可罷出旨昨日切封を以致承知候ニ付罷出候処嫡家勇之介殿元服来ル十九日被仰付候段被仰渡候、

一十二月十九日、細雨昼より晴ル、今日嫡家勇之介殿元服ニ付六過より出殿、四ツ時御書院江御出座首尾能相済、末家中一統致安心候、右ニ付御殿済より宅江差越追々祝事相勤、末家中多人数打寄り目出度祝ひ相催し候事、

一十二月廿五日、表御用人小笠原轍取次を以、左之通致承知候、

御用之儀候間、明後廿七日四時可被罷出旨、豐後殿依御差図申達候、以上、

十二月廿五日　小笠原　轍

新納内藏殿

〃

御用之儀候間、明後廿七日四時可罷出旨豐後殿依御差図被仰渡趣承知仕奉畏候、以上、

十二月廿五日　新納内藏

小笠原轍殿

〃

一右ニ付廿七日四時罷出候処、於敷舞台小笠原轍取次を以左之通、

紗綾二巻

寺社奉行勤之内

新納内藏

右は徳豐殿御造立ニ付御用掛被仰付候処、出精相勤候ニ付右之通拝領被仰付候、

右御格之通可申渡候、

十二月廿七日　豐後

右之通拝領被仰付候ニ付、南林寺江参詣致拝礼、豐後

殿并小笠原轍江致御礼廻候事、

右寺社奉行勤之内掛被仰付置、相勤居候処、御勘定奉行江転役被仰付、跡掛り嶋津藏人殿江被仰付、先比御成就相成候ニ付右之通被仰付、尤藏人殿并寺社方取次書役并御作事方御細工所役々等都而拝領物被仰付候由

一十二月廿七日、吉辰ニ付出勤、掛嶋津藏人殿江参り彼之御本家安藝殿御末女嫡家之四郎殿江往々縁与として御もらひ受申上候儀は相叶申間敷哉、勿論家風旁不似合儀ニ候得共、前以より安藝殿御内慮之趣別而難有御趣意致承知居候付、右之通藏人殿江差越表通申込、藏人殿より安藝殿江申伺可被下旨申入候処、今日早速申込何分之儀返答可致旨致承知候ニ付、直ニ罷立候事、

一同廿九日、嶋津藏人殿拙者宅江八ツ後被参候而右之一条安藝殿江申入置候処、いまた幼少何も不相分候へとも望ニ任せ可被遣旨返答可申入様承知いたし候旨其通致納得候様承り、拙者ニ至り別而難有奉存候段御礼申置候、左候而藏人殿は一刻ニ而被罷立候、右ニ付即刻拙者今和泉之近習番所迄為御礼見廻置候、左候而四郎殿江参り首尾申置、藏人殿江茂玄喚迄見廻置、致帰宅候事、

「朱書」「本文之儀ニ付四郎殿事、兎角身弱ニ有之往々家格之御奉公六ケ敷及吟味候節、新納休右衛門中入ニ而本文之趣双方共流々いたし置候而堅く申談之被置候事、」

〔表紙〕

新納久仰雑譜

嘉永五年子正月ヨリ
六年丑三月八日迄

「久仰譜巻五之下
嘉永五年子正月ヨリ
六年丑三月八日迄」

嘉永五年子正月より

〔貼紙〕
「年賀

年頭ニ付　宰相様云々迄」

一正月元日、晴少々曇気
今朝五半時御供揃ニ而、御桜門より御出、五社御参詣被遊候、
但此時御兵具所蔵御造替ニ付、御桜門より東之方御通路差支ニ付下馬通より新橋、夫より北郷惣次郎前通御通行之由、
御帰殿後御一門方并三役中御祝儀等毎之通被為　請候由、
一右御参詣ニ付火消手両人被差出、新橋江悴次郎四郎、戸柱橋江北郷惣次郎出張被仰付候由、右次郎四郎出張ニ付而は五時出宅、行列相立候処、家来下男迄五拾余人手当ニ及候、九ッ時分御帰殿後引取候、初而之出張吉事ニ而、難有奉存候事、

一同三日、今朝五ッ過御殿江罷出候、四ッ打切時分御対面所江
御出座、毎之通一所持等持参太刀、引次都之城部屋栖出雲殿持参太刀ニ而御土器頂戴、其次川上式部并拙者・山田轉三人持参太刀一列着座、御家老末川近江殿御祝儀申上マスと御取合、目出タフとの御意、又御意之

御礼申上マスと御取合有之、
御前江御土器三方御年男より上ル、我々江御引渡表御小姓配膳ニ而被成下、直ニ式部より順々
御土器頂戴相済、御三方等下ル、我々江被下候、御引渡相下り候節、御家老御同人より御礼申上マスとの御取合有之、其節三人一所ニ御礼ニ而相下り候事、
一年頭ニ付　宰相様御方等江之御祝儀謁ニ而申上候儀は例之通有之候、左候而拙者御勘定奉行勤ニ付而之御勝手方謁、近江殿被為逢(達カ)候事、

御小納戸
新納内蔵殿
〆

一正月十三日、御小納戸より左之通、
御自分事　明十四日
〔朱書〕「本文料紙大奉書半切」
御前誓紙被
仰付候間、四時麻袴着用ニ而可被罷出候、此段申達候、
以上、
正月十三日
追而御清書ニ実名相記可被差出候、以上、

明十四日
御前誓詞被　仰付候ニ付四時可罷出旨、御切紙之趣承知仕奉畏候、以上、
〔朱書〕「本文料紙杉原半切」
正月十三日
追而実名相記御請申上候様承知仕、別紙之通御座候、
以上、

御小納戸中様
新納内蔵
〆
〔朱書〕「切封之
別紙小札」
新納内蔵
久仰

右ニ付十四日四時罷出、御小納戸伊木半七郎江届申出置扣居候、且今日大番頭町田監物事も同様被仰付候由候得共、病気ニ而御断、寺社奉行嶋津藏人・御勘定奉行御側御用人御趣法方掛平田直之進・御用人郷田仲兵衛・御納戸奉行大野清右衛門・御使番向井新助・御広敷御用人猿渡加左衛門・御右筆頭吉井源七郎都合八人誓詞被仰付候、九ツ時分龍之間江罷通書判共相認、無程御座之間末壱畳目江壱人ツヽ罷出、前書拝聞、引次向井新助相除外七人一列罷出神文拝聞、引次壱人ツヽ同弐畳目ニ罷出血判いたし候、尤御家老近江殿御詰御側御用人伊木七郎右衛門・御側役山口直記・御小納戸橋口今彦并川上郷兵衛・御側目付之場藥丸猪右衛門・御右筆頭吉井源七郎席詰也、尤前書は御右筆相良正之助続之御小納戸郷兵衛取廻被致候、

但新助儀は神文相替候ニ付、壱人別段於聞有之候事、右誓紙は御代替ニ付而改誓詞并当御役々誓詞ニ而候、然共前書其外何茂同様之事故　御代替ニ付而改誓詞之儀は前書迄於聞ニ而、血判茂一通ニ而相済候事、

右誓紙大目付以上ニ而候得は御出座被遊候御事之由承候也、左候へ共御座之間之故ニ而候哉、脇差は相迦し候事、

一正月廿六日、今暁八ツ時分柳家御伯母様御死去ニ而忌中、尤今晩興国寺江御葬送有之候事、御法名

祥月院殿春窻妙庭大姉

御自分事忌中ニ而候得共、御用差支候ニ付忌被成御免候条、明日より可被致出勤旨御差図ニ而候、以上、

正月晦日　　二階堂源太夫

新納内藏殿

〆

私事、忌中ニ而候得共、御用差支候ニ付忌被成御免候条、明日より可致出勤旨被仰渡候趣承知仕奉畏候、以上、

正月晦日　　新納内藏

二階堂源太夫様

〆

御請書料紙杉原半切

右ニ付翌二月朔日より出勤、尤御殿江罷出、御勝手方御用人二階堂源太夫江相付御礼御届申出置候事、

右伯母様御死去忌中ニ付、二月三日霊社之御祭式は差延、三月三日ニ相調候事、

〔朱書〕「嘉永五年子二月十七日」

一任便宜一筆致啓上候、愈無御障珍重存候、爰元年内より例外寒気強、閏月丈欤今以去兼、梅なと咲出し遅く、いつれ天然たるへく、貴地如何候哉、南海津嶋ニ而暖気ニ候半、拙宅何れ茂無事罷在、就中極老母至而元気仕合之至存候、御宿元も至極御無事ニ而次郎四郎殿折角差繰之由、夫故兎哉角御取続之由候間、決而御懸念被成間敷存候、

一拙者儀随分元気ニ而折角精勤之心得ニ罷在候、最早御改正之一件も相済候程ニ而静ニ罷成候間、去秋比より御勘定所格護之古書付、又は古帳なと引出し、折角致披見候、慶長年間琉球諸嶋御検地帳・其外寛永以来之諸引付・日記類も色々有之、或寛永十三年以来之鹿兒島屋敷帳尤絵図も有之、扨々当務之御蔭を以拙家居住屋敷転宅之次第なと細々探得、誠に以当務ならてハ難調事ニ而、不容易難有奉存候、且又貴家御先祖左京君以来之御住所も相分り、是以御喜悦御座候半と存、則少々ツ、致抜書置候処、次郎九郎殿御出被成、直ニ御渡申候間定而細々申越し御座候半と其段は致省略候、拙者儀も今少し品能可被召仕なと段々申人も有之、難有趣意なから当分世上ニ而は愚昧之者左様之儀難相整実ニ恐入罷在候、当務々々心之及精勤之心得一篇ニ御座候、追々

尊慮之趣既ニ此節之常平倉御書取迄御拝見可被成深々奉恐入候、難有次第難尽紙上候、遠海相隔候而ハ朝夕始終之御前説等は不通筈候得共、只々一二を以十百御推察可被成、私式之愚鈍も日々食事を甘く気分勇ミ立罷在候、細々申越度候得共中々難尽筆、是迄炉辺閨中ニ居眠り栄花を楽罷在候人民、重くも軽くも胸中打替り候半哉と存候、何も御遠察可被成候、

一大口拝領之山一件、随分程能可罷成模様御座候、森川・種子嶋之両士今以落着無之、ちと込り入罷在候儀も御座候、近隣平田は此内より中下り之所、去ル十三日出立帰務被致、此節は岩元下りニ茂可相成と、友野は今暫詰可被申候半、直之進話も有之、乍末勧農方其外段々ちん〳〵と古ニ帰候哉ニ茶話承候、近比ハ森印被召出、色々長々御沙汰之趣共有之候処、赤面屈身之体ニ候由なとゝ申人もあり、実否更ニ不弁候事、

一高輪御引移り弥以被為済御祝儀迄有之、江戸表余程御取込之様ニ承事ニ御座候、乍然当春ハ　御発駕御差延之段誠ニ以難有次第万民奉喜候、当正月三日御規式ニ私儀も例之通罷出、持参太刀ニ而着座、御家老衆より御次第通御取合有之候処、目出度フとの　御意ハキと奉承知、扨々難有奉存候、是等を以さへ胸慄然と罷成候、其以後当家文書等御覧之事は何も無之候、山田壮右衛門ハ間々互ニ尋等もいたし、何そ都合向不相替模様御座候、

一返々茂拙者儀は当務被仰付候節、如貴命当分之方却而可然と致承知候儀肝肺ニ銘し罷在候、段々御国政沙汰難有致学問、次ニは拙家并ニ同家中由緒等数多探り得不容易次第、乍重言茂当務ならてハ出来候丈ニ無之、第一忠清君御使役等被命候節之御引付、其外九代目忠秀君同断御引付等探り得候儀致大慶候、尤格護品数多ニ而候、詰席迄ニ而は中々難調、内々持帰り、只今昼夜取しらへ申候、実ニ転役等被仰付而は難相叶儀と当分之方を喜ひ致精勤居候、

一拙家并貴家ニも有之中尾梅之記、近所山田十助江相頼、当分折角吟味中御座候、十介も教授被仰付目出度存候、無程成就可致候ニ付、其節は早々写差遣可申候、御待居可被成候、右之外段々申越度儀海山御座候得共、兎角難及筆何も御推量可被成候、只々貴所之御事は昼夜案し続ケ罷在候、実ニ御寿を被保候儀計存候、外ニ申事ハ無御座候、是のミを申越度、前文荒増如是御座候、恐々謹言、

〔朱書〕「嘉永五年子」

二月十七日　　久仰

伯剛老

尚々、古事探得候儀ニおひてハ、小十郎(伊地知季安)なと至而喜ひ御座候、折々進め被申、返々も申越度儀は海山ニ御座候得共不及筆候、

一大口飛諏訪社、去々十二月押詰、本社宗廟之御供所より出火、本社并飛諏訪迄及焼失ニ依而此節ハ致吟味御圖等申受、木之氏村江引移し、当分造立方取付居候、

一今十七日春屋之正御忌日故、今朝霊膳相備拝礼等いたし、来年ハ弐百回被為当候、仏事取行可申存候、

一三月十九日、悴次郎四郎事、豐後殿より月番御用人嶋津要人取次を以、御用之儀候間今四時可罷出旨昨日被仰渡、今日罷出候処、於敷舞台右要人取次ニ而、学問出精心掛宜敷候旨被聞召上、為御褒美太平布壱疋拝領被仰付候旨被仰渡、難有次第奉存候、右ニ付豐後殿江拙者も為御礼玄喚(関)迄見廻置候事、

右御褒美之人数、当番頭肝付左門殿・諏方數馬殿・桂太郎兵衛殿・嶋津健殿・詰衆川上源十郎殿・無役大身分嶋津郷十郎并悴次郎四郎ニ而候由、尤小番御小姓与之内拾人余有之、御書面之段々相替り居、御品々も寄合以上ハ太平布、以下ハ芭蕉布之由也、

太平布　壱疋　　新納次郎四郎

右は学文心掛致出精候段被聞召上候、依之為御褒美右之通拝領被　仰付候、

右御格之通可申渡候、

三月十九日　　豐後

嘉永五年壬子春三月二十日

公命褒賜太平布一匹於新納久脩君、嘉其平生篤志於学孜々不倦也、御城代島津君久寶奉其命、御用人島津君久貫伝其命、於敷舞台云、　久脩君自少好学、甫十一歳受句読於余、至今十余年、往々懐巻叩余弊廬、切問近思、無時而懈矣、宜哉名誉自著以受

恩賜也、実可謂志士之栄矣、余因告曰、夫学者忌間断又忌急迫、優柔厭飫肥以至氷釈理順也、君今二十有一歳、才学並進恭遜守礼、後来問学之功積而徳性之成、其唯在勉之也、

詩云、靡不有祈鮮克有終、君其可不思哉、

山田有裕拝識

奉新刻薩州大口平泉村愛宕尊像一体棟札

昔天正中我（島津義久）貫明公之拓境也、遷余九世祖伊地知備後守重廣入道喜甫、於薩州平泉地頭帥衆戍堡、備肥後疆而其居住永利軍陣、八年庚辰十月剏寺於茲名勝軍菴捐田供産、招僧殷甫為之開山、十一年癸未十一月彫刻愛宕木像、廿四日祠諸其堂、十三年乙酉十月殷甫造之厨子、廿三日奉而奠焉、十五年丁亥二月及子民部少輔重泰（后改重堅）鋳鰐口・鐘、廿四日懸于堂楣、爾後其孫民部少輔重政（后称杢右エ門）興葺復新、既而菴廃村隷大口、重政乃由山野歴羽月転地頭於加久藤、寛永十六年又祠之加久藤、自是此堂為闔村士民所尊奉焉、而迨曽孫主膳・重頼代父襲職於加久藤、聞旧堂浸敝圮于平泉、乃嘱生父新納加賀守忠清与其邑衆偕一新於慶安（二年）己丑之冬、而葺元禄又興明和、到于今祭祀弗絶、然近年為盗所奪一朝亡像、惟馬空存、前此余煩友人園田勘右衛門実吏既臨写之、於文化（十四年）丁丑五月以祠于家、於是男秀通（本名季直）之巡平泉也、告事於邑之士衆、抱木馬帰命仏匠都城人大堵良政、擬嚮所写以刻神像乗諸其馬若彩飾、亦倣所祠画威霊輝容頗陪旧相、而訖功乎嘉永（四年）辛亥仲冬廿四日、距昔刻歳実二百六十九年、而今告竣亦同其月日可謂奇遇矣、越明年壬（子カ）午正月嘱宮原景則還自府、下使以祀乎旧堂一如古例、当其時加州裔胤久仰君亦喜此挙見助余乏至若闔邑士人咸協然戮力、以資其費者百四十二人、伏祈

公室隆盛闔邑寧謐各門栄昌永錫庇休以至無窮云爾、

嘉永五年壬子四月十五日

開基九世孫伊地知秀安記

一銭弐貫四百文

伊地知小十郎季安
嫡子
伊地知喜十郎季通
嫡孫
伊地知小次郎季次
伊地知徳四郎季當

一銭弐貫三百五拾文

新納内藏久仰
嫡子
新納次郎四郎久脩

一銭三百文

郷士年寄
有村隼治正心
嫡子
有村安熊正次

一銭弐百文

与所書役
新納五郎右衛門實次

外之名前略ス、

嘉永五年四月廿五日
賦何路連歌

梅桜みとり添けり神の庭　久仰
花春の内外なく郭公　法阿
八重雲もしはしは夏の雨晴て　具阿
きのふまて見ぬ山奥かなり　廓珍
行〳〵も月澄渡る船ならし　愍遵
翅よハらす来る鴈の声　惠祐
冷ましく科戸の風の吹折に　太充
あたらしほるゝ花の萩原　徹道
野崖は露をも霜に結ひかへ　時敏
日のさすかたに神鳥小踊　昌意
山岨は人気稀なる朝朗　爲善
望めはたかきその甃　篤烈
涼しさは珠の外成黄昏に　貞休
契りし袖を松の声〳〵　正國

呉竹の夜〳〵に問ハぬは恨めしな　通昭
月に瞬く影のともし火　正歸
僧ありと見ゆるは露の古寺に　直方
閼伽汲はこふ霧のまに〳〵　篤行
浪風の荒きを凌く船の中　宥山
心筑紫の旅はものうし　村貞
度〳〵に花の都をおもひ出　久央
永き日をくる山の隠家　武雄
妻まとふ雉子の声を聞馴て　行熙
霞の衣春の野遊ひ　執筆

一飛諏訪御社木之氏村江四月中旬御創建致成就候ニ付、御遷宮之日限何比相整可然哉之旨、木之氏村役々共より申出ニ付、暦面見合、左之通日柄取しらへ致候、右之内ニ而都合宜敷節御正遷宮いたし候様、左候而社役并供物等之儀は大口社家頭取二之宮勘解由江致相談、御法通可相調旨申遣置候事、

嘉永五年壬子暦面

四月廿二日　壬寅　成
同月廿三日　癸卯　納
同　廿四日　甲辰　開
同　廿八日　戊申　満
同　廿九日　己酉　平
同　晦日　庚戌　定

右之通日取相しらへ申越置候処、四月廿八日無滞御遷宮相済候段届申出候事、

一飛諏方御仮殿宮牟禮關右衛門寄合いたし候、付而は小社なからも深切之志ニ付為謝礼、懸物寿老人画一幅筆者不知、図蜂須賀壽老人大幅ニ而候を表具相調、箱入付而差送り細々挨拶申入置候事、

嘉永五年子四月廿七日出勤いたし居候処、八ツ前御側御用人高田十郎右衛門より左之通致承知候、

御用之儀候間、明廿八日五ツ時可被罷出旨豊後殿依御差図申達候、以上、

四月廿七日　高田十郎右衛門

新納内藏殿

〆

御用之儀候間、明廿八日五時可罷出旨豐後殿依御差図被仰渡趣承知仕奉畏候、以上、

四月廿七日　　新納内藏

髙田十郎右衞門様

〆

一四月廿八日、五前出殿、御側御用人右之髙田十郎右衞門江御届申出、扣居候処、御供目付森川孫太夫より鹿之間江罷出候様相達候ニ付、付添罷通候処、右十郎右衞門引進ニ而、豐後殿、多門殿御列席、豐後殿より左之通被仰渡候、

御軍役方

惣頭取兼務　　新納内藏

〔朱書候〕「本文兼務之儀は大番頭又は御勘定奉行之間、難心得候ニ付、為念内々相伺候処、御勘定奉行兼務ニ被仰付候事之由、致承知候間、此段記置候事」

右当御役ニ而、右之通被仰付、御軍役方相図之御太鼓役を兼相勤、御軍役方江相詰候様被仰付候、左候而御軍役御手当向之儀、都而致差引、右江相拘候、御用向は向々申出候儀も何篇致吟味、時々可得差図候、且

御出馬御供、又は

御名代等被差出候節は、依時宜可被召付旨被仰付候、

四月　　豐後

右之通被仰渡候ニ付、御請申上相下り候、席詰御側役山口直記ニ而候、左候而則御軍役方江差越、川上式部殿当分御小姓与番頭ニ而、惣頭取兼務其外御太鼓役等同様被仰付置相勤被居候付、右江引合候処、則より相詰候様被申達候ニ付、式部殿上席江相詰候、

一右ニ付御近習江式部殿同伴ニ而罷通、御内証之御礼、御側役名越彦太夫江相付、申上候、

一表御用人月番之嶋津藤馬より、左之通被仰渡候、

新納内藏

川上式部

右は琉球逗留唐人方掛被仰付、壱人ッ、繰廻琉球江渡海被仰付候、

右可申渡候、

四月　　豐後

右之通於御用人座被仰渡候ニ付、御受申出置候、左候而式部事ハ直ニ当秋琉球江渡海被仰付候、

一今日物奉行田中源五左衞門事も当御役ニ而、御軍賦役勤被仰付候并御目付御裁許掛折田平八事、御供目付格江御役替、御軍賦役勤被仰付候、左候而御軍賦役松本十兵衞・安田助左衞門・右之田中源五左衞門三人江、拙者共同様、唐人方掛被仰付、壱人ッ、渡海同様被仰渡、則源五左衞門江当秋渡海被仰付候、且又御軍役方御家老座書役助田中治右衞門事も、当秋渡海被仰付候事右之通今日被仰付候付而は、御役替ニ而は無之故、誓詞願尤御礼願式明細書等之手数ニ不及候事、

一右ニ付八ッ退出より御礼廻之儀ハ、大目付以上并取次御側御用人高田十郎右衞門江、口上書を以相廻候事、

口上

上包美濃折掛

私事今日当御役ニ而、御軍役方惣頭取兼務被仰付、難有仕合奉存候、右為御礼参上仕候、

御用人は伺公仕候、

四月廿八日　　新納内蔵

一当分御軍役方江相拘候人数、

御軍役方　　嶋津周防殿

御名代　　嶋津兵庫殿

御軍役方　　嶋津豐後殿

副御名代

御軍役方　　末川近江殿

惣奉行

御軍役方　　御小姓組番頭

惣頭取兼務　川上式部

御軍役奉行

御側役御趣法掛兼務也　三原藤五郎

御軍賦役

御納戸奉行格ニ而　田中仁右衛門

御作事奉行

御裁許掛勤ニ而寄　松元十兵衛

高奉行ニ而　安田助左衛門

物奉行ニ而　田中源五左衛門

御供目附格ニ而　折田平八

御軍賦役一篇　伊地知小十郎

野元源五左衛門

中野織右衛門

当分大嶋へ渡海　税所七郎右衛門

御軍役方

御家老座書役

相良彌兵衛

岩元清藏

田中治右衛門

甲斐彌右衛門

田代孫九郎

永田直右衛門

野村金右衛門

右之人数ニ而候、左候而川上式部并田中仁右衛門以下都而毎勤之人数也、

一今日惣頭取兼務被仰付候儀は、此内より段々上様ニ茂思召之御訳被為在、至而人撰之御取扱哉ニ奉伺誠ニ以難有次第と奉存候、右ニ付近親中并兼而出入之面々、同家之衆なとへ申遣し、祝酒取はやし候事、

一大口より飛諏方社御遷宮之儀、左之通申遣候、

飛諏方社御遷宮、昨廿八日爰元祝部八人ニ而相勤候ニ付、私自参相勤、其外役目中は勿論、外ニも拾人余改

服ニ而御供仕、首尾能相済申被下候、此段御届申上候
左候而此涯
御直参又は御代参ニ而も御座候ハヽ此飛脚帰便より何
分被仰越被下候様奉頼候、爰許田地仕付御日限は来月
廿五日限ニ候間六月
御直参又は御代参ニ而も有之候ハヽ、至極仕合奉存候、
右は日延之願共申上候而、不都合之儀も難計御座候間
被仰談、御都合能御取しめ可被下候、以上、

子四月廿九日　　新納武兵衛

道嶋源五郎様

林　仲之丞様

一五月六日、月番御用人末川久馬より左之通被仰渡候、
御用之儀候間明七日四時可被罷出候、以上、

五月六日　　末川久馬

新納内藏殿

〆

御用之儀候間、明七日四時可罷出旨、被仰渡趣承知仕
奉畏候、以上、

五月六日　　新納内藏

末川久馬様

〆

右ニ付翌七日四時罷出、末川久馬江届申出扣居候処、
無程月番於御用人座御目付新納伊十郎席詰ニ而、左之
通久馬を以被仰渡候、

新納内藏

右大番頭一篇之勤被
仰付候、左候而御軍役方惣頭取兼務是迄之通ニ而、詰
席并勤向之儀は被仰付置候通、相心得候様被仰付候
右可申渡候、

五月　　豐後

右通被仰付候ニ付、則大番頭座江参致吹聴候、大番頭
町田監物殿出勤被致居候ニ付、直ニ同人同伴ニ而、
御近習江罷通、御側役名越彦太夫江相付、御内談之御
礼申上置候事、
右ニ付退出より豐後殿并取次御用人江致御礼廻候事、

但口上書毎之通故略ス、

一五月八日、御勘定所江罷出、昨日之趣届申出、御用筋都而引渡致退出候、左候而出勤大番頭座江一刻罷在、御軍役方江始終相詰、八ツ退出いたし候事、

一五月九日、番所江召仕置候佐多郷士村山市郎并譜代家来又木清兵衛同列ニ而、大口江代参として差越候、子細は大口飛諏方社去々十二月類焼ニ及ひ候ニ付、此内木之氏村江奉移、新造立いたし、先月廿八日吉辰ニ而正遷宮相済候ニ付代参、且今般拙者儀御軍役方兼務をも被仰付候ニ付、霊社様并木之氏村諏方社且泉徳寺江白銀二両ッ、致奉納、代参申付差越候、尤御遷宮之儀は木之氏村計申付置候処、拙者転勤之同日ニ付、旁奇瑞ニ存候間、一入奉深許(マヽ)候、尤其涯爰元氏神堂より金子百疋奉納奉遙拝候得共、今日右之通差立候事、

一五月廿四日、今朝有馬衛守所江差越、御太鼓役ニ付而伝受いたし候、尤去ル廿日右御太鼓打方之儀は、衛守江引合相勤候様、御側役竪山武兵衛より致承知、有馬江も其段御達有之由致承知、右之通ニ而候事、

一五月廿七日、豊後殿より御内々被仰渡候趣は異国船之儀ニ付、当月四日阿部伊勢守(正弘)様より南部遠江守(信順)様江御封物被相渡、南部様より此御方様江被遣候御内用封拝見被仰付、其趣御国体ニも相拘り候儀ニ付、無御手抜様御取扱有之、尤琉球并島々迄も御手当被成置候様との御儀にて候、左候而右旁ニ付琉球逗留唄人も引払せ方之儀、篤と致勘考存寄申上候様、是亦御沙汰之旨、御同人より書役相良彌兵衛を以御直達之筋ニ而致承知候、尤川上式部江茂同断被仰付候事、

一六月二日、先日豊後殿より相良彌兵衛を以致承知居候唄人引払方之儀、今日式部一所ニ書付相認、銘々存寄之趣同断、彌兵衛を以差出候事、

私事、乍不調法者当務被仰付、殊更琉球逗留唐人方掛被仰付、不容易御用筋と奉存、当惑仕罷在候、然処右唐人引払方之儀ニ付、存寄有之候ハ、可申上旨承知仕、当務昨今ニ而可申上様も無御座候得共、唐人所行は勿論御取扱振り承知仕候処、是迄之通唐人申掛候難題程能申断、落着安心ニ而、平穏ニ引払候様不罷成候而は、以来何様之時宜も難計、万一騒敷事共成立候而は、屹と不可然儀ニ奉存候、外ニ存寄申上候程之儀無御座候、此段申上候、以上、

六月　　新納内蔵

一六月廿五日、四ツ時早目出勤、無程川上式部殿并御軍賦役列立御里通(目カ)いたし、外御庭江相廻り候訳は、先日より御沙汰ニ而四拾八人御備組并迦農手数　御覧可被遊旨承知仕候付而也、

左候而四ツ過　御馬見所江被為入候　御着服御袴、其節我々初御軍賦役等一統御通掛御目見仕候、左候而御馬見所江被為　入候得共、直ニ御小姓を以私并式部御馬見所江罷出候様承知仕、直ニ罷出候処、御座末ニ而御目見、直ニ其儘相詰居候様、御側役堅山武兵衛より被相達難有相詰居候、御馬見所故横壱間ニ而竪四間位有之御座ニ付、御側廻等詰人数込ミ合候ニ付、内蔵は今三尺も進候様御直承知仕難有相進候、式部も順々ニ而候、御前より壱間三尺位有之候処江罷出候、左候而砲術之拾五人壱行ニ而十二手数いたし、引続迦農弐挺押出し、打方之作法いたし、其次四拾八人之備繰出し、二ツ四ツニ割、左右前後江引廻候調練いたし候処、何茂至極宜敷出来候、余程致稽古候筋相見得候との

御沙汰共有之、難有次第ニ而候、右等相済、ヒストン筒弐挺、御納戸御道具より御取寄せ、打方之手数成田彦十郎・木脇賀左衛門相勤、差図成田正右衛門ニ而候、且又阿蘭陀鞍御馬ニ仕掛ニ而、試ニ誰そへ乗せ候様御沙汰被為在、御馬之栗毛ニ仕掛牽出し候得は、木脇賀左衛門江乗方いたし候様被仰付候、賀左衛門打乗候而、御馬場五六返も乗候、誠ニ珍敷致拝見候、左候而、

右御馬場ニ迦農引方茂仕合せ
御試被為在候、乍去鞍并迦農も引せ方之仕掛いまた不
相揃ニ付都合不宜候、然共御馬壱疋ニ而兎哉角引行候
事ニ而候、右砲術等
御覧之中、式部江は砲術一巻
御沙汰も被為　在候得共、拙者へハ昨今故欠、右等之
御沙汰は無之、去年霊社の御詠草且其外品々御覧之御
咄共被為
在、幽齊点は余程珍敷ひと
御意ニ而、外ニ持合はないかと
御意ニ付、入
御覧候三十首之詠歌并連歌一巻之分幽齊之点ニ而、外
ニは幽齊点ハ勿論詠歌とてハ持合無御座余は都而連歌
之覚留と申様成物沢山ニ而御座候旨申上候、誠ニ難有
御意共蒙り奉り候次第ニ而候、左候而砲術等は九ツ時
分相済、直ニ
御引入被遊候、其節も御通筋江罷出候、其後御小納戸
山田壮右衛門を以、拙者并式部江御菓子頂戴被仰付候
ねり羊かん五切・、外ニ惣勢之内ニ町田圖書・嶋津權五郎
于菓子五ツ、
罷出被居候処是亦御菓子共同様被下候由、且我々初一
統江西瓜被成下并御台所仕出ニ而御賄一度被下候、右
旁何も相済候而退出は八ツ過也、
右通　御前近く被召出候儀は、式部ニも今日初而之由、
此内度々調練等も有之候得共、右次第は無之候由承候
事、
　但今日我々初一統支度平服ニ而候事、
右通段々難有被仰付候ニ付、翌廿六日改服ニ而出勤、
式部一所ニ御近習江罷通、御側役竪山武兵衛へ相付御
礼申上、且又御小納戸山田壮右衛門江も相付、被下物
之御礼申上置候、左候而豊後殿江成行御届且御礼も申
上置候事、

一六月廿七日、伊地知小十郎被参被申聞候ハ、先年同人
編撰被致候南聘紀考三冊之内壱巻再撰相成候由ニ而、
内々被為見候、尤同人先年編撰之三冊は、先年御取揚
相成候ニ付、其節拙者共取掛、急速写置候麁本有之候

処、先比御用有之
御前江差出候旨被申聞、恐入候仕合ニ而候、乍去別而
難有儀ニ奉存候事共なり、依而此旨記し置候事、

一七月六日、大口木之氏村拝領山ニ付而、先日用頼道嶋
源五郎より御訴訟申出置候処、今日御趣法方御用人取
次を以、御金五百両御取替被仰付候、難有次第奉存候
事、

一八月朔日、四ッ前登　城、九ッ退出、尤例之通御対面
所江
御出座、御式被為　請候ニ付、家格之通罷出御礼申上
候事、
　但例之式通故、細事爰ニ略ス、

一同日八ッ後当務ニ付、預り地頭所福山郷士年寄并組頭・
地頭横目等祝儀ニ土産共持参ニ付面会、盃共差遣候、
取次は大番頭座書役神宮司筑左衛門ニ而候、且地頭所
大姶良よりも毎之通役々共見廻候ニ付、是又同断盃共
差遣候、尤取次用頼代道嶋源五郎ニ而候事、

一子八月四日、毎之通致出勤候処、九ッ半時分宿元より
家来馳参り璞心院様御事、只今より不図御病気被為起
則より御気絶ニ而引釣り甚敷、何共口上ニ難述御様体
ニ被為在候ニ付、早々罷帰候様申聞候ニ付、其段申断
致御暇差急キ罷帰候処、承候よりも御煩甚敷、実ニ恐
入候御様体ニ被為在候、針科渡瀬幽察・西郷幽泉、折
能早目ニ被参候由ニ而則より灸治共候得共、一向御返
し不被為、引釣り甚敷則中風等敷候得共、不思儀之御
様体之旨承合候処、本科朝稲三益も拙者帰宅之折被参、
則御療治被致候処、追々引釣り御和らき被遊、大鐘比
ニ相成候処御引釣りハ止候得共、夫程之御煩ニ而有之、
三益も壱人ニ而不相叶存付、山之城坦道を相談ニ頼入
呉候様承候付、早速用頼等差遣候処折能在宿ニ而直ニ
参被呉候ニ付、相談ニ而御薬差上候、夜入段々御和ら
き相成、先は仕合之事ニ而候、暫時ハ両医もヶ様可被
為成候御事とハ不存御様体ニ相伺被居候由、左候而夜

更弥以御平和被為成候、尤御煩出より追々諸方江申遣し、新村鎌齊・新納瑞策、其外兼而出入之衆相頼御看病いたし、左候而翌五日も押通り、御快方にて難有仕合ニ候、療医一日ニ両度ツ、も見廻被申候、尤四日夜ニ相成御平和ニは候得共、五日・六日迄も頓と御一睡も無之、狂気之御塩梅ニ而野奸症共可申様被為在、不思議之御煩ニ而候、然共六日之夕方より少し御眠り気被為出、同夜御安眠有之候処七日朝ニ相成余程御快方相見得候而致大慶、夫よりは追々御快方被為成、存外御元気も出、何茂御順快被為成大キ仕合ニ候、然共拙者は彼是御看病方ニ付、十七日迄引入居、十八日より出勤いたし候、廿日比相成候而は頓と御平生程被為成、誠奇妙成御煩ニ而候也、

一八月十七日、八ツ後より於外御庭、東郷左七郎方数矢等之

御覗有之、悴次郎四郎ニも当分彼方江稽古ニ差越候付召列被罷出候、尤人数東郷左七郎并嫡子源四郎・左七郎弟直次郎・平山喜八郎・久保四郎次・松方金次郎・野崎喜兵衛・本田孫九郎・有馬新七ニ而候由、左候而八ツ過御茶屋江被為

入、直ニ左七郎父子ニ而数矢被射、引次外人数二切りニ罷出、数矢射方いたし、其後三十間位ニ大的被相立、射方被仰付、初は銘々持弓ニ而候得共

御前より七部位之御弓被相下、左七郎江御渡有之、誰そへ為射候様

御沙汰有之、直次郎并次郎四郎江被相渡、則右を以射候処、五筋之内四筋は次郎四郎ニも射付候由、外之人数ハ都而持弓ニ而射候由、左候而右射方之内段々　御沙汰被為　在、何篇御直々御取直同様左七郎江御沙汰之御声御前ニ而候事ニ付、直様奉承知候由、就中悴共難有儀と奉存候、右相済、御肴・御酒等被下候得共、時刻も遅成候ニ付左七郎宅江申下ケ、於彼宅頂戴相成、日入前ニ何れも引取候由、右流儀数矢等は此度於江戸左七郎藤堂様御藩中より伝授有之、御国元ニ而は初而御覗之事ニ而候、追々御取立被仰付候、思召茂被為

在候段、被奉伺候由、尤今日之時宜射前も能出来候ニ付、御機嫌御能被為　在候由、何れも奉伺一統難有かりにて候由なり、

一子八月廿三日、　御発駕御供御旅方山田増右衛門江相頼、小豆屋畠山助右衛門方江書状差越候事、

但彼方より別方差越候書状は留略ス、

一筆致啓上候、秋冷罷成益御安泰被成御座珍重存候、御家内方も弥無御障候半と是亦目出度存候、於当方拙家一統無事罷在候、乍慮外御安意可給候、此内は暑中為御尋細々之御書面忝致披見候、自此方も時々御安否御尋等可得御意之処、始終御無音至極背本意候、先は貴札之御礼御報時候御尋旁為可申入、如是御座候、恐々謹言、

八月廿一日　　新納内藏

新納次郎四郎

畠山助右衛門様

猶々乍毎御家内方よりも御伝言御丁嚀之段不残忝存候、右之御礼も取束申上候、何とそ宜敷様御伝声御頼申上候、爰許当夏別而暑気強御座候様取覚候へ共、頃日相成冷気相催万人祝ひ申事ニ御座候、乍筆末藤次郎殿御方ニ而も至而御無事、何れも息才(災)ニ御座候、御安慮可被成候、将亦唐織手拭二ツ、誠ニ以麁品候得共、聊御書音之印迄致進覧候、御笑納被成置度候、以上、

嘉永五年子十月廿六日、徳之嶋流罪時升江遣し候御状

一筆致啓上候、追日寒冷相向候得共、弥以無御障候半と珍重存候、爰元ニ而拙宅至而無事、就中老母比日は分而元気罷立候其外子共平和ニ罷在候間、少茂御懸念被成間敷、於御宿元も御無事、御孫達も無御障御成長被成候、是亦少しも御懸念被成間敷、次郎九郎殿夜々御見廻、殊更御手作之野菜或芋なと折々御持参、御丁嚀之事共御座候、謙齊不相替大はやり、何寄之事ニ而、頃日は柳町之口江転宅共相成り候次第、旁喜悦之事ニ御座候、何茂御安心被成度候、

一当春以来度々御細書等無相違相届、忝致拝覧候、頃日は至而御元気之由、何寄以此一条目出度存候、細々御書面も致承知候通、老体は兎角勇猛之気を引出申様取持無之候而は、気分後れ安きものゝよしニ御座候間、折角御気先キ不禿様御保養被成度、如貴命堯風舜雨之時節、末長く　御徳沢を被仰候様有御座度、兼而祈願いたし罷在候、爰元よりも是のミ御噂申事ニ而御座候、

一眉尖刀之記御草稿被遣、慥ニ相届細々拝見別而満足之至御座候、小十郎等江も見せ申候、是も至極之称美ニ御座候、拙家所持之長刀も研方共いたし候所、出来振り至而見事ニ有之、鑑定家江見せ候処思い〳〵の目利ニ而三条吉則或ハ若州冬廣・越前之千代鶴・嶋田之義助なとゝ申、頓と一定不致候、乍去至而引下ケ吟味ニ及候得は、高田長盛之上出来と可申哉、勿論無不足道具ニ而毛頭茂疵共ハ無之候、追々吟味之詰り候処も可有之候間、尚亦何分可申越候、

一玉手箱茂相届、是亦次郎九郎殿御持参ニ付、于今御預り申置細々致拝読候、扨々能も御綴り立被成候事共致感心候、中程遠謫之次第は涙ニ及申候、御書面之通今の賢明の御仁君しろしめされぬ事は余もあらし、此一筋ニ付而は何之機密も弁ぬ我等ことさも只何とやら、夢見候様御座候　霊社之擁護も可有之候間、御趣向之通り日課を御楽しミ、御保養可被成儀上なき神仙之妙薬と存候、拙者ニおひても少し朱星の移り香も有之候間、何卒難有御徳沢を蒙り、一涯致精勤度合掌罷居候、此細事筆紙ニは不被尽成行候得共、別楮ニ粗相記し差越候、只御遠察被成、何分ニも御保身ハ第一之事と存候、ちら〳〵伺候処も御賢明之御徳沢、日月と共ニ照さぬ所は有間敷奉存候、

一權左衞門慎振之儀、毎便被仰越細々致承知候、随分所中ニ而加勢相成居候由、尤実子も罷登候ハヽ、家来之場ニ而も取立可申合点之由、能心得と存候、拙者今以心組相替申儀無之候、然共段々彼類中ニおひて差合申儀有之、いまた決着不致候、然共無程熟談相調可申候間、權左衞門も折角相慎居候様御申聞せ置可給候、尤伊地知三之助よりも細々申越候書面見届申候、

一大口拝領山之儀ニ付而は、始終故障ヶ間敷事ニ而、今以すら〳〵取下しハ出来不申、支配之又木なと致迷惑居候、乍然是も随分宜敷向に成立、柞灰千俵ヅヽ、三ヶ年之間ニ肥前表等江積出候様被仰渡、先は悦申候、外品も追々開らけ立可申と楽罷在候、勿論拙者方ハ此内も申越候通、最早六百両計入金ニ相成、夫より雑用払出候もいたし候得共、三分二欠半方位ハ所帯方差足し相成居候荒賦ニ御座候間、是も不容易御救助ニ而難有奉存候、御案し被成間敷候、

一御宿許御取続至極之御難渋と差見得候へ共、吉野村江唐芋作共被成、余程御励之事ニ付、拙宅より御合力稀々之儀ニ御座候、右之通山一件随分難有成行ニ候得は、御合力も心能出来候間、是以御斟酌被成間敷候、御発駕前之仰出も此節御承知可被成、鰥寡孤独を哀憐之御趣意奉恐入次第、御同慶奉存候、

一於其元段々手習子共多相成、彼是ニ付御到来之砂糖も有之候間、小樽三ヶ程被差登度御心組之所、黍作不出来ニ而其儀不相調、外品々も色々御工面有之候得共、未進者共之事故、何も御手筈出来不申候由、細々御書面致承知候、誠ニ寺と申里と申時宜ニ而、現事不相調候得共、御志之程不浅忝存候、右ニ付而は御宿元江被遣候嶋産御品々御配分ニ預り、不差置家内中打寄り御賞味候、此等之段筆末ニ罷成候得共御礼申上候、家内中よりも分而御礼申上度申出候、

一拙者転勤之儀難有とハ申候得共、内実別而迷惑存候間、追々密々相伺候処、深き御吟味之訳有之候事之哉ニ及承、其以来一向差はまり相勤申事ニ候、此事ハ別紙ニ相認差越申候、

一悴次郎四郎事三月十九日学問出精心掛宜敷候趣被　聞召上、為御褒美太平布一疋拝領被仰付、誠ニ以恐入難有奉存候、尤外ニ寄合より当番頭肝付左門殿・同島津健殿（実ハ黒木之二男ニ而、島津内匠殿養子なり）、右弐人は学問相応有之と之御書付、外ニ諸士之内四五人同様、尤寄合は太平布一疋ヅヽ、諸士ハ芭蕉布壱反ヅヽ、御褒美被下候、又当番頭諏方数馬殿・同桂太郎兵衛殿・無役嶋津郷十郎殿・悴次郎四郎、外ニ諸士より五六人、此列学問出精心掛宜敷

との御文面ニ而、御品物は前条同断、尤黒田嘉右衛門ニも右之人数ニ而目出度御座候、愚息次郎四郎事ハ兼而気任せ者ニ而、拙者ニおひては別而致心配居候得共、元服之折も難有　御意を蒙り、此節も右次第之事共、誠ニ冥加之生得と奉存候、何卒往々似合敷御用ニ而も相勤り候様生立候処、御教諭共被仰越可給儀共訳而奉頼候、去夏定火消被仰付、是以拙家前代無之大身家之勤柄、我々敷難有儀、内実ハ迷惑なから御受申上置候、其上拙者御軍役方勤方、余所よりは　霊社之子孫ニ而格別とのミ祝儀承候へ共、内実ハ苦しミ候所多御座候、御賢察所仰候、乍然元服之砌并今度之御褒美旁実ニ恐入罷在候、何卒其身も励ミ立候様有之候得かしと、此段ハ実ニ念願仕事候ニ、私当務も別而難有次第ニ付、折角精勤之心得ニ御座候、其段ハ御安慮可被成置候、

一武芸出精ニ付、為御褒美太平布・芭蕉布等被下候向ハ多人数、同日初方仰渡御座候、

一東郷左七郎於江戸此頃致伝授候早番ひの数矢、八月十七日御発駕前之御式欤ニ而、大雄山并寿国寺江御参詣被為在、御帰殿後於外御庭右数矢等御覧有之、次郎四郎ニも当分彼方江稽古ニ差越候ニ付、召列被罷出候、惣人数左七郎嫡子東郷源四郎・左太夫実子東郷直次郎・平山喜八郎・本田孫九郎・久保四郎次・有馬新七・野崎喜三衛（兵カ）・松方金四郎・次郎四郎・左七郎ニ而、八ツ後より外御庭御茶屋之御馬見所江御出有之、初ハ左七郎父子早番ひ之数矢有之、引次四人ツ、二切ニ罷出、三十筋位ツ、同断数矢有之、左候而三十間ニ大的被相立、遠間御望有之、二切ニ罷出居候所、

御前より七部弓二張被相下、誰そへ為射候様　御沙汰有之、即一張ハ次郎四郎江、一張ハ直次郎江、左七郎より　御前ニ而賦り付射方被仰付、遠間五筋ツ、射候処、次郎四郎ニも四筋程（マヽ）射付候由、外ハ持弓ニ而何れも射方有之候由、尤　御前ハ一間余も御間々有之候、勿論前以より　御直御差図被遊儀も可有之との　御沙汰ニ而候処、丁度其通ニ而、射方之儀ニ付而段々御差図有之、成程左七郎御取次も有之由なから、何れも御

高声故直々奉承知、一入頭も下り候様有之、尤弓之内左七郎江始終
御咄ニ而、中ニハ一統壮健之者共ニ候、此人数より御供共いたし罷登者ハなひか、源四郎も召列候様御意迄も有之、内心何れも飛立様ニ罷在候得共、左七郎より難有　御意ニハ御座候得共、最早無余日罷成、仕廻方出来間敷との趣申上候処、成程其通ニも可有之なとゝの御事共までも、皆直々奉承知居候由、左候而御酒・御肴右茶屋ニ而被成下候、
御沙汰之由ニ候へ共、何れも若年之向々且時刻も永引候ニ付、左七郎宅江相下ヶ頂戴有之候由、一統日入時分引取相成候、誠ニ以愚息なと右様之次第、尤去夏弓之事、
御覧之節も、一番御前ニ罷出候由故
御見覚も被為在候半、内藏悴そふと、御吐有之も直耳ニ奉承知居候由、何とも冥加之至、拙者ニも夏分砲術手数
御覧之節、右御馬見所江被召出、
御直々御意奉承知、其上次郎四郎迄も右之次第、勿論前条　御褒美等茂被仰付、畳重（重畳）冥加之事共、決して霊社之御利生と独り感涙いたす事ニ御座候、右次第ニ付源四郎事は自分ニ召列罷登候、是も不時仕廻方等込り候由ニ御座候、決して難有儀も追々可有之存候、
一当五月廿七日夕方御女子様御誕生、至而御丈夫被為在、増々御壮健之御事ニ奉承知、久々振り御本丸内御賑々敷御模様、誠以恐悦奉存候、於江戸表ハ若殿様弥御機嫌能、至極御元気様成御事之由、此上様も最早御賢明之御相被為在候趣、罷下候面々難有からんものハ一人も無御座候、重畳結構之御儀と奉存候、是亦御同慶可被成候、
一大口飛諏方社去々十二月焼失ニ付、木之氏村江引遷方之事御闔も下り居候ニ付、木之氏村諏方社より西之方へ引並ひ、当春宮殿致造立ニ付、正遷宮之日柄霊社御懐中本小笠原流日取を以て吉辰相しらへ申遣置候、日柄之内ニ而四月廿八日可宜と大口ニ而取究、諸手当いたし、社人等如例相集り無滞遷宮相済候段届申越候、

此日は俗ニ申不成就日ニ而候得共、明時館暦面と有之、霊社御懐中本ニ而は吉辰故、右之通取しらへ之日柄之内ニ而、然処拙者御軍役方勤被仰付候同日ニ而奇遇之至り存申候、左候而其後直参速々不相調ニ付、家来村山市郎代参として差立、金子致奉納、分而御軍役方当務勤功相立候様御守護奉願置候様ニ申付遣候処、同十一日代拝右飛諏方は勿論霊社其外泉徳寺等迄も都而相仕廻、罷帰り届申出候事ニ御座候、

一中尾梅之記、先比より出来居申候間、此節次郎九郎殿方より被差越筈候間、御一覧被成度、左候而跋文ニ而も御趣向出来可申、是又後年之記録可相成候間、得と御取調奉頼候、

一拙家譜帳之儀如貴命折角取しらへ申候、小十郎頓と寸暇無之被罷成、別而不自由御座候、拙者一己同前之しらへニ而猶更埒明不申、就中転勤以来夏中ハ実ニ心爰ニなく打捨置、当分肌持ともいたし能罷成、又々打立折角油断不致事ニ御座候、

一伊地知小十郎事ハ三月初比より段々御内用向御小納戸或ハ御小姓等を以被仰付、宅別勤ニ而古事取しらへ被致候処、八月十九日御記録奉行へ御役替被仰付、誠ニ以当人ハ無申迄脇よりも悦申事ニ御座候、此役替は全ク思召より出候事之由内々及承候、無左候へは六ケ敷可有之事と我々式も推察致居候、何れ命なりけりと存候、御遠察可被成候、

一五月七日、森川利右衛門・種子嶋加次右衛門、町奉行ニ而御鉄砲奉行勤被仰付候、其後岩元市十郎事も致下着、無程御作事方江相詰候様被仰付、是以御作事奉行勤ニ而も無之、只彼之方江相詰候様と計被仰付あれ共、無かことくと承候、去年伊平事は御船奉行寄ニ而浦賀等迄之通手形印形等ハ差出間敷被仰付候、其後玉里江相勤候様被仰付候由ニ而、彼之方江相勤候様日勤都合能事と存居候処、先月初比欤玉里も又離れ被申候由、何様之訳候哉、吉仲も去年下着無程大番頭一篇之勤ニ而候処、当五月十四日嫡子右平太病死被致残多仕合、尤此嫡子も最早当番頭迄被仰付置候処、右仕合余程込

り之由ニ御座候、夫故親父仲殿も前以より看病方として引入候処、右不幸以後当人足痛等ニ而実故到来長々出勤等も出来不申、乍去市來湯治なとへ被差越候節は、湊辺江掛鉄砲なとニ出張楽被申候由、当分も不塩梅勝承り、五月以来出勤無之、ちと不審之至御座候処、去ル廿四日より出勤有之候処、至極壮健之様子ニ而候、山元孫兵衛も先比物奉行一篇之勤と成、丸田恭藏矢張御製茶方江相勤居、先ッ是迄之通罷立、色々浮世ハ替るものと初て存申候、其外御役替ハ段々有之、坂本休左衛門物頭勤、大迫藤兵衛道奉行、阿多六郎寺社方取次御役替等も御聞被成候半、金山方も近比段々出入有之、郡奉行も差抜有之、是も受持掛之御仕向相替候、枡形辺ハやう〳〵もたへの事と風評御座候由

一当御立国中御政事向段々御差図有之、向々ニ而は下々之事迄御聞通り相成、何れも驚キ恐入奉存仕合御座候由、右御用筋等多く枡形之御取扱と相見得、何事も彼之名前御座候、此大夫一人ニ而も無御座候得共、去年御家督涯御双方兼務被仰付置候席上ニ而は有之、旁思召被為在候御事欤と奉恐察候、追々諸事成行も可有之候、左候ハ、御聞せ可申候、

去年之御書付振り、

嶋津豐後殿

右　宰相様御附御家老兼務被　仰付候旨、今日　御名代島津又四郎殿ニ而被　仰付候云々

亥二月廿一日　　近江

右之通ニ而兼務之人数吉仲伊平・得能彦左衛門なとニ而御座候、然共得能ハ先比御側役々離切り、高輪御附ニ而最早江戸詰ニ而候、巷説ハやゝもすれはかゝらん事共申、猿も大汗そふなと申事共有之由、御一笑可被成候、

一諸士若輩之面々、矢張段々口事争論等不相絶、木竹類を以打合なといたし如何敷儀共到来、都而即被聞召通候由ニ付、先比は御書取を以細々被仰聞候趣も有之、組中より屹と相慎可申旨御受書迄も差上置候、余程静謐罷成能事と悦居候処、九月十五日私領永吉之踊見物として、西田郷中之吉井勘左衛門嫡孫十七才・松崎次

左衛門嫡子并薗田彦五郎といふ家督都而同年輩位三人列立差越、先方ニ而は吉井事引分れ居候節、家中之踊行列ニ障り、終ニ及刃傷内実ハ其場ニ倒れ候由、左候而列之両人も聞付参候処、最早息も絶々相成居、相手ハ知れす大心配と成候由、誠苦々敷次第歎息之至ニ候、尤吉井は則列帰り、十六日晩病死之筋十七日朝披露相成候由、左候而家来も三人ハ手負一人踏止り働き、終ニ仕詰候程之事ニ而、其身も相応之手負なから帰宅ニ而切腹いたし候由、右之吉井も士中格護、家来同断、手負三人ハ快気之上届申出候様被仰渡置、列合差越候弐人は在宿之由、何分苦々敷事仕出し候、

一爰元学問武芸之儀ハ訳而被仰渡候、演武館も山本教授之被参居候跡と承居候、当分畠地之西之方聖堂之囲涯演武館之境江作り掛、前稽古所程之稽古所当夏新造立被仰付、武術師家之内五人差分り稽古日被相立候、然共是ハ場所相重ミ候迄ニ而別段子細無之、今度之御書取ニ相見得候、来春御下国迄ニ諸篇印相見得候所、何様之事ニ可有之哉と、我等式不差構身分なから奉案事ニ御座候、

一玉里御作事今以御取込、乍去高輪御附之面々ハ段々交代ニ而、下るもあり登るも御座候、就而は御下向之程合難計、乍然到而　御機嫌能御静謐被為在候由、恐悦至極奉存候、西丸炎上扨も不思議之事ニ候、外々よりも御聞可被成閣筆候、

一八月廿三日、晴天、御機嫌能御発駕被為在、誠ニ淋敷罷成、来春之御下向今より奉待候事、実ニ三秋之ことく御座候、前日廿二日相応之大風雨諸所破損到来、田方ハ差而之痛ミ無之、畠方そま・粟（ママ）相応之痛と成候由及承候、乍去当時常平倉之御仕向被仰渡置候付而、現米沢山成事ハ公私共余程之事ニ而、中ニ茂当分焼酎屋共も差留相成居、猶亦米穀は気遣ひ無之筈と、難有奉存居候、

右之外雑事申越度儀共ハ海山之如く御座候得共、中々一朝一夕ニ認得かたく、先々此等之趣題目之分申進候、重言なからも貴様御保身万々奉祈候、恐々謹

言、

〔朱書〕「嘉永五年」

子十月廿六日　　新納内藏

伯剛老丈

尚々百田紙壱束不取敢書音之印迄致進覧候、御笑納可被成置候、

〔朱書〕「時升伯剛返札」

子十月廿六日御認之尊翰并百田紙壱束御恵被下、難有拝読頂戴仕候、先以御尊家皆々様無御別条被遊御座候段承知仕、恐悦無此上奉存上候、随而私事も不相替元気ニ罷在、玉手箱課業無忘却、于今相勉申上候間、少も御懸念被下間敷候、

一其御地武芸学問段々御手も付候由、右ニ付次郎四郎様御褒美且又射術御覧一件之儀細々被仰下候、其儀荒増は次郎九郎よりも申越承知も仕候へ共、猶又御細翰ニ而委敷承知仕、誠ニ以何物之宝よりハ子たからとこそ申事ニ候、何寄御家之御再興と申物ニ御座候、嘸々御はゝ様・其外様御喜び奉尊察候、次郎四郎様江別段書面も差上不申候、乍恐宜敷被仰上置被下度御願申上候、

一宿元之儀も毎々次郎九郎罷出御訴も申上候由、何れ外ニ仕形も無之、合掌御取救を奉願外無之候、何共宜敷奉祈候、

一当年も三嶋共ニ珍敷凶作之由ニ而、喜界なとハ段々餓死人も有之候由申事候、当島ハ左程之事ハ無之候得共、去夏大旱魃之上ニ致大風、黍作大痛ニ而上納過分ニ引入ニ候代官税所源左衞門大心配ニ候得共、あやにて三ケ年共ニ毛頭豊作無之追毛過分之未進相立、誠ニ気之毒之事ニ御座候、当年之三嶋出来高ニ而は、大坂御都合如何可成立哉と不入事ニ掛而心配被存申候、右通於当嶋為登物なと申も何も無之、当春落地生さへ全ク不熟ニ而込入申事ニ御座候、併宿元江ハ焼酎亀三本為差登ニ付、次郎九郎ニも当座之凌少しハ宜敷候半哉と相考申候、謙齊ニハ先療治も発行仕由ニ而仕合之事ニ御座候、

一大口御拝領山も少々ツゝハ御宜敷向ニ成立候由、何れ堂も連々そろ〳〵と相直り可申候、

一飛諏方社木之氏江御遷宮相成候由、類火ハ気之毒之事御座候得共、木之氏御遷宮ハ結構之御事ニ奉存候、益々霊応も可有之奉存候、

一中尾梅之記次郎九郎写差下得と相見仕候、乍毎とは乍申教授先生慥成文章ニ御座候、右跋文之義被仰下、此上ニ私可申述趣向も無御座候へとも、私共之梅樹祖父浦舟養子ニ参り、十四五之時、已ニ本木皮肉ハ腐去り骨計りニ相成居候へとも、其時百年位ニハ相見得、尤誰申伝共不相知、大口城門之辺ニ親木ハ有之、霊社様御秘蔵之由、箙之梅之同種類と申伝候由、浦舟申居候故私東遊之砌生田之明神江参詣候処、打柄花之時分ニ而淡紅色・花形香も同し様ニ有之如何様霊社様御上京之砌なと有之、萠蘖共御求め御下り共ニ而は無之哉共被存候、右種類之申伝共跋ニ記し候而も可宜哉、何分未タ下草も起不申跡達而差上御伺可申上候、

一御譜帳御取懸り之由、何卒是ハ早く御成就を奉祈事候、何れ追々相知候儀ハ拾遺と申は御栫ニ置而、夫江書戴候へハ致前後候而も不苦候、小十郎との結構ニ付而は御系譜之為ニハ御迷惑可有之、併是も年中取調事も有之間敷却而御用之物ニ茂御系譜一件抔考証罷成儀も有之筈候、御沙汰之通りニ伊地知も命なりケり、老後ニ好之道ニはまり候而、其身ハ勿論之事ニ而、脇々よりも一統之悦と被存申候、

一同家權左衛門一件、此節被仰下候趣具ニ申聞置候、折角相慎居候間、何卒類中差合之儀なと早く相片付罷登候様御座候ハ、其身ニも実ニ蘇生之場ニ相成可申候、配所ニも段々知人多候間、折角上国を祈、少々船送りニ而も合力仕心組之者抔も有之由ニ而相延候得は、皆力を落申模様ニ而、其身も是ニ甚込り候向々相見得申候、扨て又着涯御屋敷内ニ而も被召置ニ而も、一ト通之筥大工御仕、其上竹細工別而上手ニ而、随分少々之御加勢ニハ罷成可申と奉存候、当春便共より吉左右共御座候ハ、到我々安心仕可申候、

一伊地知三之助も当春交代被罷登筈候間、上着候ハ、爰元成行直左右御聞取可被下、此人并代官衆両所ハ至而丁寧罷成、其上詩作之贈答抔毎度仕候、是ニ不思議之

因縁出会之儀有之候、助右衛門重張文人之墓ニ参詣、追憶之詩抔墓前ニ献し候儀有之候処、去九月亀津表江用向ニ而差越候序、伊地知所江見廻候得は明三日重張翁百五拾年忌相当ニ付、能折自分ニも下嶋之事故、ちんと致茶立参詣之考候間、列立申度誘引ニ付、是ハ不思議之事ニ而、何不知当所江参逢、年回之日柄ニ出会候も如何様同気相求、神霊招ニ而も可有之候哉、是非参詣可致内約いたし、当日田村遊靄と申者所江立寄、外ニ嶋人共も出会珍敷仏事調申候、墓前之詩共書写差上度相考申候得共、此節急敷後音可申上候、

一御家之眉尖刀も御硎方出来申之由追々鑑定家之吟味も詰り可申、何れ罷登候時節拝見可仕候、

一当年無類之不順ニ而、未タ極月末より晴天無之、夫丈ケ農作も痛強く、誠ニ気之毒之事ニ御座候、いまた新役之衆一左右も相知不申、私方も正月十四日之宿元状迄相届候得共、其節迄ハ江戸御発駕御日限抔も相知不申、最早已ニ御着城も近寄、御地御賑々之筈と奉存候、

一嶋津郷十郎殿再勤之由承得、是は如何成行御家かと危ミ居候処、再勤ニ付而は我々運気開候様成心持ニ而、頼母敷被存申候、

一別冊ニ申上候理屈は、誠老ほれ之出ほうだひ、過言差合無構兵六之境界ニ付、其御考ニ而御一覧、直ニ御焼捨可被下候、去夏も申上候九郎談之著述ハ、系譜外之私家之小説、且又当彌太右衛門諸所之苦労を相記候故、何卒入御覧度相考候得共、何れ持登不申候而は便宜も無之、時節を相待居申候、先ハ御細書之御答申上度、如此老眼殊ニ出船前ニ差懸り、夜分之書面、甚以麁相ニ御座候得共、老朽を以御用捨偏ニ奉祈候、恐惶謹言、

〔朱書〕「嘉永六年」

丑三月廿六日　　彌太右衛門時升　敬白

内藏様

御手元江

〔朱書〕「嘉永五年子十一月七日相認彌太右衛門時升江遣候状留、」

〔別紙〕

一四月廿七日、御側御用人高田十郎右衛門より左之通、御用之儀有之候間、明廿八日五時可被罷出旨豊後殿依

御差図申達候、以上、

四月廿七日　　高田十郎右衛門

新納内藏殿

右通之御用触勘定所詰席江相達候付、御請書如例差出置候、

一四月廿八日、五ッ前出殿、高田十郎右衛門江罷出候、御届申書置候処、無程御供目付森川孫太夫より鹿之間江罷通候様相達候間、付添罷通候処、右十郎右衛門引進ニ而豐後殿・多門殿御列席ニ而、豐後殿より左之通被仰渡候、

御軍役方

惣頭取兼務

新納内藏

右当御役ニ而右之通被　仰付候、御軍役方相図之御太鼓役を兼相勤御軍役方江相詰候様被仰付、左候而御軍役御手当向之儀都而致差引、右江相拘候御用向ハ、向々より申出候儀茂何篇致吟味、時々可得差図候、且御出馬御供、又は御名代等被差出候節ハ、依時宜可被召付旨被　仰付候、

四月　　豐後

右通被仰付候、兼務は御勘定奉行兼務之事ニ而候由、致承知候事、

一同日表御用人嶋津藤馬取次ニ而、左之通、

新納内藏

川上式部

右は琉球逗留唐人方掛被仰付、壱人ッ、繰廻琉球江渡海被仰付候、

右可申渡候、

四月　　豐後

右之通被仰渡、左候而式部殿江直ニ当秋渡海被仰付候、

一同日物奉行田中源五左衛門事当御役ニ而、御軍賦役勤并御目付御裁許掛折田平八事、御供目付格江御役替御軍賦役勤被仰付候、

一同日御軍賦役寄御作事奉行松本十兵衛、高奉行御軍賦役勤安田助左衛門・田中源五左衛門、此三人江拙者共

同様、琉球逗留唄人方掛被仰付、左候而田中源五左衛門事直ニ当秋渡海被仰付候、

一同日御軍役方御家老座書役助田中治右衛門事茂当秋琉球渡海被仰付候、且又足軽弐人付役として渡海被仰付候、

但付役人柄之儀は、追而被仰付筈候事、

一拙者事右通被仰付候付、即日大目付以上并高田十郎右衛門、且重富并加治木等江茂御礼廻いたし候、左候而帰宅類中之分少々相招祝ひ申候事、

一当分御軍役方勤人数、

御軍役方
御名代　島津周防殿
御軍役方
副御名代　島津兵庫殿
御軍役方
島津豐後殿

惣奉行　末川近江殿

御軍役方
惣頭取兼務　御小姓与番頭　川上式部

御軍役奉行　三原藤五郎

但御側役兼務御趣法掛ニ而
御趣法方江定勤ニ而候、

御軍賦役
御納戸奉行格ニ而
御軍賦役勤　田中仁右衛門
御作事奉行ニ而
御軍賦役寄　松本十兵衛
十兵衛事、五月末御軍賦役勤ニ被仰付候
高奉行ニ而
御軍賦役勤　安田助左衛門
惣奉行ニ而
御軍賦役勤　田中源五左衛門
御供目付格ニ而
御軍賦役勤

折田平八

御広敷番々頭ニ而

御軍賦役勤

当分大嶋江渡海　税所七郎右衛門

御軍賦役

伊地知小十郎

田中源五左衛門同名故、三左衛門と改名

野元源五左衛門

中野織右衛門

御軍賦役方

御家老座書役

相良彌兵衛

岩元清藏

書役助

田中治右衛門

甲斐彌右衛門

田代孫九郎

永田直右衛門

野村金右衛門

右之人数ニ而候、尤周防殿・兵庫殿事ハ出席無之豊後殿・近江殿事は御用之節ニ御軍役方御家老座江御詰被成筈候得共、御家老座より御用筋被成御聞候ニ付御出席無之、左候而拙者共ニも右御家老座次之間書役相詰候、頭之方江式部殿一所ニ相詰、引続御軍賦役一統列席いたし居候、

一拙者江此節惣頭取被仰付候様、川上式部殿江被仰付候、振合通ニ而何茂御書面相替候処無之候、惣頭取両人ニ相成候迄ニ而、子細は当秋琉球江川上家渡海ニ付而は、跡役無之、右之留守番ニ被仰付候筋と心得候得は相違無之様御座候、尤今日惣頭取兼務被仰付候儀、何様之吟味ニ候哉と、ちと不安心ニ而、即席より落着致兼居候得共、稀には分而悦儀共申聞候向茂有之益々疑居候、乍去先ツ密々伺候所、琉球江当正月英国火輪船来着、終ニ琉球城内江入、暎国王命を相達し、兎角宗門并通商を開キ候所存専ニ相見得、往々邪魔ニ付、何分彼地逗留人も引払せ、無事相成候様ニ御取扱之所呉々　尊慮ニ被為及、御家老方并田中仁右衛門・安田助右衛門・伊地知小十郎等ハ、各通ニ而引払せ方之存寄腹臓申上候様被仰付、三月末方銘々自筆を以差上候由、其上御工夫且は国老方御吟味ニ及、右之次第成り立候哉ニ

而、深く御配慮候上ニ而、人柄等も訳而及御吟味、実ニ人撰之場ニ御座候哉ニ及承、左候得は冥加至極之儀と奉存候事ニ御座候、

一五月六日、表御用人末川久馬より左之通、

御用之儀候間、明七日四時可被罷出候、以上、

五月六日　　末川久馬

新納内藏殿

右ニ付御受書如例差出置、翌七日罷出候処、於御用人座御目付新納伊十郎席詰ニ而左之通、

新納内藏

右大番頭一篇之勤被仰付候、左候而御軍役方惣頭取兼務是迄之通ニ而、詰席并勤向之儀は被仰付候通相心得候様被　仰付候、

右可申渡候、

五月　　豐後

右通致承知候付、御請御礼申出置候、尤御勘定奉行兼務ニ而間遠隔り居候御座柄故、御用向弁し兼候付、右之通被仰付候訳ニ而、即日より大番頭座江相勤候筈なから、御軍役方江相詰、御用筋見習申度候間、定式御用筋ハ無相談取扱相成、重立候事共は及相談候様、尤月番等不承筋有之候得は、至而仕合ニ候段、当分大番頭町田監物殿・島津隼見殿・吉利仲殿三人ニ付、右江致相談候処、随分其通ニ而可宜旨承候ニ付、御軍役方江日勤ニ而、御用之節ニ大番頭座江差越候筈、致決定置候、

但川上式部殿事茂御小姓与番頭ニ而、御軍役方惣頭取兼務ニ而候得共、是は自分受取支配下有之ニ付、毎日与方江茂出席、御用筋取扱有之候、

一後達而明所之儀は、外并承り可然との事ニ而、福山壱ケ所明合ニ付、当分預り居候、尤諸事大番頭一篇之衆同様ニ相勤候筋候得共、前文之通内々致頼合置、御軍役方江混と相詰、大番頭座江は三日五日ニ一度、一刻ツヽ出席ニ而宜敷、別而事少ナニ而仕合之至御座候、

一前文通国老方并御軍賦役之内三人、少しハ存寄之書付共差上、中ニも小十郎書付ハ、例之通古例を引、長編

ニ而、助左衛門書面も細ク成ものニ而候由承候、然処川上式部・三原藤五郎ニは、其節相洩居候ニ付、五月末、右両人并拙者江茂、存寄之所書付申上候様、豊後殿より書役相良彌兵衛を以致承知候付、左之通申出候、尤川上式部殿書付は、内分見申候、差而之存寄も無之候、三原氏書付ハ見不申、尤御家老方并右御軍賦役三人之書付も、一切見不申候、極々御内用之筋ニ見得申候、

私事乍無調法者、当務被仰付、殊更琉球逗留唐人方掛被仰付、不容易御用筋と奉存、当惑仕罷在候、然処右唐人引払方之儀ニ付、存寄有之候ハ、　可申上旨承知仕、当務昨今ニ而可申上様茂無御座候得共、唐人所行は勿論、御取扱振り承知仕候処、是迄之通唐人申掛候難題、程能平穏ニ申断、落着、安心ニ而引払候様不罷成候而は、以来何様之時宜茂難計、万一騒敷事共成立候而は、屹度不可然儀と奉存候、外ニ存寄申上候程之儀無御座候、此段申上候、以上、

六月弐日　　新納内蔵

右之通相認差上置候、定而

御前辺江茂出候半と、恐入罷在事ニ御座候、

一御軍役方之儀不被仰付、以前ハ定而御繁用、何れも心配有之事候半存居候処、外見不相応事少ナニ而、閑静罷在、海防和漢之書籍共取はやし居申候、琉球逗留異国人取扱・応対等は琉人之仕事ニ而、大和役ニハ内証ニ罷立、評議取しきちめきたる難渋之咄共間々承り居外之見掛相違之事ニ御座候、中ニも拙者ハ右異国人請持之身振りと存候得は、砲術等ニ心を寄せ候儀も疎く、日々出勤はいたし居候得共、ちと不安心ニ而御座候、

一砲術調練今以若輩之諸士進ミ立不申候、去年　御下国之上は、定而諸事御差図等茂被為在、御軍役専被仰渡筈と、諸士中奉待居候模様之所

御着城涯より諸御式事ニ而、頓と御噂無之程ニ而案外ニ候処、去年七月初天保山ニ而御覧有之、当日は至而之炎天ニ候得共、一切御笠もなしニ而、場中始終あちこち御歩行　御覧被遊、相済迄　御桟敷之前ニ御床机被遊　御覧有之、流石之若輩も、めつさりいたし、頭

を下ケ、詰御役々もちと込り入候様ニ見得居候由及承申候、拙者ハ覗ニ茂不罷出候、右　御覧後も、一向御噂も無之候而、皆々是も案外之御事、何欤　思召被為在候哉なと疑居候処、当夏初比より段々御差図相初り、尤諸士何れも不望ミの色御覧しられ候哉、御小姓与番頭は頭役ニ而、諸士之差引もいたし候得共、其身より砲術不心得候而ハ、差図も難出来候、乍去年輩之者茂罷在候得は、若年同様、且は戦兵ニも立交り候様為致との事ニ而ハ決して無之、只手数を呑込、差図出来候丈ケ之致習練候様、左候ハ、　御覧も可被遊、且又当番頭詰衆なとは、追々組頭ニも可被召仕身柄之事故、是茂右之通心得、習練いたし候様　御沙汰有之、夫より組頭中、老骨を折、炎暑無厭、稽古相勤り、七月末、於磯　御覧被遊候、其節は余程能相揃ひ

御褒美之御詞共有之、相済ニ而御酒・御肴共被下候、段々難有事ニ而御座候由、私式詰等は無之候、誠ニ御内輪之事ニ而御座候由、

一右組頭中之調練　御覧以前、上下諸士之中ニ而四拾八人一備手数、於外御庭　御覧可被遊旨、五月初比より御内沙汰有之候処、六月廿五日　御覧可被遊候間、四時より外御庭江罷出候様、三原藤五郎を以御達シ相成、諸士は上達之者四拾八九人取しらへ相成候処、至而見事ニ揃ひ申候、左候而当日は拙者并式部殿、其外御軍賦役茂申談罷出候様承知仕、其通相揃候処、四ツ過御出有之、御馬見所へ被為入候節、御馬場内御通行ニ付、其節一統　御通掛、御目見仕候、左候而御馬場末ニ相詰居候処、御小姓を以、拙者并式部殿ハ直ニ　御馬見所江罷出候様承知仕、罷出候処、御座末ニ而御目見、直ニ相詰候処、御側役堅山武兵衛より被相達、其儘御座末江両人並ひ相詰候処、御前より内蔵ハ今三尺進ミ候様、御直々承知仕、難有相進ミ候処、式部殿も順々進ミ被詰候、

御前より私席は中ニ横畳三帖明居、四帖目ニ相詰候間、壱間三尺　御間タ有之候、左候而拾五人一行ニ而、拾二手数相初り候、是ハ鉄筒打放シ之手数ニ而、先ツ新板ニ而弓之巻はら掛りなり、

右相済、引続迦農（カノン）弐挺是は五百目石火矢なり　押出し、静発・急発

之打方作法有之、引続四拾八人一備押出し、彼是引廻候、相応備配り之手数有之、是限りニ而一首尾相済候、左候処余程致習練候由相見得、能揃ふたるとの　御沙汰共有之、難有次第御座候、左候而ヒストン筒、此内より御軍役御手当ニ茂被召加、又は鉄砲師家之面々江茂拝領被仰付、勿論御持筒ニ茂出来居候、右御持筒之内二挺程御出させ、誰そへため方之手数為致候様、成田正右衛門江達候様、井上正太郎江（御小納戸役也）御沙汰有之、成田彦十郎・木脇賀左衛門罷出、正右衛門小頭ニ而打方之致手数候、且又此節御持下り被遊候阿蘭陀鞍、御馬江仕掛牽出候様、正太郎江

御沙汰有之、御馬之栗毛ニ仕掛、牽出し参候処、馬上筒持方、右之鞍江仕合せ有之所共分而御咄し有之、初而拝見仕候、扨々無造作成仕立物ニ而候、左候而誰そへ乗せ候様、又々御沙汰ニ而正太郎より賀左衛門江乗せ可申との事ニ而、則賀左衛門御前ニ而打乗り、御馬場三四返往来いたし候処、手綱二通り仕掛有之一通りハ進め候、仕掛一通りハ引留候仕掛ニ而候故、留方之手数共いたし候得は、至極能留り候、右等之事共相備候処、右鞍ニ而野戦砲牽せ候賦り者ニ候間、右御馬ニ引せ試ニ候様に

御沙汰有之、最前牽出し候五百目筒を可成ニ牽せ候得は、兎哉角壱疋之力ニ而引応し候、然は是ハ間ニ合之事故、上都合ニは無之候、右旁相済候所ニ而、我々御礼仕り、罷下り候時刻九ツ過ニ而候、右詰居候内、式部殿へハ砲術方之

御沙汰共有之候、拙者ハ昨今故欤、何之　御沙汰茂無之候、拙者共は此内は武蔵之（御詞、武蔵がとの御意ニ而は屹と無之候、慥ニ武蔵のと有之候）詠草を見てあれは誠ニ珍らしひ、外ニはなひのと御意有之候付、先度御覧ニ奉入候丈ニ而、外ニは忠元連歌之亀相成書留共所持仕居候趣申上候処、詰居候竪山江茂、あれそ見候哉、幽齊之点ハ余程珍らしひ事なとゝ

御咄共有之、段々難有次第誠ニ恐入奉存候、御同慶可被成候、右旁相済　御入之節茂最初之通り御馬場内江罷出　御目見仕候、左候而

御入後、御小納戸山田壮右衛門を以、拙者并式部殿江

ハ御菓子頂戴被仰付候ねり羊かん五切、干菓子五ツ、外ニ惣勢之内江、町田圖書・嶋津權五郎罷出被居候処、是も御目ニ付候由ニ而、跡より拙者共同様御菓子頂戴被仰付候、且又我々初一統江西瓜被下候間、我々ハ右之御馬見所之引続御茶屋ニ而頂戴仕候、惣勢は衆留りニ而被下候、且又御台所仕出し之御賄一統江被下候、都而相済候ハ八ツ時ニ而、我々退出は丁度御殿退出之衆同刻ニ而候、誠ニ今日　御前近くニ被召出候儀、別而難有次第、是迄式部殿ハ長々当務も相勤、調練等茂度々有之候得共、右次第　御前江被召出御沙汰共ニ及候事ハ、終無之、誠ニ以難有次第と、何れも奉存候、尤拙者共も都而平服ニ而罷出候、　御前はさらし空色・桐之頭御紋付、御袴ハ島さらしらしき麁相成を被遊居候、

右ニ付、翌廿六日改服ニ而罷出、御近習江罷通、御側役武兵衛・御小納戸壯右衛門江相付、昨日之御礼共申上置候、

於磯御茶屋下新製大砲共試打、其外色々之打方共少々ツ、被仰付候節なと、表方之者ニ而も被召列　御直々御沙汰有之、御答も直々申上候程之事共毎々有之、何れも難有かり罷在事共御座候由、

一右通組頭なとへ御沙汰相成候時分より、御小姓なと、或ハ御側向勤之書役等迄茂、都而於外御庭、釼筒ため方之稽古被仰付　御直々御指南迄も被成下候由、御小姓なと炎天ニハ余程之太儀ニ而、暑邪当り共有之由之咄迄茂承居候処、弥其通ニ而、夏分ニ相成候処、猶又ひとく御沙汰被遊、左候而八月六日於天保山、御備組調練　御覧有之、其節は拙者儀御太鼓役、且は惣頭取之晴立たる行軍之後、殿役相勤候賦之所、前々日四日昼時分より、璞心院癪気やら暑当りやら色々取合候而気絶いたし、則より引付強、暫時ハ生死之境ニ相見得、大心配いたし、朝稻三益・山之城坦道、針科渡瀬幽察西郷幽泉なと打寄、療治ニ而、無程つりハ止候得共、何分大変ニ付、謙齊迄も呼付候得共、夜分ニ成候処、余程宜敷候故、右之医師も追々引取相成候、然共右程之事ニ付、拙者当病之筋を以不罷出、尤いまた看病人手数ニ及候時節故、次郎四郎迄も当病之筋ニ而不罷

出候、然共、右之病人は一旦之事ニ而、追々順快不日ニ元気等何も常体ニ罷成候間、少も御懸念被成間敷候事、

一御発駕後相成候処、又々砲術稽古方出席人以前之ことく、諸士も何となく少人数相成、当分ハ至而さひしくちと気之毒ニ存申事ニ御座候、

一御備組人数賦ニ付而は、此内早く御手当相成、諸向江茂被仰渡、最早調練も有之事候得共、諸御役場・諸郷等江出陣・滞陣等之御手当・沙汰いまた壱ヶ条も仰渡不相成、此内伺ニ相成居候由之処、御発駕前頃御差図相成、尚亦右之取しらへ御発駕後取付相成、只今も田中仁右衛門・野元三左衛門・中野織右衛門頭取ニ而、取しらへ有之、拙者も相談ニ加り、折角吟味ニ御座候、乍去最早治定掛候付、追々諸御役場江仰渡可相成哉と存申候、

一安田助左衛門并書役岩元清藏事ハ、御発駕前不時ニ江戸江御用有之、出府被仰付、九月十四日頃出立候、是以御軍役御手当取しらへ方ニ而可有之と存申候、乍然、来夏比迄も滞府可相成哉と、心賦いたし候事ニ御座候、

一松岡十太夫事、八月初御軍賦役被仰付、来春大島江渡海、税所七郎右衛門江交代被仰付候、是は金堀り方之御内用被仰付候訳ニ御座候、

一伊地知小十郎御記録奉行江御役替、当日野村彦兵衛江御軍賦役被仰付、其後坂元彦五郎ニ茂御軍賦役被仰付候、

一右次第、防禦之儀ニ付、大砲鋳製・銃薬製法等ハ勿論、御備組等之事共、段々御工夫被遊、八月中旬ニハ犬追物場江御備組、大備人形ニ而立方被仰付、御籏印備等迄も、都而無残所御備立ニ而、諸御役人等迄も拝見被仰付、少も御秘事共ハ無之、一統奉感伏候、基何欤近年中佛朗西等渡来、通商等之儀を是非相開らき度存念有之趣、追々相聞得候哉　心辺ニ而も閣老方御心配之向ニ候由、当夏は長崎江甲比丹両人ふと渡来候由、是も通商一件ニ而候哉と評判承候、就而は、何分江戸表第一之事故、安田なと出府被仰付候事ニ而は有之間敷哉、爰元も少しハ心せきの事ニ而候、乍去又

考候得は、太平之軍ニ而はいつを期とすへきもなく、矢張り琉球同様、一年過、二年過、三年過させ候外、手便有之間敷、左候得は、右等之口談ニ而相応之年数も過可申欤も難計、詰る所、日本之難渋も可相成候得は、先ツ急成事も有之間敷、心安き軍ニは有之間敷哉と、下手落着ニ罷在候、

一拙者、今般之転勤御書面之通、御太鼓役は勿論、御軍役御手当向都而致差引、或御出馬御供等之儀迄、段々被仰付候次第、格別成勤場ニ而、冥加之程難有奉存候、然共得と及愚案候処、右は看板ニ而、内実は琉球逗留唄人方掛被仰付御趣意欤と奉察候、右ニ付而は、拙者事乍無調法者、組頭も十三ヶ年相勤、其内御用人兼務八ヶ年相勤、御用人座ニ而臨時之御用掛、過半拙者江被仰付、別而難有奉存、折角致精勤候処、寺社奉行江昇進、其上即日より御内用掛等被仰付、難有相勤居、九ヶ年目当御役ニ而、勘定奉行勤被仰付、不日ニ給地高申受、取調方江被掛置、屯(ママ)ひ御用筋随分片付候様有之候処、此節当務被仰付、殊更琉球渡海等、旁難題の勤方被仰付、不容易御用筋ニ而候、然とも御軍役方之儀、平日は外見不相応、別而事少ナニ而、専ら剱銃調練方ニ付、組中諸士稽古等之上、差引共いたし候儀ニ而、先組頭同様之勤事のミニ候、勿論惣頭取元祖ハ海老原ニ而、其次得能彦左衛門、夫より川上家組頭より兼務被仰付、其節ハ先祖左近将監久朗、或は久辰・久國等武功之家柄ニ而、思召を以被仰付候趣共相見得候、段々御取持相成居候処、此節拙者江被仰付、尚亦惣頭取之勤職重被引揚候筋欤とも奉存候得共、琉球江被遣候一件有之、於此儀ハ基(ママ)在番よりも重き方之者を英人方一篇被遣置候御趣意之由奉承知候、乍去現在川上家繰廻、且三四年以前、嶋津登殿為守衛被差渡、居形りニ在番迄被仰付、当夏上帆有之、右ニ付何分在番も同位下りて相見得候、拙者ニ茂爰元平日は勿論、渡海之上も先番頭之場ニ相勤候様奉存候、余人ハ追々寺勘之間江昇進社(ここそ)被仰付候処、打替りたる転勤ニ而、何分内心不案罷在、別而疑惑之事ニ付、四月晦日、高田氏・岩下所江取合相催、内存之趣亭主共ニ咄合候処、是も拙者同

意ニ而、得と工夫可致と深く汲受有之、至而頼母敷存居候、御察も可有之候、竪山ハ本田席、山口ハ当髙田尚五郎妻彼より縁引、尤も何れも同役同前之面々故、是は随分道も分り可申哉と楽居候、左候而伊地知江六月末七月ニ成、そろ〳〵内存之意味咄合候処、是も同意ニ而、英人一件ハ当分至而　御配慮ニハ候得共、頭目猿印方吟味欤も難計、勿論下より是をと差出候上、故障無之候ハ、、随分夫こそ被命賦り欤、左候得ハ初め見立られ候者か迷惑と一笑いたし、是も随分汲取被申候ニ付、折角頼置候、又転勤之当日、大番頭座江吹聴ニ参候処、吉利之挨拶ニ色々見立らる候男かなと雑談共承り、誠ニ金言と奉存候、左候而其後髙田家ハ催促可致訳ニ無之、小十郎ハ折々見得候節ニ咄合せ、亦拙者及工夫候処、末川家此度御供ニ而出府ニ付、江戸表ニ而見立給候ハ、、品能方之儀も可有之、爰元ニ而は枡形と云関所有之、何分通抜候儀出来間敷、ヶ様申茂、或時　当君近侍之内江拙者儀を被為聞ニ付、相成り之儀被申上候所、誰ニ聞而も其通之事ニ候、独り頭目能ふ云いぬとありしよし、密ニ及承居候、是等を以御推察可給候、近侍之名も承候得共忘れ申候、又或時、近隣之先太夫も誰江欤密話之砌、拙者儀髙輪辺如何之御都合ニ候哉、先之坊主か何と欤申上置たる事共ハ有間敷哉と、粗咄申され候儀も有之候由、是等之儀も此節分而探り求め候処、聞得候趣ニ御座候、乍然当分之事ハ左様ニ無之、別而難有、尊慮之由密ニ相伺ひ、只身ニ余り奉存居候事ニ御座候、又定かニハ難申候得共、但馬殿ハ無申迄も、或ハ壹岐殿、或ハ隣之大監察なと、いとおしまれ候哉ニも承り、至極当時人柄無多事思召候哉ニ伺ひ奉恐入事共も御座候、左候而、小十郎も末川家之儀はちと苦痛かり被申候哉、其内三原ハ心安キ方ニ付、彼之方江能糸口有之候節、拙者儀難有御吟味ニハ可有之候得共、是迄勘定所屯御用も片付、尤前方より之勤功も有之候ニ付、最早品能儀ニ而候、到来可致なと客人挨拶なと承事候処、案外之勤方殊更遠海罷渡、先キ長く繰廻なと被仰付候付而は、家内老母とも別而込りニ御座候趣なと、程能咄被致候所、成程其通

ニも可有之、尤之事候得共、
御前向ハ左様之訳ニ不相見得、至而宜敷思召之事ニ而有之哉ニ奉伺候との事共、度々咄し有之候ニ付、何分今暫心永く相勤居候様申聞せられ候事共ニ御座候、乍去御軍役方勤場ハ御家老座書役所江相詰、拙者共書役迚茂不罷居、何れ書役衆を御頭同様致尊敬、御用筋も御書面之違(ママ)、何も申承事も無之、都而御家老衆御取扱之場所故、混と日勤いたし候得共、何分客人之心持ニ而罷在、別而不進立、段々思案ニ及候処、何れ足痛等申立、当暮欤来春より御下国前後ニ掛、退役と致決着外有之間敷相考、同心其所ニ而も無之候得共、先ッ決着之趣意を以、小十郎江も相咄候処、気之毒之顔色ニ而ハ候得共、差而何分不被申候間、其通心得居給候様申置、八月十五日夜、迫水孫次郎父子并御養息次郎九郎殿相招候処、迫水親父ハ差支ニ而断有之、孫次郎と次郎九郎被参候付、此節之儀は勿論、以前より之次第共細々申述、存慮之程も委敷相吐、全体無調法者故、当然之賦ニ茂候得共、意外之不都合致到来、毎々不実之汚名共蒙り、致迷惑居候所より極々無是非、ヶ様之致決心候、右ニ付而ハ孫次郎事、当務ニ而も有之、此節　御供ニ而出立之事ニ付而は、旅先キニ而承り、何様之時宜より右等之了管(見)起り候哉と疑も可有之ニ付、内存之処聞置被申候様申込、且ハ父子相談いたし給候様、左候而存寄有之候ハヽ、可承旨も相咄候処、両人共案外之趣共承り、何共即答も不出来由被申候、此儀次郎九郎殿へも今以咄不申候へ共、拙者内存ハ右通致相談候ハヽとふそ外道江之歩ミ様、孫次郎なとハ存付も可有之、底意ニ而候処、翌々日善左衛門見廻ニ而、前件之趣承り、誠ニ無余儀成行、拙者之胸中相察候処、実ニ左茂可相考事候得共、急度振り返り、脇目より評議ニ及候ハヽ、難海苦労之渡海ニ而臆病起り候と申外ハ有之間敷、何程慥かニ而も右等之評議を受候而は、家ニ付而も恥ヶ敷事候故、此儀は思ひ止り、身命苦痛ハ捨置、君命之重キを考、何様之場江相勤共、何国江渡海いたすとも一往君命ニ応し候上、何分共いたし様ハ有之間敷哉、於其儀ハ難海浮沈之場ニ而急度難勧事

候得共、臣子之大義を以て異見申聞候との事故、是ハ一言も無之、別而尤之至、拙者も其儀不存付とも無之候得共、先ハ及相談候間、其通承候上は愚存屹と思止り可申、安心いたし給候様申置候、右之時分ハ御発駕程近く相成、仕官之面々旅立差掛候付、時宜ニ寄候而は御内意申込場も可有之事ニ付、市成若代見廻之折緩々引留、前文之趣共相咄候処、一往ハ残多事なとゝ被申候得共、詰る所無拠考故、とふも押止かたき旨被申候付、其儀ならハ都合を以御親父江咄合給候様申込置候処、早速親子咄有之候由、然処例之卒忽到来甚趣意違ニ受取有之、剰末川家へも同断趣意違之咄合共被致給候由、左候得は彼之大夫も夫ハ何様之心得違やら、決而左様考間敷、当分上向之御都合至極之事ニ而、此度も別而難有御吟味之処より被命候事共申聞、止め置被成候へかしと、先キ方被申候趣を以、主水殿より承り、勿論趣意違相成候事共、跡更申開キも面働と存、又善左衛門申談候一件も相決居候故、其通之尊慮ニ候ハ、、急度愚存ハ思ひ止り可申旨屹と返答申切置候、

一右等之往返いたし候、前以高田の返答下候て承候趣ハ、段々及工夫、或時至而宜敷糸口有之、堅山江咄合候処、此節之御吟味地見す候て人撰ニ及ひ、尤拙者儀、疾ニ無理成御取扱ニハ、何れも存付たる事候得共、外ニ人柄無之、右之次第ニ候間、何分一往ハ気張り候様、左候ハ、決して品能可相成、此涯動き候処とふも難出来候、乍去何と欤　御沙汰共有之候ハ、、可成力を添可申、嘸家内共ハ彼是案外茂可有之候得共、無拠御吟味有之、決而難有筋ニ可有之旨、丁寧成口気ニ而存外上都合之事故、此上は安心いたし候様、左候ハ、開運可致と承候間、是も別而世話ニ預り候趣共致挨拶置候、此一筋ニ而太体其雲之上も押計られ候事ニ而、実ニ安心いたし候、乍去此一通りニ而も不心済所有之、猶亦岩下分別を以仙波市左衛門江咄合、右仙波より山田壮右衛門江咄合いたし給候処、手段可致、左候ハ、運気開らけ立候所ニも可有之、深切之存付有之、任其意置候処、仙波も能キ受取ニ而、八月十八日、山田江得と咄合被致候処、山田案外之様子ニ而、是は気欝共いた

す事ニ而有之間敷、江戸表ニ而も兼而伺ひ居候所、別而宜敷被思召候人柄之事ニ而、此節も第一左様之所より被命候様相見得候間、折角致精勤罷在候様、右様之考ハ以之外之事と存候旨可申聞置様、仙波江は咄合置、同日七後為暇乞、拙宅江山田見廻有之、右之趣共仙波より承り、案外之趣一通りハ仙波江も申聞置候得共、尚亦直面ニ申聞置候、拙者事ニ付而は、兼而奉伺居候事茂有之候間、決而気欝共不致、折角致精勤候様有之度、左候ハヽ、屹と難有時宜も可有之御都合ニ奉存候、此段ハ無疑承置呉候様、尤去夏御文書共拝見ニ参候茂、専ら諸事見聞之為ニ為参事候、勿論形行被為聞候ニ付、家作等迄も何篇見聞之通申上置候、折々　尊君も伺居候故、今一両年気長く相心得候様申兼候得共、何欠少し朱点有之哉ニ相見得居候、此所至極御込之様ニも奉伺居候、夫故当務之所、動キ立之初と致推察候事共有之由、細々懇切之儀承り候得共、何分雲之上之事ニ而、紙上等ニ申顕し難く、此等之端を以、只々御想察被成、御同慶可給候、朱点と申ハ貴所同様門徒之内ニ罷成居候様致推察候、然共此人之懇意ニ而頓と致安心、是より目を覚し寝食を心よくいたし、実ニ精勤之心得ニ罷成候、此事迫水父子江は少し洩し置安心為致置候、返々も山田之懇意ハ家内ニさへ洩し難き意味ニ御座候、此一儀ニ而、実ニ胸欝発散いたし、一入貴所之御寿命迄も奉祈事ニ御座候、是非今一度得貴面、心事御互ニ申尽度御座候間、御保護第一ニ存申候、返々茂此一首尾大心配ニ及候得共、頓と無残所伺得候而落着致安心、今更愚存か至極之良策と為罷成仕合ニ御座候、

右は当務転勤之成行御吹聴、且は及心配候次第為御納得申越候、誠ニ差急キ相認、文茂不束ニ可有之候得共、得と御覧被下、左候而段々内密等敷儀、且ハ愚意之次第共御座候間、御覧之後ハ御焼捨奉頼候、いまた書外意味海山有之候得共不能筆頭、先々大意迄如斯御座候、此等を以、尚御推計奉希候、以上、

〔朱書〕「嘉永五年」

子十一月七日認　　久仰

伯剛老

尚々為御見合左之通書添申候、

御軍役方

惣頭取　　海老原宗之丞

右之通被　仰付候、左候而此節御軍役方被召建候ニ付、取調は勿論、御手当向之儀、都而致差引、右江相拘候御用は向々より申出候儀も何篇致吟味、時々可奉伺、且御出馬御供、又は　御名代等被差出候節は、可被召付候旨、以　思召被　仰付候、此旨向々江可申渡候、

弘化四年未

十月朔日　　笑左衞門

御軍役方

惣頭取　　得能彦左衞門

右之通被　仰付候、左候而御軍役方御手当向之儀は勿論、右江相拘候御用は、向々より申出候儀茂何篇致吟味、時々可奉伺、且

御出馬御供、又者　御名代等被差出候節は可被召付旨、以　思召被　仰付候、此旨向々江可申渡候、

嘉永元年申

八月十五日　　笑左衞門

御流儀

砲術方頭取　　得能彦左衞門

右は先年以　思召御流儀被召建、此節海岸防禦等之儀、専火器被相備候ニ付而は、砲術方猶以御手を被付、追々御領内一統致御入門、多人数ニ茂相成候付、以思召右之通被仰付候条、弥以　御城下は勿論諸郷・私領迄茂御手当行届候様可致指揮候、且大砲鋳製并右江相拘候用具・鋼筒調方等、多端之事候ニ付、万端気を付、海老原宗之丞申談、綿密致取扱候様被　仰付候条可申渡候

右同

八月十五日　　笑左衞門

得能彦左衞門

右は御流儀砲術御入門之面々、誓詞并夫々引渡等之節

は、時々成田正右衞門より承届、海老原宗之丞申談、相詰候様被仰付候条可申渡候、

右同

八月十五日　　笑左衞門

御軍役方

一惣頭取兼務

一御近習通

川上式部

右は先祖川上將監久朗事、永禄年鑑、（島津貫久）大中様菱刈御征伐（島津義弘）松齢様別而御危難之砌、天晴成遂戦忠、其子將監久辰、其子源次郎久國父子共、文禄年鑑松齢様朝鮮御渡海之御供仕、種々之抽武功候家柄付、以　思召当御役ニ而、右之通被仰付、御軍役方相図之御太鼓役を茂兼相勤候様被仰付、御軍役方江茂相勤候様被仰付候、

嘉永二年酉

四月九日　　將曹

川上式部

右当御役ニ而御軍役方惣頭取兼務被仰付候、付而は御軍役御手当向之儀は都而致差引、右江相拘候御用向は、向々より申出候儀も何篇致吟味、時々可得差図候、且御出馬御供又は　御名代等被差出候節は、依時宜可被召付旨被仰付候条、此旨申渡、可承向江茂可申渡候、

嘉永二年酉

四月十五日　　近江

〔朱書〕「右之通彌太右衞門時升江申越候事」

〔朱書〕「嘉永五年子也」

子十一月七日御認之尊簡相達、奉拝誦、一々大切之儀御洩被下、奉対尊顔候よりハ却而精微ニ而、腹心ニ徹し難有奉存候、御細簡一々御答も難申上、其内要領之ケ条一二条、私腹臓之底を敲き申上候得は、御尊覧被下候而、跡ハ早々御焼捨可被下御願申上候、

一迫水御異見申上候一条、具ニ拝聴、至極尤之儀、老夫別而同意仕候、誠ニ此義は迫水至極之直言ニ而、容易ニ脇よりは申上兼儀御座候、此一条琉球一件最初次郎

九郎より申越、引続伊地知三之助よりも知らせ候而、早く承居、其跡ニ尊簡相達読掛候得は、御腹臓之趣次郎九郎・孫次郎被召呼、御咄為有之段相見得、直々其時心ニ徹し候而、此者留之間ハ中々孫次郎・次郎九郎分量ニ而了簡も及付申間敷、たとへ及付候而も、御面前申上候儀は叶間敷、恨らくハ野老籠居候ハヽ、御即答ニ直言可申上候と残念ニ乍存、跡続掛候得は、親迫水罷出為申上趣逐一被仰下、実ニ手を打候而、迫水を感心仕、私直言を考寄候も外之儀ニ而は無之、夫迄之事御座候付、頓と安心仕候、誠ニ此儀万々ニ一ツ御渡海之儀共相成候得は、第一人之生死之境、第二は前後之入費、第三御家内御一統様思召ニも拘り、右之鉄門関を打破り、御請之処は能々波を破り不申候而は、難申処ニ候、迫水も能々気張り為申筈ニ相考申候、

一此一条迫水直言ニ而、外ニ申上義も全無御座候、乍其上老腐儒之忘慮(妄カ)ニ而、例之下手理屈を申候は、人臣君ニ事ル道二ツ有之、義を立ル之臣あり、身を致すの臣あり、義を立る之臣ハ越之范蠡・漢之張良抔之如キ、万一君上ニ不叶義有之節は官禄を去り、身を潔し行を穢さす終り候、身を致ス之臣ハ楚之屈原・宋之文天祥抔之如き、たとへ君は何様之儀有之候而茂、退き候心無之、身を社稷ニ抛チ、生死を国家ニ任せ、断然と其前ニ終り候ぞ、身を致之臣ニ而候、たとへに申は近比嗚呼がましく可笑候得共、先年大坂在勤之砌、外舅米良彦市頻りニ勧候而、能加減ニ身を退不申候得は、要路之地ハ長く居かたく、身を全するの道ニあらすと、毎々致異見候得共、私承引不仕、彦市は本米良家之族類ニ而、御家之御厚恩ニ相成居候得共、是は本地家より羈旅之臣ニ而候得は、義之不叶時は官禄を捨、引入候茂当然、私ニハ霊社は申ニ不及、忠増以来之譜代身を社稷ニ抛チ不申候而不叶儀、夫を吾身の罪科を畏れ退き候儀は決して理ニ叶すと申切り、致返答候得は、彦市之狂夫も此返答ニ服し、其後右之異見ハ不仕候、私其通之覚悟故、御勧め申上候義、矢張り其通之事ニ而、勿論要路ニ出、夫々之道を行候は、第一望む所ニ御座候得共、是ハ命運之矢数有之事ニ而、迚茂人力ニ而ハ

及不申、其次は貴賤高下ニ拘らす、当り掛之処を逍遙不迫として当然を勤候か、一分相当之事相考申候、申迄も無之事候得共、此節尊公様御承知一件之儀定而世間之人も案外ニ存、目を側て怪ミ候は御当地之風景見る様ニ御座候、其所江只御平気ニ御勤御座候ハ、、一入奥深き所相見得可申候、勿論御渡海抔成立候儀ハ御明君様之御賢慮、十が十其儀ニハ及間敷、恐察候得共、千万ニ一自然其儀ニ成立候ハ、、其所こそ霊社之御神慮ニ任せ、御決断候ハ、、忠信波濤を渡ると、古人も申而候得は、何も御如在は有之間敷奉存候、

一此節御承知之一件、最初次郎九郎申越候節、私ニも風と考ニハ丁度思召之通案外之儀ニ付、何分時世とハ相合不申候故、イツソ御引有之方なと如何可有之哉共考寄申候、然共何れ此義は不軽次第之事候得は、大義を以決断可仕儀と例之癖、意地出しやばり申候付、前条申上通之決断ニ御座候、扨又右ニ付山田・竪山之密話ニ而、雲之上之模様も相分り申候得は、此上ニくた〳〵敷長口上を申上も如何敷、且又数々先見等敷申上も恥入候へ共、最初承知之時、老夫も枕を割考申候は、右之条善悪之二ツ可有之、先ツ悪之方ハ門徒之朱点も勿論之事候得共、夫ハ扨置、第一ハ頭目ニ尊公様をやかましく存し、先ヶ様之人柄は遠のき候方可宜、胸中ニ而無御拠人撰ニ事寄せ遠さけ候手段可有之哉、此義和漢共ニ先例多々有之事ニ候、朱点之方ハ格別之儀有之候ハ、、真先キニ頭押し可参候得共、不及其儀候は、御身分ニ疵付、遠さけ候筋も難出来候処よりして、上之方へ射上ヶ候哉と愚案仕、又善之方は丁と山田之洩し候様ニ朱点少し有之、其所消兼候故御明君様之思召ニ先ツ遠き所より御引立有之候儀かとも恐察仕、此二ヶ条何分雲之上ハ難計、夫は兎も角も、此方ハ一箇之節義を尽し候迄之事故、何れの筋ニ而候も無御屈心、只平気ニ被為成御座、善悪之応報ハ何れ天気ニ御任せ肝心奉存候、

一此次ニ又々例之癖言を一条申上候、是は猶又老耄之忘(妄)談ニ而、勿論它之人なとゝ半句も難述義、尊公様ニ限り申上事候間、只々兵六か夢物語と被思召上、御一笑

御一覧可被下候、愚老考ニ此節之大難、実ニ霊社ニ深き御神慮且又御加護御座候と、独感佩罷在候儀は、先第一此節一乱尊公様ニも世上之人望ハ至極相付居候付、万々一前広より御隣大監察抔之様ニ、上之御見込共被為在候ハ、誠ニ大変候処、此義を御免れ候儀は、是ハ誰人考候而も其通之事、夫々私別段之考ハ少シ朱点ニ懸り候事、是茂霊社之御神慮共ニ而ハ無之哉、其儀無之候而、世上之望候様ニ当分三公之職中ニ而も御備り居御座候ハ、、詰構は差寄為申事候得共、世上ニ愚老か如きの偏頗者も段々有之、一方よりハ詰構之計も評判仕間敷、少し朱点ニ懸り候而、其所を御免れ、文明之開け立候砌ニ御登瀛候ハ、、夫こそ真之竜驤とも可申哉、又其上ニ一条之老耄之自賛を申述候、今般七拾余歳之老翁が、壮年之衆ニ肩を并べ、竄流之厳科を受、囹圄縲絏之見苦敷禁めまて蒙り、人ニ面目も無之事候得共、是も霊社之神君かと愚案仕儀御座候、其訳ハ此度之機密ニ我々嫡末共ニ災殃を免れ候ハ、無此上幸之事ニハ候得共、扨当

御明君様之御代をしろしめし、霊社の末孫申而罷出候時ニ、両人共ニ全ク無疵ニ而罷出候半ニ、さりとハ残念之事様有之候、出火之鎮りたる跡ニ火羽織の鮮に立派なるハ火之働きハ無之人と差知れ、其節ハ焼焦れたる羽織ニ髪毛なとの焮縮（ヤケチヽミ）たるこそ勇気敷相見得候ものニ付、霊社之神慮も御嫡家ハ薄手ニ而、全勝を御取治め、末家之彌太右衛門は死地ニ投し、竄流之難苦ニ遇候を、聖人を譬ニ申も不届成事なから、段々ニ三仁微子は去ル比干は死すと死生共ニ仁の字をゆるさす候ニ些似寄、尊公様ニハ家を全して、新納家の孝子彌太右衛門ハ節を尽して新納家の忠臣と独り心ニ自負仕居候、ケ様之老耄たばけ、神慮も如何と恐多くハ候得共、ケ様ニ落着仕居候得ハ、配所之艱難辛苦も少しも厭ひ申心無之候、凡天運合数之論は古今やかましきものニ而、段々論も有之事候得共、此節抔之やうニ現在事ニ臨ミ候得共、先年近き所ニ而致落着候而、本心を動かし不申が、臨時之明決と存し、霊社の神慮も難計儀なから、あたらすとも左のミ遠くは有之間敷、押究て安心仕居

候故、此席ニ御一笑申上候、
右旁不入事永き空論候得共、心一盃不申上候而は、主意も申砕きかたく、出ほうたい申上候間、穴賢、兼而罷出候人たりとも、此義ハ御洩しなく、即時ニ御焼捨御願申上候、猶余は別紙ニ申上候、敬白、

〔朱書〕「嘉永六年丑」

三月廿五日　　時升誠惶

内藏様

御手元江

一琉球渡海被仰付置候川上式部・田中源五左衛門・田中治右衛門、八月廿一日乗船ニ付、前日八ツ後、式部事ハ外御庭
御茶屋江被為　召、段々御沙汰
被為　在、且御反物并御煮染等迄、於
御前被成下候由、源五左衛門事は御近習ニ而、御側役を以　御沙汰之趣被為　在、晒壱疋欵拝領被仰付由也、
左候而右人数九月廿三日前之濱出帆有之候事、

一子十二月廿九日八ツ後、島津大膳殿見廻ニ而、昨日新納主税を以、悴次郎四郎定火消御断之内意承候、付而は随分相含居宜敷都合ニ世話可致旨、返答申置候得共、其後ちと吉相相起り候ニ付、今暫相備候へかし、左候へは自然と上向より御免ニ相成都合ニ候半、左候得は無其上儀ニ候旨内分致承知恐入候儀ニ御座候旨申置候尤来三月比ニも成り候ハヽ、可相分旨も粗咄之由承候付、乍内分致大慶罷在候事、

一嘉永六年癸丑
正月元日四ツ前出勤、毎之通謁御家老・大番頭、一列ニ而年頭之御祝儀申上候、左候而御内証之御祝儀も御側役江相付、例之通申上候而、四ツ半時分退出、
一退出より福ヶ迫諏方社并興国寺・深固院・大興寺等江墓参、尤上方諸所致年礼、七ツ過比帰宅、
一帰宅後、家内中規式并家来共江通り盃共差遣候儀、例之通取はやし候事、

一正月二日、不及出勤候間、四ツ後より出宅、窪田諏方社并南林寺并同山中墓参等いたし、下方諸所年礼相廻り、七ツ後帰宅、

一今晩蔵披祝用頼道嶋源五郎・林仲之丞被参、役人牧田五右衛門は年内より病気ニ而引入居候ニ付、寄役人嶋元徳右衛門召出、例之通致規式候事、

一正月四日、乙名祝ひ毎之通賑々敷致候事、

一正月五日、地頭所大姶良并預所福山役々、年頭為祝儀見廻候間、毎之通召出盃共遣候、左候而於役所吸物・酒・飯迄差出候、取次林庄之助并福山取次大番頭座書役神宮司筑左衛門被参取持也、

一正月六日、御流儀炮術初ニ付、稽古所江五ツ時分より出席、御家老豊後殿・多門殿御出席、其外御役々毎之通御城下諸郷取合、都而之人数千七十人余有之、八ツ過相済候間、追々引取候事、

一正月九日

太守様(島津斉彬)御事旧臘十六日、従四位上中将御任官被為蒙仰候段、御到来并

若殿様旧臘五日初而御宮参首尾能被為　整候段御到来

両条之御祝儀今日有之、謁御家老申上候、尤御内証之御祝儀も毎之通申上候、

一正月十二日、大門口御台場成就相成、今日豊後殿見分被成候間、御軍役方役ニも出席、拙者も相詰候付、四ツ時後致出席暫時ニ而相済候事、

一正月廿二日、拙宅納戸辺住居、当分ニ而ハ差支候儀共有之、八帖并六帖二間丈ケは引直し少々作り次且又取付候所廊下成敷込等之儀共いたし度、大工川邊吉之助相頼ミ、今日吉辰ニ付地割縄張共いたし旁吟味いたし候、尤今日より引続打立候手当ニ而候事、

一正月廿六日、長崎御附人大迫源七事、当分在勤之処、

去ル十九日夜九ツ時分ニ而も候哉、寝所江物音いたし候ニ付、家来共差越見候処、燈火も消居ニ付燭台等持越見候得は、面体へ弐ケ所疵負居候而、寝間より次之間迄参り倒れ居り、極々大切之様体ニ而、呼吸も絶々ニ付、折角致養生候へ共、暁相果候由、則翌廿日彼所書役溝口次兵衛急キ罷帰、今朝到着御届申出候由承候、右ニ付翌廿四日御裁許掛町田孫六・横目椛山彦五郎・肥後直二郎早々為御穿儀被差遣候由、且亦御附人奥四郎事も出崎被仰付、来ル廿九日出立ニ而差越候筈ニ候、尤源七寝所戸占(締)り等何も平常之通ニ而、不審之廉無之、存外之横死ニ候由、左候而御奉行所江は、其身癪気ニ而候哉、致自殺深手なから存命ニ付、罷帰致養生筈ニ付申出、極内分は現事之形行、兼而懇意ニ申合候御付人有之、其向江書役等より致示談置候由也、

右源七母七十余歳ニ而達者ニ罷在之由、嫡子源五事当分奥御小姓弐拾余才、家内類中愁傷当惑之至承及候、拙者も近隣殊更御軍役方ハ長崎江懸引事等多懇意之処、気之毒存候事共なり、同廿七日源七事長崎より夜前罷帰、今日親類より諸事御届申出、今晩より致葬式候、左候而嫡子源五事親病気之段到来之節、看病御暇為願出由候へとも、御免無之候処、同廿九日夜より書置いたし置、行衛(方)不相知候由、

口上覚

私共親類大迫源五事、昨夜四ツ時分より不罷居候ニ付、家内共相驚、私共江右趣申遣候ニ付、則差越形行篤と承届候上、家内相改申候処、親類名宛にて書付を以申残置候趣は、私事御存通之次第ニ而、何分夫形難罷居候ニ付、御役御断、又は御暇迄も御願立被下候様御願申上候処、其通御計被下、一日も難間延候間、不顧恐兎角親之相手難忍候ニ付、窃ニ他領江差越、是非本望相遂度致出立候、跡之儀は可然御取計給候様申残置致出立候形ニ相見得申候間、猶又追々尋方仕候へとも尋得不申候間此段御披露申上候、以上、

但源五家来巻木市郎兵衛不罷居候ニ付、決して召列候儀と存申候、

大迫源五親類

丑正月廿九日　　何　某
　　何かし

右之通披露有之候由及承、御当国前代未聞ニ可有之と存、書記候事、

一二月三日、霊社祭毎之通、社人有屋田信濃相頼、四ツ時分相勤候也、

一末家新納矢太右衛門嫡孫、二月三日出生之由、同月六日次郎九郎被参吹聴有之、左候而幼名之儀所望有之候ニ付、左之通取調遣候、

御名目録

元次郎

此節御男子誕生、誠ニ以目出度御儀、拙家よりも年来待居申候処、殊更霊社之祭日ニ御出生ニ而、旁吉兆之御事と致大慶候、依之御幼名

霊社御名之文字を頭ニいたし、当家并貴家ニ而も題目之次郎号取合、右之通相調致御祝授候、弥以天晴之御成人奉祈候、

二月九日　　内蔵
次郎九郎殿
　参

一二月十七日、加賀守忠清様弐百年御回忌被為当候ニ付、於泉徳寺御法事致執行筈候得共、当分無住ニ而成就寺より寺務旁相兼呉候、乍去此節は差支之儀有之ニ付、於爰元興国寺へ相頼、御法事致執行、御塔婆茂致供養候、尤殉死四人之霊も同様相祭候、尤興国寺江為供物料金子百疋・白米五升・蠟燭弐挺・仏木弐本前日差遣候、左候而当日塔婆は高樹院（新納久邑）様御墓所之前ニ建方いたし、尤拙者相詰居致執行度候へとも、其通ニ而は差支之儀有之、為代参次郎四郎差遣候、且拙宅御牌前江も役僧相頼、御霊膳差上、御回向をもいたし、勿論泉徳寺ニ而も後達而御法事いたし候様申遣置事、

一二月十九日、今日迄ニ而栖居替之方取付、廊下辺より八帖敷并裏之方湯殿・雪隠迄、半方ハ致首尾候付、明朝より畳敷付、半移りいたし、本之家之首尾方ニ取付

候手当ニ而候事、

一二月廿日、今朝より半方成就之所江埃心院様御道具とも取引移り候ニ付取込候、左候而昼時分より大工共本と家之首尾方ニ取付候事、

一二月廿一日、八ッ後伊東直左衞門見廻也、是は先頃より水引藍玉所江旅勤之処、内々無拠用向有之、御断ニ而一昨日罷帰り、今日御届等申出候迚、見廻也

大島与人
黍方掛
喜美盛

右は若年之砌致上国居候節、拙者実父式部相応之間召仕置候処、別而正道相仕候者ニ而御座候、其後去夏久々振致上国候処、畠山家之儀は都而家内打替り、其節之模様無之、知人は拙者老人程ニ而、十方(途)ニ暮候由、然処当分右通被仰付難有相勤居候へ共、追々は何とそ今少し品能被仰付候様、詰役交代等之節内願申込呉候様兼而承居候、尤島之時宜合も可有之儀ニ而、ヶ様之御内意別而如何敷候へとも、難黙止御頼申上候間、返々茂程能御聞取給候様、御申伝可被下儀奉頼候、

大島与人
龍　佐運

右之者も先年来畠山家江書面は勿論上国之節は致出入候者ニ御座候、子細は畠山家先祖之墓大島江有之、右之墓所掃除方等頼置候処、年来怠りなく始終深(親)切ニ致見廻呉候段承及居候処、近比はちと遠方江相勤居候様ニも承候、何とそ是茂追々は宿元模(最)寄ニ而も相勤候様有之候ハ、、尚又墓所見締等も行届呉候半と存申候間、宜敷様相含居給候様何卒御申伝候処奉頼候、

右は誠ニ御無心之儀ニ候へ共、無拠訳合ニ而難黙止、此節下島之代官中山甚五兵衞は御近隣之事故、不都合不相成様御咄合被成置給候儀ハ相叶申間敷哉、偏ニ奉頼候、以上、

二月廿二日　　新納内藏

吉川源右衞門

一二月廿四日、致出勤居候処、九ッ過左之通致承知候、
御用之儀候間、明廿五日四時可被罷出候、以上、

島津石見
島津豐後

二月廿四日
新納内藏殿

上包美濃折掛

嶋津石見
嶋津豐後

新納内藏殿

右之通封箱入付ニ而、於御軍役方致承知候ニ付、左之通御受書差出候事、
御用之儀候間明廿五日四時可罷出旨、被仰渡趣承知仕候、以上、

二月廿四日
新納内藏

島津石見様
島津豐後様

上包美濃折掛

島津豐後様

島津石見様
新納内藏

右之通致承知候得共、矢張八ッ迄相勤退出候事、
一帰宅後氏神様并御牌前江申上置、母上様江成行申上置候、用頼并兼而致出入候面々は承付、追々預見廻等候事、
一今日外ニ御用承知之人数

御勘定奉行
嶋津登殿

〔朱書〕「御軍役方惣頭取兼務江」

御船奉行ニ而
御家老座書役
一往心添
有馬次右衛門

〔朱書〕「御納戸奉行江」

御記録方見習
助教勤
宮内清之進

〔朱書〕「御記録方添役勤方是迄之通、」

右三人江御側より

御船奉行
平田伊兵衛

〔朱書〕「御鉄砲奉行ニ而勤方是迄之通」

御広敷番之頭
牧　正右衛門

〔朱書〕「道奉行江」

御軍役方御家老座書役
相良彌兵衛

〔朱書〕「唐船改御役勤方是迄之通」

右三人表より

御小姓与番頭
御用人兼務
新納主税

〔朱書〕「御勘定奉行江」

横目
有川休八

〔朱書〕「他行」

右弐人御勝手方より

一二月廿五日、曇夕方より細雨

今朝道嶋源五郎・林仲之丞父子・伊東直左衛門等早目より被参、世話ニ而候、左候而御殿江も致同道罷出候事、

一四ツ前登城、月番御用人末川久馬殿江相付、今日御用ニ付罷出候段御届申出給候様申出置、矢張り御軍役方江扣居候処、四ツ打切比表坊主を以梅之間江相廻り候様承候ニ付、則相廻候処、御側御用人伊木七郎右衛門・向井新兵衛・御側役山口直記なと罷在、差図被致候、左候而無程於椿之間豊後殿引進、石見殿席詰ニ而、御名代嶋津又四郎殿ニ而、若年寄と被　仰聞、席詰石見殿より左之通、

一若年寄

御役料高三百石

新納内蔵

右之通被

仰付、御役料高被下置、席順嶋津久馬次可罷在候、

二月

右之通被　仰付候ニ付、御請御礼申上相下り候、則表坊主先立いたし、御家老座三之間江扣居、御用人末川久馬呼出、若年寄御役被仰付候ニ付、御座江罷通候儀相伺候処、豊後殿江被相伺候処、則罷通候様致承知候

付、其通罷出、直ニ御家老座主居之方末席江相詰候、
尤客居高席周防殿、主居上席豐後殿、客居二番目喜入
多門殿、主居二番目石見殿、客居三番目樺山伊織殿、
主居三番目若年寄島津右門殿、客居四番目島津求馬殿、
主居四番目拙者也、
一御家老六人之内、川上筑後殿・末川近江殿江戸詰ニ而
候、若年寄右門殿・求馬殿ニ而今日拙者被仰付、二人
ニ罷成候事、
一大目付座江吹聴旁ニ参り候事、大目付鎌田圖書殿・川
上矢五太夫殿両人ニ而候事、
一御内証之御礼等は、当分御在府ニ付無之候、大奥江は
八ツ退出より罷上り、御広敷御用人江相付申上置候事、
一用達之儀兼而致出入候、当分横目助伊東直左衛門懇望
之段承候ニ付、於拙者も先祖代由緒有之者ニ付、仕合
之至存候付、横目助御断申出、御免之上直ニ用達之願
差出候処、則今日願之通被仰付候、早速より諸事脇并
ニ相勤候事、

口上覚

〔朱書〕「本文料紙小奉書竪紙

願之通御太刀二種一荷
進上ニ而来月朔日御礼
被仰付候、

九月廿八日　筑後

右御用人末川久馬取次を以被仰渡候事、」

私事、今日若年寄御役被仰付、難有仕合奉存候、依之
御序之節、御太刀二種一荷進上仕、御礼申上度奉願候、
此旨御申可被下候、以上、

丑二月廿五日　新納内蔵

口上覚

〔朱書〕「本文料紙小奉書半切」

私事、今日若年寄御役被
仰付、難有仕合奉存候、依之御序之節誓詞被仰付被下
度奉願候、此旨御申可被下候、以上、

丑二月廿五日　新納内蔵

覚

〔朱書〕「料紙右同断」

私事、今日若年寄御役被仰付候、依之御軍役御手当之儀承知仕度奉存候、此旨御申可被下候、以上、

丑二月廿五日　　新納内蔵

覚

〔朱書〕「料紙右同断」

一若年寄

一御役料高三百石

一持高弐百八拾九石弐斗四升余

一当年四拾七歳

一居屋敷千石馬場

右は私事、今日若年寄御役被　仰付候ニ付、明細帳為御見合、此段申上候、以上、

丑二月廿五日　　新納内蔵

口上覚

〔朱書〕「料紙右同断」

願之通被仰付候、

二月　　石見

右之通則日御用人末川久馬取次を以被仰付候事、」

御小姓与
伊東直左衛門

右は私事、今日若年寄御役被　仰付候付、右直右衛門事、用度被仰付被下度奉願候、此旨御申可被下候、以上、

二月廿五日　　新納内蔵

口上

〔朱書〕「料紙小奉書切紙
上包美濃折掛
本文御名代之又四郎殿江」

私事、今日若年寄御役被仰付、御役料高被下置、難有仕合奉存候、為御礼参上仕候、以上、

二月廿五日　　新納内蔵

口上

〔朱書〕「料紙等右同断
本文御家老方江」

私事、今日若年寄御役被仰付、御役料高被下置、難有仕合奉存候、為御礼伺公

仕候、以上、

二月廿五日　　新納内蔵

口上

〔朱書〕「料紙等右同断

本文同席方江」

私事、今日若年寄御役被
仰付、御役料高被下置、難有仕合奉存候、為御礼致伺
公候、以上、

二月廿五日　　新納内蔵

一今日八ツ時迄相勤、退出より大奥江罷上り、御広敷御
用人江相付御礼申上置、直ニ下り候、夫より上之方島
津求馬殿江見廻、滑川江参り、氏神并御牌前江拝礼共
いたし、夫より川上矢五太夫殿所江吹聴旁として見廻、
夫より浄光明寺・福昌寺江参詣夫より周防殿江御礼見
廻、夫より又四郎殿江同断、并豊後殿・右門殿江見廻
夫より石見殿江見廻、内証迄罷通り、今日旁致世話給
候礼共申置罷立、夫より荒田江打向参り、喜入多門殿
・樺山伊織殿江御礼見廻、夫より南林寺江致参詣、夫
より帰宅七ツ半時分ニ而候、用達直左衛門も始終致供
候事、

一今日難有被仰付候ニ付、親類中并兼而出入之面々都而
相招、且御家老座書役等も七人程参り候、惣人数余多
ニ而候、名前略ス、賑々敷致祝、難有かり奉り候事、

一二月廿六日、今日出勤、八ツ退出、

一此内より取付居候栖居替未最中ニ而、一昨日御用致承
知候より猶又大工共致出精呉候ニ付、本宅・納戸・湯
殿辺取散候処も、昨日八ツ後よりハ栖居出来候様相成、
帰宅之時分ハ敷付等も立派ニ相調居、祝ひ客女性向も
有之候得は、納殿・湯殿なと栖居替出来、折能座披キ
いたし、家内一統致喜悦候、勿論此内は精々栖居向等
も取細メ、召仕之人数も相減し置、家作も不手廻ニ而
候故、雨洩破損等多候ニ付、此度之訳ニ付、猶又諸所
少々ツヽ取繕共可致及吟味候事、

一二月廿七日、左之通願出候、

口上覚

願名

駿河

〔朱書〕「料紙小奉書切紙」

右は松平内藏頭様御名前差合申候間、右之通名替御免被仰付被下度奉願候、此旨御申可被下候、以上、

二月廿七日　　新納内藏

右之通月番御用人末川久馬江直出之筋を以、書役より差出置候事、

一二月廿九日、出勤いたし候、四ッ後水仙之間之格を以、於御家老座伊織殿より左之通、

内藏事

新納駿河

右之通改名、願之通被仰付候、

二月　　伊織

右之通被仰付候間、御礼申上置候事、

一今廿九日江戸江之飛脚出立ニ付、江戸御方々様江御礼等、左之通申上候事、

一筆啓上致候、

太守様

宰相様

御前様

若殿様、益御機嫌能

(島津斉宣女子)勝姫様　(島津重豪女子)柔正院様

(島津重豪女子)親姫様　(島津重豪女子)眞華院様

(島津重豪女子)桃齡院様　(島津斉宣女子)聰德院様

(島津斉宣女子)寵姫様　(島津斉興女子)晴雪院様

(島津斉興女子)順姫様　(島津斉興女子)智鏡院様愈御安全

被遊御座奉恐悦候、然は私儀去廿五日以　御名代若年寄御役被仰付、御役料高三百石被下置、重畳難有仕合奉存候、御礼申上度各様迄如是御座候、何分茂御取成奉頼候、恐惶、

二月廿九日　　新納駿河

川上筑後様

末川近江様

右御銘々拾四通ニ相認料紙小奉書折紙、左候而他所江被為入候御方様は、三百石文字ハ相除候事、

一筆致啓達候、

〔朱書〕「中津」　〔朱書〕「福岡」

左衛門尉様　美濃守様

〔朱書〕「松山」　〔朱書〕「八戸」

隠岐守様　遠江守様

益御機嫌能被成御座奉恐悦候、然は私儀今般若年寄御役被仰付、難有仕合奉存候、此段為可申上各様迄如是御座候、以御序宜御取成頼存候、恐惶謹言、

二月廿九日　新納駿河久仰判

〔朱書〕「中津」

生田四郎兵衛様

奥平長門様

山崎主馬様

奥平主税様

逸見志摩様

〔朱書〕「福岡」

奥平桓麿様

猿橋又之進様

浦上數馬様

吉田久太夫様

野村隼人様

立花平左衛門様

〔朱書〕「松山」

竹内久六様

竹之内九八郎様

〔朱書〕「八戸」

川勝内記様

木幡文内様

逸見元次郎様

中嶋武兵衛様

右銘々四通ニ相認、尤料紙同断ニ而江戸江差越候事

一筆令啓候、

（島津斉宣女子）
隨眞院様愈御安全被遊御座奉恐悦候、然は私儀去廿五日、以
御名代若年寄御役被
仰付、御役料高被下置、重畳難有仕合奉存候、御礼申上度御自分迄如此候、恐々謹言、

二月廿九日　　新納駿河久仰判

本田仲右衛門殿

右料紙中奉書折紙

一筆致啓上候、各様弥御健勝珍重奉存候、然は私儀去廿五日、以
御名代若年寄御役被
仰付、御役料高ハ三百石被下置、重畳難有仕合奉存候
此段為可申上如是御座候、恐惶謹言、

二月廿九日　　新納駿河久仰判

川上筑後様

末川近江様

右料紙小奉書切紙

一三月朔日、今日初而月番承候、月番書役市來連右衛門
・徳尾彦兵衛ニ而候事、
（島津斉彬女子）
一典姫様当年初而之御雛飾ニ付、今朔日大目付以上江御
菓子・御酒等被下候間、御家老座ニ而頂戴可致旨、先
日御広敷御用人より口合有之ニ付、其通今日於御家老
座致頂戴候、草餅并羊かん・煎粉餅・御取肴・御酒ニ
而候事、
一右初御雛ニ付、三役中より御肴進上いたし度申談、大
奥御膳所江調方相頼、明後三日進上之手当有之候事、
一此節難有被仰付候ニ付、今朔日御家老座書役惣人数八
ツ後より召呼、酒共振廻ニ左之通、

御右筆頭
奥掛勤　染川喜三左衛門

長崎御付人
書役勤　永田與右衛門

御右筆
奥掛勤　迫田甚助

御右筆

奥掛勤
伊集院直五郎
唐船役
書役勤
蓑田傳兵衛
右同
市來傳藏
右同
岩山八郎太
御家老座書役
山口喜三右衛門
竪山郷之丞
福永直之丞
大野五左衛門
畠山吉次郎
伊地知仁兵衛
平田直助
川上喜右衛門
書役助
有川七之助
東郷八郎

市來連右衛門
染川喜八郎
御膳掛書役
伊集院次左衛門
鎌田曾右衛門
東郷源左衛門
御帳掛書役助
上村休助
井上直左衛門
五代傳左衛門
益滿萬左衛門
有馬雄之介
堀平右衛門
德尾彦兵衛
知識七之丞
年中記清書掛書役
橋口彦五郎
上村彦四郎
春山彦右衛門

外ニ江戸詰
五代忠兵衛　上村十左衛門
田畑平左衛門　長野彦七
市來正之進
琉球詰野元一郎・堀與左衛門ニ而候事、

書役助之内、有馬新之丞と申者罷居候へとも、去春比より病気有之、今暁病死候由、
右一統之人数支有之分六人、外ハ都而退出より参候、
右ニ付吸物・五ツ膳部・菓子等迄差出、後々ニ而引取有之候事、
亭主振として、新納喜右衛門・相良源兵衛・竹下三次等相頼候事、

一三月三日、典姫様初而之御飾ニ付、今日三役中拝見被仰付候間、四ツ時後大奥江罷通候様、先日より致承知候ニ付、其通三役中一所ニ御広敷江罷通候処、御年寄出迎挨拶共有之、直ニ御書院江案内有之、御家老方江差次罷通候処、御書院御飾夥敷人形ニ而、奇麗成次第申上様無之候、左候而御近ク罷出致拝見候様、御年寄并御側御用人伊木七郎右衛門案内ニ而、難有委敷致拝見候、夫より　典姫様御部屋之方江罷通候様、是又御年寄より案内ニ而罷通候処、御小座敷江別而小キ人形等沢山御飾、是又奇麗ニ有之、難有珍敷拝見仕候、左候而上席豐後殿可罷下被致候処、御姫様只今御寝ニ而候得共、御目見被致間敷哉と御年寄より被申候付、直ニ豐後殿初御裏座之様成所江御寝被為在候ニ付　御目見仕候、至極御安眠之御様子被為在候、余程御太り被為在、難有御様子奉伺候、左候而順々罷下り、又候最初之御書院末之方江着座仕候様承候ニ付、其通罷在候処、御茶・御菓子共被下候間、一統頂戴仕御礼申上、夫限り打下り候、又々御家老座江罷出、九ツニ退出候也、

一同日此節難有被仰付候以後、産土神并諸所墓参等不相調候付、今朝窪田諏方社江参詣、退出より福ヶ迫諏方社并興国寺・深固院・月香院・大興寺江参詣、且周防

殿・讃岐殿江先日御着共被下候ニ付、御礼旁見廻、南林寺山中墓参等いたし、七ツ半比帰宅いたし候事、御家老座書役勤蓑田傳兵衛、近日出帆ニ而琉球江渡海之筈ニ付、左之通書状共相認頼置候事、

一筆致啓上候、御出帆後大島より之御問合早々相届、其以来便船無之、御左右相待居候処、十月十五日海上御安全被成御着船候由、同十七日附之御問合昨三日相届致披見候、弥御堅固被成御座珍重奉存候、誠ニ以遠海難場何之御差障も無之御安着、無此上目出度奉存候、定而則より御心配事多候半、致遠察候、乍然先々異船来着も無之、英人も平和之模様、少しは御仕合之儀と奉存候、於御当地茂御軍役方何れも不相替、拙者茂無替罷在候、乍然貴様御出帆以後は老人役之故、別而心細罷成、全体剱銃等之業合ハ大形ニ而罷過居、且又御手当帳等猶又しらへ方ニ相成、色々相談ニも預り旁、御用筋誠ニ大切之事ニ付、実ニ大心配ニ而候得共、兎角蒙

尊命候上は、心ニ及相勤候外無之と、只はめ付日勤いたし居候処、先月廿五日若年寄御役被　仰付、御役料高三百石被下置候旨蒙

尊命、誠ニ存外之仕合ニ而、何共冥加之至難有次第奉存候、左候而惣頭取之儀は、同日嶋津登殿江御勘定奉行ニ而兼務被仰付候段は疾ニ御聞も可有之、誠ニ以拙者儀乍無調法者、去春蒙　尊命候以来、兎角其地江茂相渡御交代いたし、何分下手之一杯可相勤含ニ而、彼是御詰合申上置候処、右之仕合内心表儀と難有さハ筆舌ニも難尽奉存候、此上は貴地御滞在何共御苦労之段ハ無限候得共、折角御精勤被成何卒被安尊慮候様、御手涯偏ニ奉願候、勿論今暫ニ而御交代ニも可相成候間、御気先キ不禿様御心掛被成度、呉々奉存候、乍暫御同席ニ相勤、段々預御懇意候、御礼廻は御吹聴旁先々如是御座候、猶細事は期重便候、

恐々謹言、

内藏事

新納駿河

三月四日

川上式部様

尚々気候至而悪敷土地之由及承事候間、折角御自愛被成、御勤候様奉存候、

一筆致啓達候、遠海無御滞十月十五日御安着之由、先以目出度存候、其後弥御堅固被成御在勤候由、爰元御出帆前後安田・岩元も出立、正月初旬ニは松岡も出帆、段々人数出入ニ相成、拙者儀は無異相勤罷在候処、先月廿五日若年寄御役被　仰付、御役料高三百石被下置候段蒙　尊命、何共難有次第冥加之至奉存候、去春乍無調法者御同様被仰付候以来、何れ貴地江も相渡御交代いたし、一往は相詰可申儀と差はまり罷在候処、右之仕合誠ニ以難有次第奉存候、此上ハ誰そ渡海被仰付、一所ニ御交代可相成、今暫之御滞在ニも可有之候間、誠ニ御苦労之御勤務なから、折角御精勤被成度致祈念候、誠ニ以暫御同席いたし候得共、段々預御懇意候間、先々此内之御礼且御吹聴申進度、如是御座候、尚余条期重便候、恐々謹言、

三月四日　　内藏事

新納駿河

田中源五左衛門殿

尚々気候不宜場所之由候間、折角御自愛被成度、乍慮外、治右衛門江も別段不申遣候間、何卒宜敷御伝声奉頼候、

一三月八日、此節難有御役被仰付候付、島津石見殿初御家内方并川上矢五太夫殿初御家内方、殊ニ矢五太夫殿養子菱苅宰之丞殿、近比引越有之、お元との婚礼も有之、旁今日能折柄ニ付相招候間、八ツ後より何れも御出被成候、右ニ付亭主前新納主税殿其外少々兼而之人数相頼候、且画師森養淳召呼、席画共為書候、今日之馳走振り、吸物・五ツ取肴・右ニ応し膳部共差出候事、宰之丞殿は初而被参候ニ付、金子百疋目録差送候、尤両所より進物共有之、此方より御家内方江似合敷軽キ品物共差送候事、